

フレッツプ・トリップ

北原白秋

青空文庫

フレップの実は赤く、トリップの実は黒い。いづれも樺^{からふと}太のツンドラ地帯に生ずる小灌木の名である。採りて酒を製する。所謂^{いわゆる}樺太葡萄酒である。

揺れ揺れ帆綱よ

心は安く、気はかろし、

揺れ揺れ、帆綱よ、空高く……

おそらく心からの微笑が私の満面を揺り耀かしていたことと思う。私は私の背後に太いロップや金具の緩く緩くきしめく音を絶えず感じながら、その船首に近い右舷の欄干にゆったりと両の腕をもたせかけている。

見ろ、組み合せた二つのスリツパまでが踊っている。金文字入りの黒い革緒のスリツパが。

心は安く、気はかろし、

揺れ揺れ、帆綱よ、空高く……

私の今度の航海は必ずしも物の哀れの歌枕でも世の寂^{さびし}葉^{おひ}を追いかつる風狂子^{ふうきようし}のそれでもなかった。ただ未だ見ぬ北方の煙霞^{たまし}に身も靈^{たま}もうちこんで見たかつたのである。ほとんど境涯^{おもいよこしまなし}的にまで、そうした思^{おも}無^{なし}邪^{なし}の旅ごころを飽満^{あまん}させたかつたのだ。南国生れの私として、この念願は激しい一種の幻疾^{まぼろし}ですらあつた。いまこそ私は年来の慾望^{こままる}を果し得ることを喜んでいい。私はまさしく樺太觀光団の一員として、この壮麗な高麗丸^{こままる}の甲板^{いそ}上にある。

心は安く、気はかろし、

揺れ揺れ、帆綱よ、空高く……

ハロウとでも呼びかけたい八月の朝^{あさ}風^{なぎ}である。爽快な南の風、空、雲、光。

なんとまた巨大な通風筒^{みみあな}の耳孔^{みみあな}だろう。新鮮な藍と白茶^{しらちや}との群立だ。すばらしい空気の林。

なんとまた高いマストだろう。その豪壯な、天^{ちゆう}に沖した金剛不壞力^{ふえりき}の表現を見るがいい。その四方に斉整した帆綱の斜線、さながらの海上の宝塔。

ゆさりともせぬ左舷右舷の吊り短艇ボートの白い竜骨。

黄色い二つの大煙突。

あ、渡り鳥が来た。耿こうとして羽裏はうらを光らせて行くその無数の点々。

煙だ。白い湯気だ。その無尽蔵に涌出するむくりむくりの塊り。

しかも、見るものは空と海との大円盤である。近くは深沈としたブリユウブラックうしおの潮の面めんに擾乱する水あさぎと白の泡沫。その上を巨おおきな煙突の影のみが駛はしってゆく。

北へ北へと進みつつある。

ハロウ、ハロウだ。

心は安く、気はかろし、

揺れ揺れ、帆綱よ、空高く……

そこで、私は支那服をつけているのだ。初めてつけたこの麻の支那服の著心地きこちのいいことは、実に寛々かんかんとしてさばさばしている。その薄藍いろの上衣には唐草模様の釦ボタンどめが鮮かな黄の渦巻をなしている。五つも六つものポケットだ。それから雪白せつぱくのだぶだぶと

したズボン、りきゆうねずみ利休鼠のおわんぼう椀帽。

今朝から変装して見て、すこしく気恥かしいが、私には却ってこの方がしっくりする。悠々とくつろげていい。

なんと青い深い耀きをもった空の色だろう。私はマッチを擦る。掴つまみの厚い土トルコ耳古煙草に火をつける。

香炎、こうげ香華、香雲、香海。

心は安く、気はかろし、

揺れ揺れ、帆綱よ、空高く……

いい旅だなと、私は思う。

こうして海洋の旅を続けるのは、私としては小笠原おがさわら渡航以来十三年ぶりのことである。だが、かつての南の空は明るかったが、私のまぶた目は重かった。今の潮うしおは暗いようでも、私の心は晴ればれしい。人生の浮沈というものは一向に測りがたいものではあるが、とにかく今の私は平穩である。少くとも幸福である。

今度という今度、廉物やすものではあるが私は腕時計というものを初めて購あがなった。それからこまごまととのえたものには洋杖ステッキ 蝙蝠傘こうもりがさ、藤いろ革の紙幣入かみいれ、銀鎖製の臺口がまくち、毛糸の腹巻、魔法罫、白の運動帽、二、三のネクタイ、艾いろの柔かなズボン吊、鼠いろのバンド、独逸製ドイツのケースにはいった五、六種の薬剤、爽かな麦稈帽むぎわらぼう、ソフトカラアにハンカチーフに絹の靴下。白麻のシャツに青玉サファイアまがいのカフス釦までつけ換えて、これはどうだいとうれしがった。私は山荘の住人で、平生へいぜい生竹や草や昆虫ばかりの中に立ち交っている、身のまわりなぞは清潔にはしているが、少くとも野趣そのままにちがいなかった。それがアルパカの黒背広に黒の小さな鞆かばんを肩から引き掛けて、「さようなら、行ってまいります。」だから、それは瀟洒な、（色が黒くて肥ってはいるが）さぞ好紳士に見えたことだろう。

ましてや、誰よりも私のこの長旅行を喜んでくださったのは私の両親であった。その前夜には、二人の弟もその妻たちも妹もそろって大森の両親のもとに集あつまった。そうして一同が私のために盛んに杯さかずきをあげてくれた。友人としては私のいわゆる隣国の王と称する（それは童話国の王だからだ。）「赤い鳥」の鈴木すずきの三重吉みえきちが、それこそ上機嫌でびちびちして、「ええのう、ええのう。」で意気が昂あがったすえには、それはまことに枯淡閑寂どじょうな鱈じょうす

くいを踊りぬいて、赤い農民美術の木の盆と共に危くひっくり返りそうになつたほどだ。それから私は両親の寢床の間にもぐりこんで、長い白髯はくぜんを引つ張るやら、皺しわくちやの乳房にかじりつくやら、ひとしきり困らしていたようだが、いつの間にかぐつすり眠りこけてしまつたらしいのだ。

当の七日の正午には、私は桜木町から税関の岸壁を目ざして駛つている自動車の中に、隣国の王やアルスの弟や友人たちに押つ取り巻かれて嬉々としている私自身を見出した。

それから高麗丸の食堂ではそろつて麦酒ビールの乾杯をした。驚いたのは同行すべきはずの庄亮しょうりょう（歌人吉植君）が解纜かいらん前五、六分前に、やつとりボンもつけない古いパナマ帽に尻端折りで、「やあ」と飛び込んで来たことである。「アツハツハ」と豪傑笑いをして一寸頭を搔くと、首をすくめて、

「なに、いや、そのう、銀座でこれをやっていたんでね。」と左を利かせる。あくまでも飄々ひょうひょうとしていたものだ。

「こりやああぶないぜ、吉植君、これから上陸する時には、よほど気をつけないと、そこそ鬼界きかいケ島しまの俊寛しゅんかんものだよ。」

誰やらが一本参つた。

「いや、大丈夫、僕がついてるから。」

「その兄さんがまたあぶないからな。」

「そこは俺が引き受ける。」

「どうだか、二人ともさぞきこしめすだろうな、こいつあ、どっちも剣呑だ。」

また後ろで奇声をあげたのがいた。

ジャランジャランジャランと銅鑼どらが鳴ると、税関前に降りた一同はしきりに万歳をとなえてくれた。それから各自にカメラを向ける。活動写真を撮る。私たちは帽子を振る。次第に遠く遠く、小さくなつてしまつた。

イツテクルヨ、ランランラン

こう私は小田原の妻子へ打電するように弟に頼んだが、船が出ると船員が私の前に「電報がまいっております。」と私を探しに来た。

イツテラツシヤイ、バンザイ、パパ、バンザアイ

私は微笑した。そうして竹林の中の草深い私の家を、土間の篠竹を、また紅い芙蓉ふようや黄のカンナを、妻と二人の子を、その一人は生れてやつと一と月にしかならぬ篋子こうこのことを、夜はまた満天の星座と浪の音と虫の声々とに聞きけてゆく壊れかかった二階のバルコンと寝

室とを私はまた心にふり返った。

健在であれ。

心は安く、気はかろし、

揺れ揺れ、帆綱よ、空高く……

とにかく、幸^{さいさき}先はわるくない。私はまた紫の煙草に火をつける。

や、鯨だ鯨だと騒ぐ声がある。下^{した}甲板^{かんぼん}だろう。

まあいい。そこで、今度の話は印^{いん}旛^{はん}沼^{ぬま}の庄亮君の宅を訪ねた時に初まるのだが、彼は鉄道研究会員の一人で、新聞聯盟の外報部長であるところから、鉄道省主催のこの観光団に五、六人の同^{どう}勢^{せい}と乗り組むはずになっていた。そこで私も勧められたが、その時には何故か浮きたたないで、行くとも行かないとも確答はしらずに酒ばかり飲んで帰った。が、妻に相談すると、連れはいいし、またとない好機会だから是非行らしたがいと、しきりに煽^{あお}り立てた。と、急に足元から鳥の立つような騒ぎになって切符を申込む、印旛沼へ電報をうつ。それでももう締切にぎりぎりとかで二等の最後の切符がやっとしか手に入ら

なかった。ところを、研究会の同勢が沙汰止みになって、庄亮君一人となった。で、私はいい工合にその寢室として当てられた最上の特等室に割込ませてもらった訳なのだ。無論増金は出したが、私のために庄亮君が宣伝これ努めたお蔭であるといつていい。

何といつてもこの船一の特等室である。談話室と寢室と便器附きの広い浴室と、三室続きの豪華なものだ。つい前まで関釜連絡船としてのこの船のこの特等室は朝鮮総督の使用室だったというのである。私の親愛な友人は私を大きな寢台に寝かしてくれて、自分は談話室のソファを仮寢台にこさえさして寝た。そうして、さて改まって私を朝鮮の王様と披露した。

朝鮮の王さまもおもしろい。万事のんびりとやってやる。

そこでこの支那服だが、これはむろん私のものではない。昨夜、そうだ、この船での第二夜、一等の食堂で、期せずして私たちの間に童謡音楽会が開かれた。どうせみんなが酔っていた。私の周囲にはいつのまにやら三等客の学生たちが有りつたけの蛮声を張りあげていた。ピアノを弾く者もいた。踊る者もいた。それをまた覗きに来て、ぞろぞろとはいり込む人々で食堂がいっぱいになった。方々の窓にはまた黒い赭い白い顔と手とが鈴なりにぶら下った。その時、大柄ののつぼうの、それでいていつも棗のような顔をして眼の細

い、何か脱俗している好々爺こうこうやが著て来たのがこれであった。

「これはいい、僕が貰つとく。」

そこで、私の麻の浴衣と脱ぎ換えさしてしまった。すると、背の低い小さい小さい実直
そうなお爺さんの頭にのつけた鼠の頭巾が目についた。

「お爺さん、その帽子はいただきますよ。」

小さなお爺さんはちよこちよこ私の前に来て、その頭巾を「へい、どうぞ。」と差出
した。

「朝鮮の王さま出来ました。」と誰やらが頓とんきよう狂に叫んだ。

一同礼拝、ハハツ、であった。

こうして身につけてしまったのであったが、朝になると、浴衣と帯とは談話室の椅子の
上に畳んでキチンと載つけてあった。となると、支那服は返さねばなるまいが、どうにも
欲しい。で、朝から両手に桜麦酒ビールをかかえ込んで遊びに来た九州は福岡の読売新聞の支局
長だというY君に、

「どうだね、これは貰つときたいが。」とやった。

「かまいませんさ。私が話しときますたい。著ておいでなさい。」

欲しいものは貰ったがいいだろうと私も思った。

「ちよつとそういつて来ますたい。」と、とつかわＹ君は飛び出した。やっぱり九州人はいいなと思つたものだ。

「大丈夫、くれます。」

「しめた。どうしたい。」

「何ですたい。」と、どかりとソファに身体を弾ねかえらして、薄い口髭をちよいとひねつた。円い^{まる}はじきれそうな^{あか}赭ら顔のすこしく釣つた眼尻を仔細らしく細めると、両腕をテエブルに、そして肩を怒らした。どう見ても快活な佐賀男だ。

「話して見ましたもんな。あの爺さん、何でもあれを神戸で買^こうて来て、たつた一度しか手をおさないちいましたけんな。なに、ちつとばかり惜しか如^{ごと}しとりましたたい。そげんかこついうたつちやでけん、あげなさい、何か書いてもろうてやるけんよかたい。そげんか支那服いつでん金ば出しや買^うわるつじやろが。よかよか、俺が善^ゆうしてやるち、うんと恩着せて置きましたたい。そしたら喜んで進上しますといつとりますばい。」

「しかし、惜しがつてるのを無理に貰うのはいけないな。」

「うん、よかよか。とつときなさい。短冊でんくれてやんなさり。そつでよかたい。」と

片手を仰山ぎようさんにうち振ると、それからまた麦酒をグツとひとあおりだ。

「あん爺さんもおもしろか。何でん、下の関で車輛会社をやつとるちいよつたが、うん、やつぱり変つとる。いまに酒でん提げて来させまつするたい。」

元氣旺盛である。

「そりから、まだえれえ奴がおりますたい。肥前の呼子よっこち知つとんなはろが。彼処あっこん王さまん如ごとつとたい。よか親子ですもんな。三等に乗つとりますばつてん、そりや貴族院議員の資格もあるちいよりましたばい。鯨ありん罐詰あばこさえとる。全国に出しますもんな。彼ありば引つ張つて来くう。今度呼子においでたなら、そりやよか、学校ん生徒でん何でんお迎あい出すちいよる。」

「鯨ひげの髭ひげさ。ありやうまいや、粕かすづけ漬づだろう。君。」

「鯨ほねん鼻ほね骨ほねですたい。輪切わぎがえらかもんな。そりや珍めづらしか。好こいとんなはるなら送おらせまつしう。うむむ、後で連れて来くう。」

ここで話が一転して、もう一人の支那服の白髪のお爺さんの噂へ移る。

私はそのお爺さんが初めから目についていた。日本人には珍らしい、若い時はさぞ秀麗しゆれいだったろうと思える、禿はげ上あつた頭のそこらに、真まつ白しろい縮ちぢれ髪かみがもじやもじやして鼻はなの

太くて高い威風堂々とした朱面の持主である。タゴールそっくりと喋っている。いや、それよりも厳いついかも知れぬ。それが白い麻の支那服を着て、一等の談話室の、ラジオの黒い喇叭ラッパが二つ背中合せに立っている緑の大卓おおテエブルを前に控えて、ポケットから大きな眼鏡を取り出すと、白髪頭をひと振り振って両耳へ掛ける。何か書類をいっばいに拵かけて、それは精密に書いたり調べたりしている格好を見ていると、まるで白い牡牛のような活気と精力とが充ち満ちていそうであった。

「おい。」と、昨日きのうの朝だったか、庄亮が私の袖を引いた。

「あのお爺さんどうだい。みんながね、白秋さんはどの人だろうと探している様子だから、ひとつ、あのお爺さんがそうだと喋ってやろうかね。おもしろい。」

「莫迦ぼかいえ。あんな白髪しろがのお爺さんにされちやあ困る。」

「いや、いいよ。あれだあれだ。」と頭をかかえて笑い出した。

その話がまた出ると、

「まあいいさ。ゆうべですっかりお里がわかっちゃまったんだから。」

「あのお爺さんも余程おもしろかったと見えて、おしまいまで、一緒に飲んだり跳ねたりしていたぜ、君。」

「知つとる、知つとる。ほんに酒好きけんな。飲ます事ことちなか。とてん偉ええお爺おやさんの如ごとる。」

「それでむしようにうれしがっていたぜ、君。そして君のことをまるでやんちゃの赤ん坊だ、あれでなくちや詩も歌もできまいと。」

「君の稲葉小僧の新助もだろう。」

アツハツハツと、政友本党では幅利はばききの吉植庄しやういちろう一郎氏の令息で、法学士で、政治ぎらいの、印旛沼は出津でづの開墾家の、お人よしの、どこか抜けている坊さん風の、歌人の、わが友庄亮が頭を叩いて、「閉へい口閉口。」と元から細い眼尻を一倍細くして、赤い顔をした。

何でも、今度の観光団は面白そうだととなつた。一同で選挙した団長が日露役の志士沖おき禎いすけ介の親父おやさんで、一等船客の中には京大教授の博士もいれば、木下奎太郎きのしたもくたろうの岳父しゅうとさんもいる。中学校長もいれば有名な富豪もいる。銀行の頭取、牧畜家、材木業者。それに二、三等にも山持ち、汽船ふね持ち、芸術写真のKさん、小学校長、学生、西洋画家、宿屋の主人、等の種々雑多の階級の人たちが全国から三百幾人と集まったのだ。それが、まだしっくりとはとてもうちとけないで、何かしら氣づまりで固かたく鯨しやちごばっていたのが、昨夜ゆうべ

の童謡音楽会でさらりと流れ、ふわりと和らいでしまった。

「とにかく、あれでよかつたんだ。」

「そうだと私も思った。」

と、「先生はおいでですか。」と誰やらがいきなり飛び込んで来たものだ。

「明日^{あした}仮装会をやるんだそうで騒いでいますが、皆さんに御賛成を願います。なんでもこちらに出ていただかないと、どうもなりません。二等船客総代という格で伺った訳なんです、是非どうかひとつ御声援を。ええ。」

「うむおもしろか、やろ。」とY。

「これでいいんですか、この支那服のまま、それならかまいませんよ。」

「やあ、結構です。ではお願いします。どうぞまた明日引つ張り出しに来ます。」

「いやあ。」と知っているうちに、またポンと飛び出してしまった。

心は安く、気はかろし、

揺れ揺れ、帆綱よ、空高く……

まったく汽船ふねの旅はいいなと思う。ことに夏の海上くらい爽快なものなからう。

第一日は室内の整理やら、入浴やら、何かとそわそわとして暮れてしまったし、明るい食堂の晚餐をも度つつましく片隅に寄つて済ました。それから一等の談話室を覗いたり、甲板の籐椅子へもたれて見たり、自分の寢台へ帰つて仰向いたり、まだ十分の落ちつきは得られなかった。甲板での活動写真の催しも、いたずらに人寄せの技師が不馴れで、ただ急造の白幕に白い円ばかりを出して、そのままコチコチコチコチで中止になつてしまった。

ただ、J・O・A・K、こちらは東京放送局であります。と、はつきりと大きくは唸うなつたものの、すぐとその後から、ゴウゴウゴウと何処どこかの無電がしつきりなく邪魔をしかけて、それからの義太夫も太棹ふとも聴いてる方で頭を鑢やすりでこすられるようで苦しかった。

翌朝はまだ暗いうちから取り騒いだが、大洋の黎明しのめは何ともいえずすがしかった。そのうちに珈琲コーヒーが来る。謄写とうしゃはん版刷の高麗丸新聞が配られる。この第二日もいい風であった。私は午後無線電報を続々と諸方に打つて貰つた。昨日の御礼である。

妻子には、

トクトウニカハツタ、イマヨコハマヨリ二〇〇ノツト、

イチロヘイアン、アア、ヒロイウミ、アライウミ

また、ある東京の友人にはこうも打った。

アア、ソラトウミ、ナミヲハシルハエントツノカゲ

私はまた環^わ投げの遊戯に加わった。それに正午にはまだかなりの間^まがあるうちから、しきりに腹が空いて、昼餐の合図の銅鑼ばかりが待たれて困った。ベルを押すことベルを押すこと。

「紅茶を二つ。」

「こんどは珈琲だ。」

「菓子、菓子。水菓子。林檎^{りんご}林檎。」

遠い、いささか薄紫に煙った北方の空を鷗^{かもめ}が幾むれも翔^{かけ}つた。

ひろいひろい大うねりの黒い波間には、小さな鴨^{かも}ほどの海^{うみ}鳴^{しぎ}が揺られ揺られて浮いたり沈んだり、^{すべ}こたり、落ちたりしている影も見た。何という落ちついた叡智の持主であったろう。その羽は黒く紫に、その嘴^{くちばし}は黄色く、よく横向に尻尾をあげあげ^はこたつた。

それに船側に添って乱れて駛^{はし}りのぼる青い腹の、まるで白^は竜^{りゅう}のような新鮮な波の渦巻^{しおなわ}と潮^{しほ}漚^{なわ}とをつくづくと俯瞰^{みおろ}しては、何とか歌にまとめようと苦吟もして見た。

午後になって、左舷の遥かに金華山^{きんかざん}らしいのが眺められたが、航路というものは、海

岸線には添いつつも、なかなか近くへは寄れないと思えて、おおかたは空と海とのかぎりない大円盤ばかりを周りにして進んで行くのだ。

「ここまで来れば、何も彼も忘れてしまいますね。」とある船客は幾度かの深呼吸の後で、哄然としてその笑いを放った。

「無だな。」とまた誰かがその言葉を飛ばした。

「ロウリング、ロウリング、ロウリング。」と、ある少年は両手と両足を思うさま踏鳴らして舞って廻った。

何処やらでは、のうのうと、声をそろえて羽衣を謡っていた。

笛を吹く人もあった。

まったく、大洋はいいなと思った。

何が世の騒壇であろう。幽人高士のあまりに少い今の乱脈さは、その気品の低く、香気の薄く、守ることの浅い不見識は、あの市井無頼の徒たりとも口にすることを恥ずる暴言と態度の賤鄙せんびと（いや、それよりも下俗な覆面の残虐と私情の悪罵と）あの卑劣とは何事であろう。あの狭隘さは、あの某々雑誌の喧々けんけん々々ごうごうはいつたい何事であろう。あの無秩序な、無差別な、玉石も真贋も混淆したあの評価は、あの妥協は、あの美に対する

放恣ほうしな反逆は。

私がもし秦の始皇帝ならば、焚たくべき書、埋うずむべき坑あなはいかほどあるか。私は相応に知っている。決して文芸に就いては風俗壊乱のみを狙ねらうべきでない。しかもその行使はほとんどが美への冒瀆が多い。むしろ秩序紊びんらん乱の罪悪がどれだけ芸術の正しい品位を破るか。近代は澆ぎょう季きなりと時の人が嘆いたあの戦慄すべき保元平治時代よりもまだまだ今日の芸術の一部は浅ましい。墮落だらくしきつてるような気がする。

芸術とはあんなものでない。大だい乗じようの、大雅たいがなものだ。

この空を、この雲を、この風を、この海を、この光かが耀やきを見たがいい。

私は今日も、空を吸う、雲を吸う、風を吸う、海を吸う、この光耀を吸う。

ハロウだ、まさしく。

心は安く、気はかろし、

揺れ揺れ、帆綱よ、空高く……

また、腹はらが空すいた。もう昼ひる餐めしの銅鑼どうらが鳴るのもじきであろう。

どれ、ケビンの甲板に下りて見ようかな。

や、ゴルフをやってるな。

誰だ、いったい。あの桃いろのスカートを跳ね跳ねして、まるで乳房の張った馴鹿トナカイの
ように踏おどっているのは。

すばらしい、すばらしい。

心は安く、気はかろし、

揺れ揺れ、帆綱よ、空高く……

海上の饒舌

銀の雄弁といたいだが、これは銀鍍金の饒舌だ。

またなんと恐ろしくしゃべる、ちよつぱり髭の赤いぺらぺらの舌であろう。

私は呆れて見入っているのみだ。

時は八月の九日午後二時——三時、処は横浜を北へ去る少くとも五百海渚の海上、今やまさに津軽海峡の中間を進行しつつある観光船高麗丸の後甲板。

演者は誰ともわからぬ。

俗間に濶歩するお一二の学生帽に紅の帯紙を貼りつけ、黒い髭をぴんと生やし、詰襟の黒服の右肩には緒繩か何かのまがいの金モウルを巻きつけ、両の筒袖にはまた銀星をちりばめた幅広の紅紙を巻き、腰にはブリツキの手製のサアベルをさええ吊るし、さて、そのサアベルの柄頭に左の手を後へ廻り気味に当て、腰をかまえ、りゆうと胸を反らすと、右の手で黒骨の金に大きな朱の日の丸の玩具の軍扇をサツと拡げて、口元近く煽いだり裏返したり、上げたり下げたり、時には「えへん。」と声づくろいをしてからに、

得意気に、やや諛おちもねつて、ええ、さてと、帽子の鍰つぽを一つ叩くと、

まず、初めは、「近頃流行の安来節やすぎがし」と手前口上で、一歩退ると、えへんとやったものだ。さて、この海軍参謀、ちよんがらちよつぴりの小男でござい。

安来千軒せんげん、名の出たところ、

コラサツと、この時、箆ざるを前のめりに、ひよろひよると、横つ飛びに躓よろけかかった黒んぼがある。此奴こいつの面かおの黒いこと、鍋墨なべずみと墨汁すみじりとを引つ搔かき交せて、いやが上に、処ところきらわず塗り立て掃き立てたと見えて、光るものはただ両つの白眼しろめばかりの、部厚な唇だけを朱紅に染めてから、てっぺんから孔のあいたお釜帽子に、煤いろの襪ぼろの腐れ鯁にしんの臭気においでも放ちそうなのに、縄帯をだらしなく前結びにして、それも画かきちらした髯かみむじやの黒い胸をはだけ、手も足も、それこそ真つ黒々に汚よごしきつて、すなわち早速さそくの鱒じようすくいと来た。

コラサツ。

それは頓狂な、両肩両腕を大袈裟に振り立てる。爪立つまだち、蹲かがんでくるりとやるかと思うと、ひよくりと後足あとあしで跛びっこをひく。とんとんとんと箆を拍子で、スツと掬すくうと、また腰を使う、右を見たり左へ傾かしいだり、眼を剥むき、でんぐり返すと、そのまた、反頤そりあごを突き出

し、突き出し、またひよくりとやる。鼻はこする、水つ洩はなはかむ。箒の中は掻きまわす。嗅いで見る。おくびはする。穢きたならしいの、厭いやらしいのといったらぬのだ。淫猥とも俗悪とも、それがその悪達わるだつしや者なだけにととも見るに堪えない代物なのである。

社しゃにち日ひざくららに十神とがみやま

やんややんやと、観衆が笑いこけこけ喝采する。手をたたく。それをいいことにして、「ええ、今度は詩吟入り、おなじく安来節。」と日の丸の軍扇が胸を叩く。

「よし来た。コラサツと。」

黒んぼの奴、すっかりお調子に乗って、いよいよ出でていよいよ妙ちきりんな姿態しなをする。跳ねる、飛ぶ、眼で媚こび、股でひねる。日の丸も負けず劣らずである。味をやる、いきいきい声を出す。

ああ、日は小さくもないのにな。夜になれば夜で、月も星も光るのにな。

考えると、踊にも高下こうげがある。それは踊る人の気品によるのだ。すぐれた気品は表現以上の心法しんぽうの鍛錬たんれんから来る。つまりは内から映発するのだ。奥の奥の人柄の香気だ。芸は道なり。深く心を潜めてこそ行為にも光る。詩を生むのも踊に現わすのもその精神とするものは凡すべては一つで、二つではあるまい。この流通こそはおのずからに現われて来るも

のだ。だからたとえば、私も踊る。ではあるが、私の踊は父とも母とも妻とも子とも弟ともおどれる踊だ。三重吉の鱒すくいも、あのままがあの人芸術と同じ高さの心で現れる。踊の玄くろうと人にしろその心の鄙いやしさをその巧妙な手振りでは蔽おほいかくせぬものがある。だから、これは教養だ、人だ。

鱒すくいはそこらの百姓が踊ればそこらの鱒はすくえるであろう。だが、月の光は、星のまたたきは、田水たみずの、または根芹ねせりのかおりは、土の香かは、青い鱒の精霊は、品の低いともがらにはすくえない。

月の光を切々とすくう鱒すくいの端たんごん厳いんさはかつての鏡きよう花散人も見たものだ。

それに、何ぞや、この日の丸は、黒んぼは。

さて、それでも黒んぼの鱒すくい、流石におしまいはへとへとに疲れたと見えて、くるくるくと小鼠のように転廻すると、右手に並んで取澄ました仮装団のまん中へとどたりわアとこぼれてしまった。と、白粉おしろいべたべたの洋装婦人の立膝たてひざがもろくもぶつつぶれて、「あ痛つ、こん畜生。」となる。大笑いだ。

ところが、金モウルの日の丸の意気はいささかも衰えないから呆れたものである。

「さて、このたびは追分。」

やや仰向き加減に眼を細め、口をすぼめて。それでも美しい声は出る。

大島ア……………小じまアの……………

あいとお……………るウ……………ふねエエは…

江差し……………がよ……………いかアよオ……………

なつかし……………イイ……………や……………

「もうひとつ。」

帯も……………十勝……………にかち……………に……………

その……………ま……………ま……………ねむ……………ろ……………

落石……………おちいし……………イイ……………なみだ……………は……………

ほろい……………ず……………ウウウ……………ウ……………み……………

「うまいぞツ。」と声がかかる。拍手拍手。

「ええ、今度は新潟甚句。」「ええ、さてその次といたしまして三がい節。」「関の五本

松。」「さのさ。」「喇叭ぶし。」「キンライライ。」「へらへらへ。」「八木ぶし。」

鈴木主水……………もんど……………というさむらいは

女房……………こどものあるその中に、

きょうもあすもと女郎買いばかり。……………

カッタカタア、カッタカタ。

「ええ、こんどはストトン節、籠の鳥、枯れすすき、鴨緑江おうりよっこう、まったく以て休憩なしのぶつつづけとごさい。」

それがやつと済むか済まぬに、また姿勢を立て直すと、やりもやったり、

「ええ、さて、今度も一人で代りあいまする事なり、流石さすがに代りばえもいたしませぬが、えへんのえへんのえへん、烏賊捕口説いかとりくどきとどうじやいな。」

励む、サーイ、励む励むと烏賊釣商売、今日はよい風、日も入りござる。勝浦、法木ほうぎの島船しまぶね、小船、浦の真船まふねの出鼻でばなを見れば、姐あねも妹いもも皆乗り出して、艀ろをおし押し、にまきの先に、おせなおせなとさぶかせ通れば、風もいし、かつまを通れば、せじた宵鳥賊、せがらし宵鳥賊、ながせながさき流れて通れば、風は南風みなみで、下り帆さがが早い、おしやく沖から錨いかりを下ろす。波も静かでねぶりすりすり、簑鞆みのさやははずす。空のすんばり、荒崎沖よ。明星あけぼし出れば船足ふなあし遅い。遅い船足たのしり沖よ。これでなるまい、楫かじをかきかきおとじをはずす。おとじはずせば法木の前よ。ちかちか明あけの鴉からすの鳴くこ

えきけば、首尾えい首尾えいと島中に告げる。内の婆ばさまたち早や目をさます。にまにつきたる子供のはても、遊ぶひまなく大漁だいにりよう繁昌で暮らす。ヤンレ。

「ええ、地蔵舞まい歌うたとはどうじやいな。」

なにかかにか出そうだ。なにかかにか出そうだ、何舞とかに舞と、地蔵舞を見さえな。地蔵舞を見さえな。地蔵よ地蔵よ。地蔵は尊そんだから、何して鼠にかじられべ。鼠こそ地蔵よ。鼠こそ地蔵なら、何して猫にくわれべ。猫こそ地蔵よ。猫こそ地蔵なら何して狼に負けべ。狼こそ地蔵よ。……

「さて、東と西せい東とう西せい、魚さかなづくしはどうじやいな。」「野菜づくしはどうじやいな。」「鱈た捕口説らとりくしはどうじやいな。」「何とか何とかどうじやいな。」「謎々何とかどうじやいな。」

何とか何とか何とかで、何とか何とか申すなら、何とか何とかべいしやらで、何とか

何とがべえしやらで、そのまた何かは何とかで、ええ、何とか何とか何とかじゃあ…

………

立板に水というが、これはまた高梁コウリヤン畑に榴散弾でもぶち撒くように、パラパラペラペラと、よくその舌のまわることまわること、一人で二時間立てつづけの、早口の、とても目にもとまらねば耳にもとまらぬ薄っぺらの赤い舌の先きのプロペラではある。

「えろう、早うはよおまんな。何というてやはるのやな。」

「へへん、雲雀ひばりの生れ代りだつせ。あかん。」

「あやつアくさい。気狂きちげじやろうのう、あんまり饒舌しゃべらすもんな。」

「どうしましたい。まだやつてますかい。やれやれ。」

「驚いたね。よくもあの舌が廻るもんだな。ハーン。」

「えれえ、えれっちや。」

「ヤハハイ、ヤハイ。」と少年たち。

「止よしやがれ。」ピーと誰かが口笛はしを奔らす。

「ああ、ああ。」

「ああ、ああ。」

「ああ、ああだ。」

「はあ、へえだ。」

初めはその諧謔、淫靡、精根、類の無い饒舌の珍らしさに、後から後からと黒山のように群つて、盛んに拍手し喝采もしていた聴衆も、あまりの目まぐるしさに、それに長い時間をたつた一人で遮二無二押しとおすその単調さに、ぼつぼつと、ああああと欠伸びし出て来た。

「誰だい、いつたい、彼奴は、船客かい、船員かい。」

「誰だか、何だか、海坊主でも匍い上つたもんらしいぜ。これからそろそろ韃鞞海だからね。」

誰ひとり、その銀鍍金の饒舌家を知る人はなさそうに見えた。何でもうまく変貌していたにちがいない。

ところで、前に書くはずなのを、うつかりしていたが、ちようど、この日の昼餐が済むと、直ぐから、二等船客発起の仮装行列なるものが、それこそジャランジャラン騒ぎでケビンの甲板を一周し二周したものだ。私までが幾度も幾度も引つ張り出されたが、今

更となると、どうにも気恥かしいのだが、後からただ蹠たづいてまわるには蹠たづいてあるいた。おそらく、何の工たくみもなく、ただ支那帽に支那服のまま、いつもの通りに自然にあるいていたのは私一人だったろう。だが仮装といえはいえるであろう。素面すめんといえは素面であろう。粉飾するのみが仮装ではないのである。

壊れバケツに金紙の両眼を貼り、金の髭をつけ、それを一人が冠かぶつて、その頭から青毛布の波を躍らしうねらし、一人がその尻にもぐつて担ぎあげて、飛んだり跳ねたり、それが日本医専の獅子舞であった。このバケツの獅子を先頭にして、箒ほうきを負うもの、炭取すみとり函ぼこを首から掛けるもの、例の黒んぼ、赤い風呂敷のスカートの紅毛婦人、支那人、宣教師、按摩あんま、軍人、ヤンキー、アイヌ、似ても似つかぬ世界各国の人種共がそれは滑稽百出で練りあるく。見るから汚らしくて乱雑で愉快でないところの非美術的な一列であった。それが、観客のなだれに押しまくられ突きまくられて、とどのつまりが船尾の一端に坐り込みの、芸づくしということになったのである。

だが、青毛布のバケツ頭の金の眼の獅子の勇氣は譬えようもなかった。まことに獅子こそは百獣の王だと見られた。しかしだ、それも二度か三度か跳ね廻ると、意外にもくたくたと解体して、青毛布は尻尾の方にずるずると持つて行かれてしまった。それから黒んぼ

の鱈すくいだが、これも汗みどろの大吐息で、顔から手から白^{しろまだら}斑^{まだら}になってしまった。ヤンキーでもアイヌでも歌わせれば歌えそうにも立ちつ坐りつしていたが、それもただ千年も万年も続けば続きそうな日の丸の独り口説にいよいよ気を腐らしたものが、または八月の暑熱に倦^{うん}じて軽い眩暈^{めまい}でも起したもののか。うとりうとりと、傍^{そば}から傍^{そば}から寝ころんでしまった。

それにもかかわらず、「何とか何とかどうじやいな。」はたつた一人でもおかまいなしの、ペラペラペラで、いつになったら止^やまるものか、そうした気配の微塵でも見えぬ根気よさには、いかな辛抱づよい静観者の私とてもひた呆れに呆れて、ただもうおとなしく引き退るよりほかはなかつた。

で、私は甲板をひと周^{めぐ}りした。どうにも頭が病めてしかたがなかつたのである。が、私はその後^ご甲板へ帰って見ると、それこそ眼を瞠^{みは}って驚かねばならなかつた。

あのペラペラが、日の丸がフツと掻き消えていたのである。そればかりではない。仮装の連中も観客の一人の影さえ、もう其^{そこ}処には見られなかつた。ただ、一面に日の照らしが白く明るく、板と板との継ぎ目の塵埃^{ごみくず}屑のにじみさえが光り耀っていた。午後四時過ぎの涼しい静謐^{せいひつ}が其^{そこ}処にはあつた。帆綱や欄干^{てすり}やケビンの何かの影も映っていた。

それは一時間と経つことか。たった十分か十五分のほんのちよつとした短時間のことである。それがどうだろう。あの恐るべき饒舌の何の名残も、あの金扇や日の丸の朱も、チヨビ髭も、サーベルも、金モールも、お一二いちにの帽子も、何一つとして、其処には影の影だに止めて居らないのだ。初めから何の踊りも口説も演歌も、あの淫靡も悪趣味も、其処には起らなかった、そうしたことを夢みるのはまるで痴人のたわいもない幻想としか考えられなかったのだ。

「何と驚いたお饒舌しやべり家やだったろう。だが、何と驚いた雲散霧消だろう。まるでお饒舌りの神様見たいな奴だったが。いや、お饒舌りの神様だったかも知れんて。」

私はまたあたりを眺めまわした。

津軽の連山は幽かすかであった。だが、北海の丘陵は右舷に近く迫っていた。何という雑草の青の新鮮さ。海はまたかぎりなく明るかった。やや紅べにと金とを交えた牛酪バタいろの一面のはるばるしい漣さざなみであった。いよいよ夕風だなど、私は私の船室ケビンの方へ、穩かに、また安らかに歩みを返した。

小樽

旅にまで来て、十五、六年前の幽霊をかついでまわるのは何という愚かなことだと、私はつくづく朱筆しゆふでを投げてしまった。小樽おたるの色内町いろないちようのキト旅館の二階での歎息である。私は処女歌集の、「桐の花」の改訂をやっているので、その校正刷をここまで提鞞さげかばんにしこたま詰め込んで来たものである。しかも私の校正なるものは普通の校正ではない。ともすると改作になる。改作というより全然の新作が加わる。

乳にゅうりよく 緑りよく のびろうどの河豚ふぐ責めふくらし昨日も男涙ながしき

こうした歌を校正しているうちに

さみどりのちひさ河豚の子上げ潮のしほさる安く群るるこの頃

という風の歌が出来る。そうした時には、私はきつと二十七歳の夏の私に還っている。ちやうど第二詩集の「思ひ出」を上梓した頃だ。私は筋肉炎という未だかつて聞きもしなかつた病氣にとりつかれて、かきがらちよう蠟殻町は岩佐病院の一室にほとんど五十日余も入院していた。大手術を受けたのであつた。その病後の療養に、私は小田原の御幸ヶ浜みゆきへ一と月ばかりほど転地していたことがあつた。ああ、あの頃だつたなと思うと、私の追憶には青い青いひろしげ重の海の色や朝夕の潮騒の音が響いて来る。何かにつけて涙ぐましい自分であつたなと思う。

あかしやの花さく見れば水の上にはへかなき夏の夢もやどりぬ

片恋のわれをあはれと鈴麦の花さくそひ傍を通ひ来にけり

夕青き微光の中をあがりゆく足長蜂は足を垂らせり

玉赤き蠟マツチする草のなかすでに螢の臭におひ気むせべり

こうした所しよえん縁の深い新作が増補として、「第二桐の花」としてでも加えられねばならない恋々たる気持にもなる。何という情痴であらうと果敢はかなくもなつた。

ああ、あの頃だ。私は若かった。木下柰太郎も吉井勇も長田秀雄も若かった。ゲエテの門番の孫で、伊上凡骨の弟子の猿づらの彫刻家独逸人のフリッツ・ルムプも若かった。桐の花とカステラの時代だ。緑金暮春調の時代だ。紺と白との燕や骨牌の女王の手に持った黄色い草花、首の赤い螢、ああ屋上庭園の青い薄明、紫の弧燈にまつわる雪のよう
 な白い蛾、小網町の鴻の巣で賞美した金粉酒のちらちら、植物園の茴香の花、大蒜の花、銅版画は司馬江漢の水道橋の新緑、その紅と金、小林清親の横浜何番館、そうして私たちの「パンの会」、永代の一銭蒸汽と吊橋、小伝馬町は江戸の白
 い並倉と新しい東京の西洋料理店、椅子に三味線、紅提灯に電灯。切支丹伴天連の南蛮趣味。

春の鳥な鳴きそ鳴きそあかあかと外の面の草に日の入る夕べ

歎けとて今はた目白僧園の夕べの鐘も鳴りいでにけむ

鐸鳴らす路加病院のおそぎくら春も今しかをはりなるらむ

草わかば色鉛筆の赤き粉のちるがいとしく寝て削るなり

いつしかに春のなごりとなりにけり昆布干場のたんぼぼの花

手にとれば桐の反射の薄青き新聞紙こそ泣かまほしけれ
横網に一銭蒸汽近よるとまはるうねりも君おもはする

こうしたわかき日の抒情歌にうき身をやつした軽い背広の私ではなかったか。

あかしやの金と赤とがちるぞえな、
やはらかな秋の光にちるぞえな。

あの小唄は私の爾後の歌謡体の機縁を開いた。永井荷風氏が褒め、新しい「白樺」の人
たち、武者小路、柳、志賀、里見、萱野の諸君までがロダン号の巻頭に寄せ書して、あれ
を読んで片恋の身に相成候とか何とか盛んに慇懃を通じて来たものだった。そう
だ、あの少し以前に、私たちの雑誌『屋上庭園』は私の官能の色濃い新詩「おかる勘平」
で発売禁止になったものだ。ちょうどその晩に、小伝馬町の三州屋の階上で、荷風、有
明両氏をはじめ私たち「パンの会」の一連が集って盛んに鬱憤を晴らしていると、その
席へ有島生馬君の携えて来たのが『白樺』の創刊号であった。それから時代が次第に浪

漫派から人道主義に転々して行ったものだったな。それにいわゆる新感覚派の芸術といえ
 そうな開放運動はあの以前木下杢太郎や私なぞが夙とうに済まして来たものだったな。

だが、時は過ぎた。赤い蒸汽の船腹の過ぎゆくごとくである。

「かお、かお、かお、かあ、くるつくるつ。」

や、鴉だなど私は向うの電柱の頂てっぺん辺を眺める。無数の白い碇がし子と輝く電線、それに漆
 黒の鴉が四、五羽も留っている。紫に見える。

「くるつくるつ。」

これは鴉の独ひとりごと語である。実に円い音ねをころがす。上機嫌の場合にそれが限るのであ
 る。

鴉は並んだり、向きを換えたり、上へ跳ねたりする。子鴉だなど私は見ている。と、葛か
つしか飾の生活が目めに浮んで来る。私は子鴉とよく話をした。よく遊んだ。しかし、それが今
 に何の係りがあるう。

この現実の灰色の亜鉛屋根トタンばかりの、それでいて尖った旧式の裝飾頭かざりをつけた棟の連続、
 汽船の煤煙、薄ら寒い輝かぬ海港、雲の群れて曇った空、そうした見馴れぬ北ほっこく国の風物
 に直面している私である。埃ほこりと雨との沁みついた硝子障子ガラスはことごとく閉めきつたままだ。

習慣とは恐ろしいものだと思う。それにどの敷居にもただ一筋しか開閉の途がないのだ。それでいて、流石に夏は夏である。暑い、蒸される。それでいてまた、硝子障子がガタガタと響く、風が吹きつける。

だが、せめて北の方でも一枚ぐらひは開けてもよきそうだと、私は卓上電話の受話機を採る。とその埃りつぽい薄膜うすかわの耳がポロリと落ちる。それを慌あわてて継ぎ合せて「もしもし」である。

鳶とびのような大鴉がまたしつきりなく屋根から屋根へとわめく。

「小樽というところは鴉の多い港だよ。」私は小田原の我が子へ書く。

スイカダ、スイカダ、ランチ、ランチ

つい、着いたばかりに発信したが、あの高麗丸から海岸の西瓜の山を瞥べっけん見してそれこそ子供のようにに小躍りした鮮新さや、青や白や鼠色ランチの馳せちがう、やや煙で黒っぽい油絵風の画趣からも、今はもう午前十時の観想は離れてしまった。

そこだ、現代の未来派でやつつけば、

鴉、鴉、鴉、鴉、

灰色、灰色、灰、灰、灰、トタン 亜鉛、トタン 亜鉛、トタン 亜鉛、

尖塔、電柱、線、線、線、線、

+ × △ □、!!!!!

2 幽霊、H₂O 過酸化マンガン。チリチリチリン。

である。

私はまた「桐の花」の校正刷に目を移す。船中でもこれのお蔭で随分と陰鬱にもされた。弟の書肆しょしでは急いでいる。初版通りで済ませば済むものを、旅先まで昔の幽霊を背負ってあるく自分も自分だなど深い心の底から溜息も出る。それでも、何とか一、二字を生かせば生きるあの頃の真実も目につく。青春は二度とない。見果てぬ夢の香気と色とは今だに連想の林に薄紫の桐の花をあゝあゝ 髪々あゝあゝと匂わしたくなる。考えるとまだまだ歌い残したものがおびただ 夥しい。かといって、あの現実と空想との限界もつかなくかつた年少の恍惚とほの甘い感傷とは、この頃の集には入れられないのだ。正面から歌えもしない。昨今の私の詩歌はくんせ 燻製の鯁だ。燻製の鯁と桐の花と一緒にされるものか。ほんのかりそめの煩惱であるが今のうちに一寸でも昔に還って見たい。いい機会だ、この機会を取りはずして永遠に寂しい

私になりそうな気もする未練である。ないしよで、こつそりと、こつこつ、ほのぼのである。やっぱり夢は見たいのだな。

が、何という鴉だろう。話にきくと、北海の鯨場にしんばには三角眼の不良鴉が跳梁ちようりようして、いるそうである。子供の頭には乗つかる、突き飛ばす、赤銅色の漁師の腕はすり抜ける、鼻衆かかあの洗濯物はばたつかす。猾智ほかつちで放埒ほうらつ極まるものだそうである。まるで鴉の王国といった風だそうである。初めて私はこの小樽でそれを思い当った。

今の私は以前の私ではない。現実という黒い鴉が私を見ている。燻いぶし鯨の私を。

白き猫膝に抱けばわが思ひ音なく暮れて病む心地する

この浮薄げんきと銜気げんきとを省みると、何が音なく暮れてだ、何が病む心地するだろうと赤面する。そこで朱線しゆせんを引いてしまう。

白き猫ひそけき見れば月かげのこぼるる庭にひとり戯あざれぬ

これと換えよう。どうだと、昨日きのうも船の中で庄亮の方へ向くと、それは観想が深過ぎるという。昔の歌ではない、今の君の歌だという。それでも越前堀の月夜の庭で、真実に同時に見たものだど私が答える。ただあの時は見てはいたが歌えなかつたのだ。それが今の技巧で出て来たのだ、構やしないだろう。と私は意地を張る。だが、ちがつたのは技巧ばかりじゃないよと彼はいう。ふふむ、あの頃の生活ということを考えて、今度の新しい歌集にも入れられない、かといって、「桐の花」ともちがうとすると、仕方がない、逆戻しかとまた私が折れる。その方がいい、過ぎ去った昔の歌集に入れるのは惜しいじゃないか、今更誰だつて新しいものとは見てはくれまいと庄亮君がいう。それから、幼稚でも済んだ昔なら仕方がない、諦めるさとまたいう。それもそうだ、一旦吐いてしまった自分の息は取り還せるわけはないからな。ではいつそ、何も彼も初版かどおりにまた遣り直しやしだな。それも大変だな、印刷所が今度は怒るぜ、さんざん直させてまた逆戻しとは人を莫迦にするのも程があるというにきまつている。呆れはたものだなど私が頭をたたいた。それでおしまいかと思うと、まだ、上陸するところからこのキト旅館で、あの無数の意地悪鴉を恐れ、それこそ極内密ごくでまた、こつこつ、ほのぼののである。何の因果かと思うのだ。

*

「種馬の交尾でも見に行つた方がよかつた。」と私はまた灰色の空と海とを眺める。

それはこういうことなのだ。

いよいよ高麗丸が錨を下ろすと、船中が一斉にざわつき出した。私たちもすっかり身支度を済ました上で、ともかく甲板の腕椅子へ凭つて、初めて見る小樽港の眺望を物珍らしく取沙汰していると、「やあ。」と麦稈帽をとつた紳士があつた。名刺を出すのを見ると、札幌鉄道局の電気課長のA君だ。庄亮とは学友なのだそうだ。そこで庄亮がまた「やあ。」と立つてゆくと、その人は一寸物かげへ引つ張つて行つて何か手真似していた。

「やあはつはつ、」と庄亮が頭をかかえて、顔を赤くしながら笑い笑い出て来た。「どうしたんだ。」と訊くと、

「そのなんだよ。」と生真面目になつて、「種馬の交尾をないしよで見せたいといつてるがね。君、どうする。」

「ほう、何処で見せるんだ、それは。」

「道庁の牧場だといつていたぜ。すばらしいんだそうだ。」

「そりやそうだろう。だが、今晚の歓迎会はどうか。」

「それもだが、君が校正を済まさないで、僕は鉄雄さんに申訳もうしわけがないがね、昼間中は勉強してくれたまえよ、上あがつたらすぐ旅館に鎮座あがして、誰一人寄せつけないことにするからね。」

「籠城ろうじょうかい。だが君、今日一日引籠ひろうつたところで、とてもできそうにないよ。だから。」

「だが、僕は困る、ちゃんと仕事させますと約束して来たんだからな。」

「驚いたな。君の監督も怪しいもんだぜ。」

「あつはつはつ、僕だけは一杯やりに行く。君の邪魔になる。」

「置いてきぼりかい、いやだなア。」

で、種馬見物は帰りにでもということにしてもらって、そろそろと出迎いの歌人たちに交はしつて階梯はしを下りかける、すぐにランチに飛び移ると、

「兄さん、おい、兄さん。」と、別の大型のランチから、逞たくましい面かおの浅葱あさぎの背広かおが呼び立てた。

「やあ、〇かい、いたのかい。」

「いたのかいもないでしょう。わたしが小樽に来ていることは、兄さんだつて知っているはずだ。もう一年にもなるじやないか。のんきだな。」

「のんきだといつても、すっかり忘れていたんだ。あつはつ、いたのかい。」

「いたのかいもないもんだ。さつきから二度も三度も呼んでいるじやないか。」

「そりやあ誰か呼んでるとは思つたさ、だが、俺を呼んでるとは思わなかつた。君だつたかい。」

「そうさ、ランチまで持つて来ているじやないか、早く此方へお乗んなさい。」

庄亮は「あれは僕の甥でね、やっぱり印旛沼だよ。あつはつ、すっかり此処にいたのを忘れていたんだよ。」と笑つた。甥といつても大きい甥御さんだつた。元氣澆刺としてござる。

そこで皆が大型の方へ乗り移ると、ぼうと汽笛が喚く。揺れる揺れる。煙が吹きまく。壮快壮快、海岸には西瓜の山だ。丘だ、煙突だ、レールだ、そして防波堤だ、浮標だ。

波を蹴立てて、風の薄寒い港内を一まわりすると、ランチが岸へ着いた。横浜を出て四日ぶりで陸地を踏むのである。うれしくないことはない。気が軽い。それが一、二町も歩か歩かないうちに、旅館へ送られてしまつた。

「実は、その、白秋君はね、仕事を持って来てるんで、非常にいそがしいんだ。で、一人で置かないと勉強して貰えないのでね。とにかく奉って、夕方の歌会の時に迎えに来てほしいんだがね。実いうと折角A君が種馬の交尾を見せるというのを断ったくらいなんだからね。」

早速にその社中の歌人たちを帰すと、庄亮自身も飛び出してしまった。

やれやれと私は思った。それからくるつくるつの子鴉の啼声になったのである。

私は浴衣の肩や膝や畳の上に巻煙草の灰ばかり落ちて、手は赤インキだらけになって、それで何一つ片づきそうにもない。

午も過ぎたが、連れも帰って見えない。電話はきらいだし、手はたたいてもきこえず、やつと廊下を通る草履ぞうりの音を聴いて、そこで昼飯の支度を命じたが、待てども待てどもお膳は出ない。いったい、北海道の旅館は悠長だとはきいたが、これには驚いた。

上陸する匆々そうそうから一人でぼつんと膳に向うのは寂しいものだ。ビフテーキの堅いことがまた切れるはずのナイフさえ徹らないのだ。女中はつつましいが、想像していたような東北弁ではない。楣間びかんや床の置物などを見まわしてもやつぱり東京だ。で、寂しいが旅情というほどのものは起らない。もつと違った意味で寂しがりたい私の心もちはすっかり裏

切られた。

全く私は北海道の旅館といえ、もつと暗鬱で、女中などはアイヌ見たようなのがいて、言葉も碌ろくに通じはしまいと、迂闊にも思っていたのだ。それがまた非常な興味を予想させられたものだ。これは幼年時代の恣ほしいな童話的ま空想がそのままに頭の何処かに残っていたらしく思える。

二十一、二の頃、そうだ、私が石川啄木に逢つてまだほんの二、三度目の時だったと思う。

「君のお国はどちらです。」と私が訊いたら、

「盛岡の在です。」と彼は答えた。

「そうですか、奥州や北海道は、僕の国では鬼でもいそうなどころだと思つていますよ。五、六百里も北だからね。」それはほんの何の気もなく、むしろ親和の心で私は微笑していったのが、それが彼の性来の癩癬かんぺきにきつく障さわつたらしい。私には答えないで、すぐに隣りにいる人に向つて、

「I君、君も鬼のいる国の人だね。」

と両肩をスツと怒いからしていった。それで私は吃驚びっくりして、

「君、君、僕の国だつて熊襲だからね。」
と大真面目であつた。

「じゃあ、鬼の一種だね。」

「うむ、そうだよ、君の方から見れば鬼の一種だろう、やっぱり。」

あの頃も何かといえは反抗心の強い、負けずぎらいの少年だったな、啄木は。もつとも細君は持つていたが。

「姐さん、一寸、このビフテーキを切つてくれないか。」

と今も私は頼んだ。女中はカチカチやつていたが、その皿がお膳から反りかえりそうになつても、コチコチで、そのうちカチヤカチヤ、くるりと皿ごと廻つてしまった。

「牛肉と馬鈴薯」といえば、独歩の小説から連想しても、北海道には野となく丘となくふかし立ての馬鈴薯が雪のように積り、熊の毛皮を着た髭むじやのアイヌやシャモが、その中に群居して埋まつて、それらの窓や戸口から、手や頭やを出すとむくむくもぐもぐ馬鈴薯ばかりを食べているような気がした。いったい誇張は芸術なりで、私は何でも大袈裟に物を考えるのが好きな方だ。だから、牛肉でも、あの牛屋に吊したような赤と白茶の片脚だけのが、内地は百姓屋の軒や周囲の荒壁にぐるりと掛け連らねた唐辛子、唐黍、

大根の如く、いや、それを十層倍にしたぐらいの大きさのものが、まるで牛肉の祭礼のようだといひと思えたものだ。それがすっかり幻滅してしまった。

それに口取も猪口もお椀も、何から何まで、貝類ばかりなのも弱った。これでは夏の江の島へ行つたようで、北の小樽とは思えない。

やっと食膳を片づけさせて、またぼつねんと一人となると、やっぱり札幌の牧場にでも行つて種馬の見物でもした方が、よっぽど有意義だつたらうと悔しくなる。雄大な自然の中で、奔放な種馬が跳躍し交尾し歓喜する壯観は、それは稀に見るすばらしさだろうとも思える。それに光り輝く光線、風、草いきれ。

それに私は幽霊の二乗を背負つて、折角の真夏の旅の一日を引つ籠っているのだ。

たまたまた下の洗面所に顔でも洗いにゆくと、目に入るものは、赤錆いろの鉄分の強い坪ばかりの池の水と、萎えきつて生色のない八つ手の一、二本である。

*

二時頃になつて、庄亮が、小樽新聞社のM氏と連れ立って帰つて来た。二人とも相当に

酔っている。氏は三木羅風君の義父おとうさんだと紹介される。そこで羅風君の話が出る。ついこの出発の前夜に私たちが逢ったことも私は伝えた。M氏は庄亮のお父さんの永年の乾分こぶんだと自身をしきりに私に知らしていた。酔眼朦朧もうろうとしていられた。

「何処で飲んだのだい。」と私は庄亮をふり返った。

「いや、つい近所の洋食屋だがね。」といっているうちに、女中はトマトにマイナスソースをかけたのと、蟹のコキールとを二皿持つて来た。これらは感心に勉強していたので御褒美だそうである。

牛肉はコチコチだったが、トマトの新鮮で美味なものには驚いた。流石に北海道だと思えた。

これは素敵だ、これは素敵だ、とうとう私一人で食べ尽してしまった。

そうして光りかがやく紅くれないのトマト畠を想像して見た。そうした北国ほっこくの野菜畠の外光はどんなに爽快だろう。そうした畠の斜面は。

かつて小笠原の父島ちらしまにいた時、私は朝となく、夕べとなく、この赤いトマトを食べべ恍れていたものだ。だが、亜熱帯のそれは何かしら熱気が深く籠っていて、これほどの冷えびえとした舌触りは無かったような気がする。

ただ、あの島の日光は全く金色こんじきに照り輝いていた。午後の二時三時になると、まっ白い雲の光までが底深い金色にぎらぎらした、どんな油絵具でも、あの強烈な光は出せなそうに思えた。それに犬の男根のような若芽の護謨苗ゴムや、浅緑の三尺バナナや、青くて柔かな豆の葉や、深い緑のトマトの葉、褐色の鳳梨パイナップルやが、朱紅色の土の上に、まるで印度インド更紗さらしのように、いやそれよりも生々しい極彩色の絵模様として綴られてあった。その中にくわ鋏打つ人もその朱紅色の土の香かを深く嗅いで、悶絶しそうであった、素っ裸で。

と、島独特の黄色い円い面かおをした童子が赤いトマトの累累るいりいとつまつて盛り上つた竹の籠を両手に擁えて、山坂などを上つて来る。その髪の毛に円光が立つ。私は或日、とある山道の曲り角でそうした童子と、突然に遭遇であつて実に驚いたものであった。行き過ぎてからでも私は後ろを幾度振り返つたか。礼拝したくもなつた。

だが、小樽や札幌のトマト畠が果してどうした香氣の風景であるか。その漿しょうすい水の発散は、光線の層積は、まだ私の目には浮んで来ない。

「吉植君。君も印旛沼を開墾したらトマトをこさえろ。」

「こさえるとも。」

「五十町歩すつかりトマト畠にしてしまいましたまい。」

「やああ、それでは飯が食えなくなる。」

*

私の語法は現在格で進める。この方が楽だからである。

そこで、フィルムが変る。

夕方、庄亮の主宰する檄かんらん社の小樽支部の人たちや、此処で出している『原始林』の同人たちが五、六人で迎えに来る。私の仕事はそこでひとまず明日の出帆前のことにする。入浴して、さて晚餐を済まして、会場へ行くとういうのだが、宿の方の支度がなかなか整わない。

「どうも北海道は悠長ですよ。」と誰やらがいう。

「それも何処か雄大でいいさ。」と私が笑う。

「雄大は妙ですな。」

八時半にやつと総勢で自動車に乗る。

駛はしる、駛る。私は早朝上陸して、この夜になって初めて小樽の市街を見るのだ。

「や、明るい明るい。」

全く、通りは広いし、電燈飾は華美だし、雑踏する群集も真夏の軽装だし、一々にそれらが鮮新な発光体となつて遊泳して、両側のシヨウウインドウの中までが、まるで水晶宮のように水々しく照り反すと、花屋がある、植木屋がある。それから活動小舎がある。絵看板がある。のぼり幟が並ぶ。銀座と六区とを一つにしたように殷賑いんしんである。

「縁日だね。」

という間に何か公園の入口らしいところで自動車が停まる。矢野倶楽部クラブである。

二階の広間へ上ると、四十余名の会者がすでに集つて三方に居流れている。床柱とこばしらの前に二人が据えられる。みんなが一斉にこちらを向く、そうして堅くなつてゐる。

潮音の旧い社友で、土地の歌壇で元老株のお医者さんのやましたひでのすけ山下秀之助君がいちじょう一場の歓迎の辞を述べて、これが済むと、また皆が私の方を向く。講演は嫌いだから初めからお断りしてある。それにどうも挨拶といつたところで、私などは結論が序論と一緒にまつてしまふので一言二言いさばいつもそれでおしまひになるのである。

まあ、立ち上つて大広間のまん中に進んで見た。

「エー、今晚は偶然の好機会で、こうして皆さんにお目にかかれたことを愉快に思います。」

何かいろいろお話したいと思いますが、どうも私には結論が先きへ来て困る。皆さんも顔だけ見ればいいといわれる。で、とにかくこれが私——白秋です。よく見て下さい、一寸と廻つて見よう。」

そして三遍同一点でぐるぐると廻つたが、廻っているうちにおかしくなつて笑い出してしまった。

座につくと、「今のは踊の手が交つたようすな。」と誰やらがいう。

「そうかな。踊じやないよ。」

庄亮はと見ると、本来が雄弁家だが一人で喋舌しゃべつてもわるいと思つたかして、簡単に

「皆さん、ありがとうございます。」と頭を下げてすました。そこで一同が急に寛くわぎ出した。笑い声が方々に起つた。

それから歌会に移つたが、一方の壁に半紙一枚に一首ずつ歌を書いて、四十余枚の歌を一々に批評するのである。庄亮君は坐つたまま、

「このお歌を拝見いたしますとお。」と一々に演説口調でいう。

私は貼紙の傍まで行つて、朱筆で、難点に傍線を引いて、何かと指摘しては、こうむつかしくしてはいけなかなとも考えさせられる。庄亮は馴れているが、本来私には歌会の

形式が好きでない。

思うに運座とか互選とかは、こう大勢ではともすると無意義になるのである。一視同律であまりに酷きびしく批判すれば、初心の人は怖おそけ、または恨むであろう。また真に熱意の無い人が二、三あるとすると、そうした人にかにこちらから説話しても真実に要を得させることはむつかしい。で、先方の心が真に道を求めようとして動きかけるまでは、黙っていた方がいい。と私は常に思っている。一つには自分にも出来もしない癖に差出るまでもないと思うからである。

だが、この晩の歌会は非常に静肅おそに了おえた。よく統一されていた。

二次会は新中島しんなかしまという宏壮な家で有志の人たちだけで催された。煌々こうこうたるシヤンデリヤの下で、置酒交歓、感興成つていつ果つべくも見えない。土地の美妓びぎも数多あまた見えた。

半折はんせつや短冊を後から後からと書かされる。初めには忸怩しゆくじとして差控えたが、酔うに従つて書くに従つてただそのことがうれしくてならなくなる。踊もおどった。伊奈節や麦搗むぎつき踊おどり、一同が輪になつて踊つて廻まわっているうちに夜がほのぼのと明けてしまった。

「あまり書いてはいけないよ。」と庄亮から叱られる。帰り途の自動車の中では〇君から「あまり踊つてはいけませんよ。」

とまた叱られる。

「おもしろくてしようがなかったんだ。やあ。」

一寸と頭をかかえてしまった。

*

「や、すばらしいトマトだな。」

若紳士戸塚君が実に清新なトマトを一籠^さ提^さげて来た。

「これはいい、船で十分に食べられるぜ。」と庄亮が喜ぶ。

「大きいのは俺が食べることにする。」

「や、そりやとにかく、君は仕事はどうしたい。」

「もう止^よした。幽霊の重荷は御免だよ。それにとっても間にあいそうにない。第一昔の歌ばかり改訂していたんでは、何のために旅行に出たかわからなくなる。陰鬱になる。君の監督はこれで辞任してもらいたい。将来に生きることをしてしないでどうするのだ。僕はこの旅行を全然楽しむ。」

「そうか。わかった。もう何にもいわぬ。」

さあ出かけようとなる。決断してしまうと、心から晴々しい。口笛でも吹きたくなる。往來に出る。

心は軽く、気は安し、

揺れ揺れ、帆綱よ、空高く……………

「やあ、先生。」と九州男子のY君が胸を反らして髭をひねって来る。

「やあ、どうしました。」

「定山溪へ行たて来ましたたい。団員は誰でん行た。そりやあ面白かつた盆踊が、ほんによか温泉ですばい。そりから、誰でん知らんばってん、わしだけ上の方に今朝早う行たて見ましたもんな。よかつたあ。川に白い鳥が二羽浮いていましたたい。短艇も貸さずもん。お帰りなつとん行たて見なはるとよか。そりばってん、熊ん出ますもんな。うむむ、まだ今は出んちいいよつた。」

日本医専の生徒の美少年のSがまた角帽で、絵具函を片手にぶら提げ、小躍りしながら

やって来る。

「先生、札幌はいいです。あかしやがいい。大通りの中に花畑があつて、子供が遊んでいて、実際美しかったですよ。東京よりいいです。それに大学や植物園の楡エルムがいいです。素敵。」

「ほう、いいな。画いて来た。」

「ええ、沢山。」

京都の若い警部さんで温厚で真摯な紳士A君がまた眼鏡を輝かし輝かし帰って来る。

「牧場はいいですよ。月寒つきひやぶの牧場は、雄大で羊シープがいて。ええ、行って来ました。向う

に野幌のっぽろの原始林が見えますね。それに地平線までが緑ですからね。もつとも月寒の夕

方がいいそうです。夕日の頃が、羊シープを追って帰る頃が、まるで日本ではありませんよ。」

惜しいことをしたなと思う。

と、飄々ひょうひょうとして下の関の車輛会社の中ちゅうじい 爺じいさんが来る。

「先生、ようべはお楽しみ。お盛んでしたな。へへへ。」

「や、あんたもあの家へ行っていましたかね、向うで騒いでいたのはきつと、そうだ。」

「先生、鎌かけよつとばい。そげんすぐ欺されなはんならでけん。こん爺じいさん嘘しらごと言いい

たい。なあん、小樽で遊ぼか、定山溪に行たとらしたですたい。」

「ふふ。」と爺さん笑い出した。

「わしあ、よか事ことした。今日たい。小樽へ帰つて来つと馬車くん一台居おつたもんな。そこで五円札ば、うんち投げ出でえて、何処どこつちやよかけん、五円がぬしつ汝ぬしがよか事ごつ駈かけさせちいて、じやらんじやらんじやらんど駈かけ廻まつたもんですたい。愉快どでしたもんな。大臣どになつたごたつた。」

ランチだ、ランチが出るぞう。

ぼうう………。ランラン、ラン、ジャン、

「やあ、高麗丸だ、高麗丸だ。」

「幽霊退散万歳。」

「そうだ、万歳。」

心は軽るし、気は安し、

揺れ揺れ、帆綱よ、空高く。

おおい、おおい

光り耀かぬ波、一面に滑らかな乳黄色の波、何かしら薄ら寒い遠い眺めの海。明るいうでも、それは燻いぶざれている。何かしらまた空にも寒い靄もやがかかって、窮みもなく日の光が光らずに流れてゆく。小樽を出てからの展望はいよいよ北海らしい感じを深めて来た。それに幾分は曇天でもあった。ともすると明日あしたあたりは雨になるかも知れないとさえ私も思えて来た。

「見たまえ、あんなに日が当たっても、波の面一つ光らないんだからね。」

私の友はこういつて、甲板の籐椅子から延びあがって見て、またのそりと腰を下ろした。ノートにしきりに歌を書きつけている。

「そうだな、何だか急に昼が短かくなつたようだ。」

私も隣の籐椅子に凭よりかかつて、しげしげと何か白い鳥の飛ぶのを眺めていた。

「お腹も空いたようだな。君、何か食べないかい。」

「それより、お湯にはいりたいね。」

「そうだな、夕飯でまた一杯やるとして、その前にはいつとくかな。それにしても紅茶でも取ろうや。」

「よく、君はいけるね。よつほど健康な胃ぶくろだと見える。」

「健康だとも。いいかい。呼鈴ベルを押すぜ。」

私たちはまた自分たちの談話室にはいり込んでしまった。

と例の九州男のY君が、一人の実直まことそうな白面はくめんの若者を引つ張つて来た。

「やッ、先生、この仁ですたい。松浦王の息子さんですもんな。ほんによかけん。」

「ほう。」と私はその方を見た。「さあどうぞ。」とクッション付きの華奢きゃしゃな椅子の一つを指した。

Y君はどかりと窓際のソファに腰を下ろして、グツと後ろへ凭もたれ気味になる。

「出して見なはり、その鐘詰かねづめば。」と、それから此方こつちを向いて、

「こつですたい、鯨の鼻骨は。粕漬かすですもんな。まだ野菜漬やさいづもあつたらが。うむ、そりそり。」と、またもう一つの鐘詰かねづめを新来の客に出させる。

「こりば、先生せんせいに上あぐつちいいよらす。食べて見なはつとよか。そりやうまか。小樽こづで買って来こらしたたい。自分の家の鐘詰かねづめですもんな。うむ、日本中の何処どこ行いたつちや売うつとる

「^{しょう}小松浦王はまだ立ったままだが、温和な微笑を^{かお}面に漂わして、謙遜に、しかも何処かに闊達な意気をひそめている。口数が極めて少い。やさしい眼だ。

「それは難^{ありがと}有う。それではUISキイでも抜くかな。」

そこで、角罫の栓がポンと鳴る。鈴^{ベル}の鈕^{ボタン}を押す。ボーイが来る。煽風機が廻り出す。

「へへへへ。」と赤ら顔の車輛会社のS爺さんがひよろりとやって来た。もうだいぶきこしめしている。

「お酒盛ですかい。先生、わしはお恨みを申しに来ましたがな。へへ。」

「どうしたのです。まあ、お掛けなさいよ。」

「ええ、難有う。」と、ソファの尻、Y君の隣に、ぐにやりとして、両膝に手をついた。眼がとろんとしている。鯨の赤肉^{あかみ}見たいような顔の皮膚だ。

「支那服ですがな。支那服。あれは喜んで進上申すと、このY君にもいうとききました。先生の御希望じゃ。それはありがたい。結構じゃで、喜んで、進上と。」

「こん人酔うとる。もうそげんか事^{こと}いわんちやよか。」Yは元氣だ。

「いや、お恨み申す。それをそのお返しになった。これは理窟^{りくつ}じゃが、折角の志。」

「そりやあ、僕も欲しかったんだがね、ちょっと惜しそうに、あんたがしていたというから、お返したまでさ。人が物惜みするのを貰ったってしようがない。」

「物惜しみ。これはおかしい。いつたい、どの仁がそう申したか。怪しからん事じゃな。」

「俺がいうた。ほんな事じやろが。」とY君が口髭をキウと一つひねって、

「うん、よかたい。一杯飲みなはれ。」

「いや、いただきますまい。わしがボーイを呼ぶ。そういう事なら、一倍お恨み申す。わしの面目めんぼくが丸つぶれじや。先生、御用心さっしやれじや。今度こそはどえらい仕返しをし申すで。」

「よし、よし、わかった。わかった。」

「わかりやしませんがな。わしの子分を連れて来る。ボーイ、麦酒ビールだ、麦酒だ。——おおい。」

ふらふらと立ち上って、そのまま甲板へ出たと思うと、

「おおい、おおい。」

おおい、おおいと、海豹あざらしも

海のなかから呼んでます。

どうせ、薄雲、北の海、

おおいおおいで日が暮れる。

*

とうとう日が暮れてしまった。

いかにも何かしら物寂しい風と煙である。色と響^{ひびき}である。光のない上の世界と下の世界、その間を私たちの高麗丸のスクリユウが響く。機関が熱^{ほて}る。帆綱^{ほづな}が唸る。通風筒の耳の孔^{あな}が僅かに残照の紅みを反射する。

あ、書くのを忘れた。あの後、私は専用の雪^{せっぽく}白^{はく}の湯槽^{ゆぶね}の中に長々と仰向きになった私自身であつた。船中でも入浴ほど心の安まるものはない。私は湯にひたり、薄紅い角^{かく}の石鹸をいつまでも私の両掌^{りょうて}の中に弄^{もてあそ}んでいた。なんと温かな、いい匂であらう。私はまた蓮の実型の撒水器の下に立って、頭からさんさんと水を浴びた。新しい浴衣の下に、改めて薄いメリヤスの襯衣^{シヤツ}を着こんだのはそれからであつた。思いなしか、ひえびえとした気

流が昨日とは何か変つて感じられたものだ。

私は船室ケビンの前に出て、空いていた籐椅子の一つに凭れて見た。一列にみんなが並んで、誰もが蒼茫と暮れてゆく北海の薄明りを眺めていた。全く物寂しい風と煙であつたのだ。

フネガデルデルカラフトへ

小樽を出る時、私は小田原の妻子へ、こう打電したものだ。つい三、四時間前のことであつた。私たちは一旦着換を済ますと、しばらくは右舷へ集つて、応接いとまに違ちがもない鮮緑色の海岸線を物珍らしく楽しんでいたが、一人減り二人減りすると、私もまた左舷の自分たちの甲板へ還つて来た。其処には先きにいったように遥々はるばるとした大洋があつた。あの光のない、ただ明るいだけの波濤の連続が。

その波濤の面おもての金と紅とが乳黄となり、やや寒い瓏ろうぎん銀となり、ブリュブラックとなり、重く暗くなり、そうして今は舷下の飛沫と潮しおなわ漚なわとがただ白く青く駛つて、擾みだれて、機関部の汚水がタツタツと吐き出されてゆく。

一寸ちよつとしたウイスキーの酔は、すぐにも発散したし、湯上りのやや肌寒はだたせむを感じずるところへ、明日はいよいよ樺太だと思つと、何か気も昂あがれば、引き緊しまつても来る。

「おい、何を考へてる。」

こうした時、ぼんと肩でも叩かれたら、私は恐らく顔を赤めたであろう。
「郷愁だな。」

そうしたもののだろうなと私は私自身にも答えても見た。

私ばかりでなく、これは籐椅子、木の椅子、安楽椅子のこれらの一列の人々の凡ての顔にも表われている。

おおいおおいと誰やらが

海のはてから呼んでいます。

どうせ、ぬか星、北の海、

おおいおおいで日が暮れる。

と、一斉に燈あかりが点く。ジャランジャランと銅鑼銅鑼が鳴る。

*

煌々たる食堂。それが却つて明る過ぎて、何か今夜は堅苦しい。誰でもが緊張して、以前とは様子が違っている。それは、札幌鉄道局の役人たちと、小樽からの新来客の二人とが加わつたための、やや油に水をそそいだ気配もあつたかも知れぬ。その人たちにとつても初めての晩餐ではあり、そうそう寛げもし得ないであろう。それに一同の郷愁である。とはゆかなくとも、近づいて来る目的地への期待と何とない或種の武者ぶるいもある。

ここで、この一等船客の食堂について、多少の説明をして置こう。先ず食器棚の両方の入口からはいると、奥の正面にはピアノが一台装飾的に据えてある。ピアノの上にはどす黒いラジオの喇叭ラッパが載っている。その室内には白いテーブルクロスを掛けた食卓が三列に流れ、中央のにはピアノを背にして船長が腰かける。船長はいかにも穏かな温顔の人で、先ずは無口に近い。やや前踏みかがみでいつも黙々としてナイフとフォークとを使っている。それに向つて事務長が末座に位置する。長身の、まだ若い、職掌柄だけに凜として気の利いた顔貌と風采の持主だ。左舷寄りの上席にはもじ門司鉄道局の船舶課の、かなりの上役らしい人が据わる。この仁は鼻も高いが、いくらかけん権高んだかのすつかり官僚風にできている。これらの三つの座席は必ず極つている。船客の座席はどれと定つてはいない。自由ではあるが、中央部には、下の関や神戸から乗つたO・M・A・K・D、それにH夫妻その他が既に早

やお極まりのように両側に居流れている。O氏は日露戦役の志士沖禎介氏のお父さんで、肥前は有田の弁護士である。もう六十を越えて、それで前額まえびたいは禿かげているが、鬢かとしたシャンとした老人である。郷里ではその子の禎介氏の記念図書館の館長をしていられ、老後を全く壮烈な忠死を遂げた、その子の名譽を己れの円光として生きている人である。親としてはこれほどの光榮もなからうが、その子としてはこれほどの孝行もなからう。この人が団長に挙げられたのも忠孝並びたる禎介氏の功績あずかが与あつて力がある。少々は酒がいける。Mさんは神戸の縉商しんしょうである。いうところによると、美術院の大觀たいかん觀かん山等かんざんの極めて親しいパトロンだそうである。飄逸な反り型の赤ら顔だが、どこかに俗っぽい。好きで酔うと贅ぜいろく六句調で、変な唄ばかり歌う。A博士は電気学者で京都の大学教授である。髪をキツと分けて、角あじばった頤あじの、眼鏡の奥に謹直らしい眼を光らしている。絶対に禁酒家である。もとはかなりいけたそうであるが、今は何か病後でもあるという。一、二度はその夫人も並んで見えたが、すっかりこの頃は影をひそめてしまった。同行の令息とでも一緒かも知れぬ。令息ははつきりと覚えぬが三高の学生らしい。建築家のK氏は我親友の木下杢太郎の姉さんの夫にあたる人で、彼を準養子にされている。胡麻塩頭の、金縁眼鏡をかけた、顔の白い、一寸学閥風の老紳士である。もっともらしい態度でやや中

脊だ。少しは飲めそうだ。津軽海峡あたりからそろそろよい機嫌になって来られた。これは内密だが、一寸長唄に懸腕直筆で富士山の画がお得意だ。D中学校長は温厚そのものといつていい。円い眼の笑えば眼尻が細くなる。棗面である。酒にはすぐに赤くなる方である。団員名簿に会社員と記されたH君夫妻は小倉から出て来た、土地では相当の資産家らしい。夫君はまだ若いが代議士の候補にも一、二度は立ったとも誰かの話であった。船員を除いて、この人ばかりはいつも黒の背広を着て来る。浴衣がけなぞにはなつたためしがない。髪をオールバックにチツクで反らして、美髯の、瀟洒な風姿であるが、何か気取つて、笑うにも声もさして立てず、肯き肯きする。腕を拱む。ボーイに麦酒ひとつ呼んだことがない。夫人は先ず船中一の美人であろう。細っそりして、色が白い。身重で、時には面やつれがして見えるが、そのせい何か何かケチツシユにも感じられる。童謡音楽会の時はこの奥さんが、私の「あわて床屋」をピアノで弾いたのが導火線になった。だが一曲弾いただけですつと居なくなつてしまった。若い学生たちの乱酒と騒擾とに驚いたのだらう。食堂ではチンと澄ましている。それが今夜は鼠色の眼鏡をかけて、急に寂しくなった。

私と庄亮とはO氏やA博士やH君夫妻を向う斜めに見わたせる、船舶課側の窓際のクツ

シヨンに凭れる、末席の方だが、このテエブルには若い船医や京都府の警部さんのA君やと大概は同席である。だが、今は私たちの前には某銀行の重役のBさん夫妻が並んでいる。私たちの隣室の客だ。Bさんは下り眉の濃い眼尻のたるんだ中老の恵美須顔だ。サイノロジイらしいなと誰かが噂した。妻君は桃いろのスカートで、歩くときには、その健康そうな円いお腰がくるりくるりと弾む。これも誰かが手真似をしては怪しからぬ笑い声を立てた。顴骨が高くて、さほど美しくはないが、近代的ともいえばいえる魅力を持った顔だ。頭取さんは甲板ゴルフが好きと見えて、午前も午後もぶっ通しの、相手を集めては莞爾として杓子棒で玉を突いたり飛ばしたりしている。下戸でその方は話にならぬ。ただお二人はいつも御一緒である。だから若い者がやきやき騒ぐ。

右舷寄りのテエブルには、音楽会の晩、私に利休鼠の頭巾を貸してくれた、小さな小さな商人風の、若山牧水に似た顔のお爺さんと、その連れの須田町のある旅館の主人だという、これも江戸っ子式の快活な中爺さんと、例によって酒が賑やかだ。これは珍らしく向うの隅っこで氣勢を挙げる。

私たちの席はいつも私たちだけが残されてしまう。時には外のテエブルに鞍替して見ることが、何処へ行つても残されてしまう。つまらない事おびただしいのだ。船舶課の側へず

り上ったところで、何だかお役所風で話が堅くなるし、中央は占領されているし、たまには例の白髪の、牧畜家の、活気縦横な和製タートル氏と対い合になることもあるが、まだ十分には双方からうち解けない。

こう見渡したところ、その他の船客たちも何れも相当な紳士ばかりで、至極至極におとなしい。

それが申し合せたように、今夜は不思議に静肅である。庄亮までが、風邪気味で咽喉を痛めたというので、さして左が利かない。

「止すか。」

「うむ。御飯にしよう。」

何とまたH夫人の鼠色の眼鏡が寂しいことだ。

*

、こちらは東京、ゴウゴウゴウ、放送、ガバガバガバ、局であ、グワウグワウ、す、す、

す、す、ジャオジャオジャオ。

「何だ、いったい、こりやあ、しようがないな。」

と、誰やらが、心細い声を出した。まだ宵のくちの一等談話室のソファである。

「今頃は半七さ、グワウグワウグワウ。ジャオオ。」

「ああ、ああ。」とまた一人が立ち上った。

「ラジオにもいよいよ見放されるのかな。」

と、また一人が、しみじみと、眼鏡をはずして、浴衣の袂たもとで拭き初めた。

と、また新来の若い中脊の背広の紳士が、その台の方へ行つてしきりに二つのレシーバーを耳に嵌はめては、針を動かして見たり、跼かかんだり、透かしたりして見ていたが、それも諦めたように、耳のをはずして、カチャリと置くとこちらを向いた。美髪のとちらかといえど円まる顔がほの眉の凛々しくつまつて、聡明な眼の、如何にも切れそうな態度でいい。余程よほどのラジオ狂らしい。

「もういけない。ひどい無電だ。」

私はラジオはどうにも好きでない。ラジオを聴くといらいらして来る。ああ、化物じみた、非音楽的の非人情の音響で、神経を刺戟されてはとても坐っているに堪えられないの

だ。一つには私が文明化された電気というものとあまりに交渉のない生活をして来たせい
かも知れぬ。この四、五年こそ電燈の下で創作もしているが、この十五年来、ほとんど縁
がなかった。いや、ずっと以前にも、そうだ、明治三十八、九年の早稲田時代にも、私た
ちは下宿から下宿へ引越車の後を蹤ついてゆく時にも、ニツケル製のランプを片手に捧げて、
とぼりとぼりと歩いたものだ。大正の一、二年にも相州の三崎ではランプであった。小笠
原では無論のこと。その後葛飾でも初めはそうだったし、小田原へ移ってからも、二、三
年は煤すすけランプの油煙くさい臭気をいつでも徹夜の暁には嗅かがされた。それに電話は身ぶ
るいするほど嫌いだし、田舎に引き籠こつてからは、あの雑ざつ鬧とうする東京の電車にはとても
飛び乗れそうにない。ラジオ流行の時節にも到底救われない旧人だと見えて、酒の座など
で、いきなり、ワアワアワアと唸うられると、それこそカツと疝かん癩しやくが起つて来る。何で
周囲に当り散らすのかわからぬ立腹が、たちまち私の眼先を真っ暗にしてしまう。それが
また、地球外の不快な何かの囂ぶ々ごう音おんらしい無電の妨害までが挟はまつては、まるで悪魔の洞
窟くわにでも墮おちたような気がする。見放みはなされてこそ仕合せだと思ふのだ。だが、日本内地か
らいよいよ私は離れつつあるのだ。それを思うとまた、頼りない郷愁も湧く。

「や、活動が初まったな。」

総立ちに出て見ると、もう、左舷の甲板は観客でいっぱいになっている。自分の船室への通路も全く塞がれてしまった。それよりか、丸窓もはいり口も燈ひが消されて、ほの青い光の中に、密集した低い高い黒い頭の壁際になつてしまつていた。

で、私もその前に跣かかんでしまう。

チカチカチカチカ、コチコチコチコチ、パツとまた幕面が白く明あかつて見出しの円が出る。思いがけない樺太風景である。

「や、鯨にしん漁だ。すばらしいすばらしい。」

現れたる青い画面には澁刺とした鯨の数千数万本が翻る。小蒸気とモオタア船の甲板である。日光、漁夫、モリ、舷側の飛沫。

影、影、影、光、光、光。

鯨だ、眼だ、腹だ、尻尾だ、雪崩なだれだ、総雪崩そうなだれだ。や。

密集、重積、氾濫、迷眩、混乱。

帆だ、帆だ、帆だ、

運搬、駛走、海洋、卷雲。煙、煙、煙。

と、砕氷船。

「大きいぞ。」と声がかかる。

と、たちまち、船影は消えて、一面の氷結した極寒の海峡が真白く、白く、暗い影の底から遙かに遙かに光る。輝く。寒い寒い雲だ。あつ、樺太だ、確かに。

と、来た来た、氷を蹴^け砕^{くだ}き蹴^け砕^{くだ}き、さつきの砕氷船が。

ピー。

あつと、一同が振り向くと、それは白髪の白い支那服のタゴール爺さんだ。吹きも吹いたり。とてつもない鋭い口笛だ。「あつはつはあ。」「ヤハイハイ。」

パツパツパツ。「大^{おお}泊^{とまり}の光景でござい。」

雪、雪、雪、煙突、倉庫、店看板、防寒帽子、毛ごろも、手袋、がんじき、橇^{そり}、橇、橇、スキーだ。スキーだ。

駛^はる駛^しる駛^しる、樺太犬が、一匹二匹三匹、五匹六匹、二列だ。

パルプだ。突進、突進、突進。

と、牛肉だ、肉塊だ、犬だ、頭だ、うおうおうおうおつ、頭、頭、頭、口、口、口、口、や、舌、舌、舌。

食慾だ。争鬪だ。血だ、血だ、血だ。

「氷上の魚獲。」

静かな月光、声のない声。雪白の幌ほろない内川の氷上に、ただひとつ穿うがたれたばかりの黒い穴。

ついと、こちらを見て笑ったギリヤアク土人の顔、しよぼしよぼの眼。毛皮の帽子。や、また、一人、二人、三人。

砕く砕く。一心に、懸命に、こつこつこつこつ。

振り上げた手、手、手。

跳ねた。水だ。や、魚うおだ。魚だ。魚だ。

黒、黒、黒、穴、穴、穴、穴、穴。

「馴トナカイ鹿。」

飛躍、飛躍、

角つの、角、角、

雪だ。パツ。「今晚はこれきり。」

ほつと、みんなが吐息をついた。

そうだそうだ。これから今夜にも宗谷海峡そうやを過ぎるであろう。

その先は韃鞮海。

*

「今夜は妙に湿っぽいじゃないか。」

「うむ、僕もどうも工合がわるい。あの、それ、いつか煽風機をかけっぱなしで寝たことがあるだろう。あれからのらしいのだ。咽喉が痛くて、悪寒がする。これはどうもいけない。」

「寝たまえ。今から病気だと大変だよ。お、いい薬がある。」

私は立つて黒皮のケースを取り出して来る。

「独逸製の薬品だがね。バイエルアスピリンというんだ。こういう時はありがたいね。」

「そりゃいい、貰って見るかな。」

「そうしたまえ。それから王様の寝台は君にゆずるよ。交代だ。」

「しめた。俺も王様になるかな。あつはつは。」

「ははは、その元気があれば大丈夫。じゃあ寝たまえ。僕は少し仕事をしよう。何だか、

やっぱり弟の方が気になる。とにかく「桐の花」だけは済まそう。」

「そうだな。そうしてくれるとありがたいな。僕も申訳がたつ。」

じゃあということになって、一人は別室の厠かわやへゆく。一人は談話室のテエブルを引き寄せる。

卓上には、水芋のような、青い縞入りの葉が大きいのと小さいのと二枚。南洋植物の一鉢である。電燈の光も静かである。

「おおい、おおい、ボーイ。げつぷ、うえつぷ、げつ。」

ひよろひよると、車輛会社が、セルの着流しで。

「や、御免。御勉強ですか。これはお邪魔で。」

困ったと思つたが、そうもいえず、

「や、まあ、おかけなさい。」

「へえ、御邪魔なら、どうも失礼で。——帰りましょかな。」

「まあ、いいさ。」

「坐りましょかな。」

「どちらでも。」

「どちらでもとおひどいな。そのなア、支那服の一件じやで、夕方、申しときましたろが。お恨みに存じ申すと、面目がつぶれた。わしの一分いちぶんが相立たん。おおい、ボーイ。そこできつとし返しにまいると。なア、そうでしたろがな。いけませんかな。げえつぶうう。」

「やりましたね。また。」

「へえ、どうもなア、いやにその浪の音がな。どもならんというておりますわい。」

「ははあ、弱つたね、それじや。」

「弱りやしませんがな。支那服のし返しじや。飲みましょかいな。おおい、ボーイ。」

ぼんとボーイが飛び込んだ。

「抜け、P公。先生、これはわしの子分だな。いい男でしょうがな。おい、抜け、コップを三つ持って来おい。」

「持ってまいっております。」

「そうかあ。えらい奴じやのう。注つげ。」

「へ、お注つぎいたしてあります。」

「やああ、これはどうも恐れ入る。よしよし。おととととうと。」

「君はSさんの付きかい。」と私はボーイの方を見た。

「は、そうであります。」

「軍隊式だね。」

「へ。」

実直そうな、それでなかなか^{はしっこ}伶俐そうだ。まだ二十二、三だろう。小綺麗でいい。知識的な眼もしている。

「これはな、先生。わしの子分じや。国のものでな、P公、うう、P公と申す。先生にお願いがあるそうじやで、わし、引つ張つて来申した。」

「どんなことかね。」と私も笑った。

P公は、「は。」といって、チラとSさんの方を見た。

「申し上げ。なんで黙っておるのじやな。よし、わしがいうてやろ。ええ、何かひとつ書いておもらい申したい。そうじやろ、何か書いて。」

「は。」と直立不動で、ニツケルのお盆を持って、白服の詰襟である。髪を立てて撫で上げている。

「持つておいで、短冊でも、明日でいいだろう。」

「は。小樽で買つてあります。」と、ありがとうとはいえないで、頭を垂れた。

「そこでと、吉植さんは、おいでならんのかな。吉植さん。」

「吉植君は風邪で弱つてますよ。」

と、「やああ。」と寢室の方から、我が庄亮が浴衣の胸をはだけて、ぬつと坊さん頭を突き出した。ちよつと此方こちらを見て眉を顰しかめたが、何思つたか、ついと出て来て、私の傍に腰を下ろした。

「どうもそのね、北原君は已やむを得ない仕事があつて忙しいんで、困つてる。麦酒は明日あしたにしてもらえんかね。」

「これは御挨拶、痛み入る。しかしじや、先生はよろしい、飲もうというてござるじやて、ようござりましようがな。お邪魔ならおいとま申す。それは失礼。だがな、どもならんそうじやて、どもならん。」

「浪の音だそうだよ。」と私はまた笑つた。

「ええ、浪の音。そうじや、あつはつは。いやにその。」

「まあいい。君は寝ていたまえ。障るとわるい。」

私はこれはやはりどもならんと思つたので、麦酒のコップを執とりあげた。

「困るなア、それではね。僕がお付き合ひしよう。よし、かまわぬ。さあ飲むぞ飲むぞ。」
 「これはありがたい。夜あかしじゃ。」

「夜あかしや困るよ。」

「あつはつはあはあ、そりや困る。」と庄亮が両手で頭を引つ擁かかえる。やああとその上で手先きを揉もみ上げる。

「や、Sさん、何処どこさん行かしたかと思つとつた。此処こけえ来とらしたたい。」とY君だ。はいるとどかりとソファの端に腰を据えた。愛嬌のある円顔の髭をちよつとひねつて、仰向いて目を細めた。もう赤くなつてゐる。

「どうも。」と眉を顰めるとまた、赤つ面を振つて、

「さびしゆうしてならんけん。誰だりも彼かりもぐうぐういびき軒いびきばかりかいとつて、始末におえん。甲板さん出て見たつちや、真つ暗闇で、歩けもせん。星も出とらん。雨でん降りまっしゆごたる。」

「どもならんというておりますわいだらう。Sさん。」

「へ、浪の音がな。その浪。」

「もうよし、飲むぞ飲むぞ。吉植君、君は王様の寝台だ。」私も観念した。だが、何か私

とてもまんざら寂しくないことはない。キリキリキリキリと帆綱の錨も鳴っている。

「や、僕も少しやつつけよう。飲むよ。飲むよ。」

そこで、三本にまた追加が五本。肴は鯨の鼻骨に野菜の辛子漬。

キリキリキリと帆綱の錨。

浪の音がな。浪の音。

*

「おや、車輛会社はどうした。」

と、私は南洋植物の青縞の葉の下を透かした。

「や、行去した。オートバイででん逃げ出えたそな。」

「P公、P公、や、彼奴も行去たかな。」

「車輛会社にやかなわん。護謨輪でん何でんチャアンと持つとる。はっはっは。」

「おや、吉植もいないじやないか。寝たかな。」

「寝ましたくさい。弱つとらした。」

「弱るなア、僕も、寝ようかな。」

「でけん、でけん。行たて見まつしゆう。まだ誰か起きとるか知れん。」

「ぐうぐう軒かいとつたというじやないか。」

「うん、あん時やぐうぐう云よつた。ばってんが、もう誰か醒めとろ。車輛会社もパンクしとらすか知れんくさい。行たて見う行たて見う。」

「行つてもいい。だが、ちよつと待ちたまえ。」

私ももうかなりに酔っていた。ふらふらする足取りで、隔ての青いカーテンを寄せると、いわゆる王様の大きい寝台に近づいて見た。この寝室は全く広くて贅沢な、それで清々しいいい室である。向うは浴室との戸になつていて、その横の壁にマホガニー色の装飾を凝らした鏡付きの古風な化粧台があつて、それに相当の空間を置いて、相對した壁に洋銀のダブルベッドが備えつけられ、それには前面と裾とに卵色の薄いカーテンが掛つている。天井も同じ絹布で張つて、壁には網棚もある。平時は関釜連絡船で、このベッドには朝鮮総督とか師団長とか最長官の用に供せられるのだそうである。私は幾晩もこの白いシーツの上に白毛布を包んだ白いカバーを引っかけて眠つた。今夜は親友が寝ている。

私はそつと帷を開いて差し覗いて見た。すやすやと庄亮が眠っている。少し斜めに壁の

方に身体をねじ曲げ気味に片手枕で、毛布を蹴ぬいて、何かしら弱々しそうな息づかいである。

私は白カバーの毛布をはだけた彼の浴衣の胸まで引き上げて、それから、そうつと、その二分刈りの坊主頭の汗じみた額の上へと私の左の手を当てて見た。熱はない。が、私の掌には、その時、私の友の薄い眉毛の幽かなむずがゆさが染みついた。

私はまた差し覗いた。何という無雑作な酔態だろう、この眠りぎまであろう。

私は、ふらふらと、その足元に匍い上った。そうして向き直ると、両足をブランブランさした。

眠^ねている、眠^ねている、眠^ねています。

酔^よってる、酔^よってる、酔^よってます。

「先生、何^{なん}しとんなはる。行^いきまつせんか。先生。」

「おつ、ちよつと待ちたまい、眠^ねってるよ、吉植が。」

「よか、三等へ行こう。あつちも眠^ねてしまおうじゃいわからん。」

「行こう行こう。」と私はそつと寢台を飛び下りると、談話室を抜けた。

「吉植はよく眠っているよ。なんだか俺は泣き出しそうだよ、よう、おい。」

ザザザザ、ザアツと浪が舷側を撃った。外は暗い。キリキリキリと帆綱の錨かんが鳴る。

「先生。」といきなりYがかじりついて来た。遅ましい大きい両手だ。

「先生。わしも泣く。わしは、わしは子供を棄てて来た。見殺しにして来た。どうなつとるじゃいわからん。わしが出る時なア、もう危篤じやつた。とても助かつとるめえ。行かにやならん、仕方なか。死ぬなら死ねちいうて出て来た。葬式は嬢かかアに頼たぬうで来た。もう死んどろ、死んどるかも知れん。わしはこの胸ん中が張り裂きゆごたる。先生、泣ねえたつちやよかろ。」

「うむ、泣ねえたつちやよかぞ。泣け泣け、おれにつかまれ。」

きようきようと、何かが翔る。

*

「もうよし、君のところへ行こう。」

「ええ、行こう行こう。」

「や、ちよつと待て、一等の船室ケビンを廻つて見よう。みんなが眠ねたかどうか見て来よう。」

「よかよか、人ん事心配せんちやよか、金持ちどもは卑俗げさくしなん、構いなはらんがよかたい。」

「だが、心配だよ。ちよつと覗いて見よう。さあ手を握れ。一緒に行こう。」

眠ねている、眠ねている、眠ねています。

酔よってる、酔よってる、酔よってます。

え、おい、歌おう歌おう。」

「眠ねているですかい。」

眠ねている、眠ねている、眠ねとらすたい。か。

酔よっぱらって、酔よっぱらって、梯子酒はしごぎけか。」

「おい、

眠^ねてない、眠^ねてない、眠^ねやしない。

醒^めめてる、醒^めめてる、醒^めめてます。

「こう聞えないかい。眠^ねている、眠^ねているが。」

「歌^うて見^みなはれ、もう一度、きこえるかも知^れん。うむ、きこえるような気^きもしますた
い。」

眠^ねている、眠^ねている、眠^ねています。

酔^よってる、酔^よってる、酔^よってます。

「おや、まだ起きてるようだな。いや、風^{かぜ}かい。」

私たちはもう、一等食堂の前の階段を下^{くだ}りかけていた。幾^{いくど}度^どか二人はつんのめりそうにな^なった。両腕^{りょううで}を互^{たがひ}の首根^{くびね}つ子^こに廻^{まわ}わして、互^{たがひ}にまた引^ひきずつたり、凭^{もた}れかかったりして

いた。

「お、よく眠っている。」

私はすっかり燈を消した暗い暗い寢室の間の廊下をそつと差し覗いた。そうして、
人のように足音をひそめた。
盗ぬすび

「叱しつ。」

「Hさん夫婦は眠てますかい。」

「莫迦。叱しつ。」

その長い両側につきつぎと並んだ浅葱の重いカーテンは何れもしつとりと垂れ下つて、
そよとの音もしなかつた。すやすやとしたい寝息がした。

「よく眠ている。万歳。あつ、誰だか寝返りした。そうつと、そうつと、いいか、すり抜
けるんだ。そうつと。」

私たちはまた肩を組んで甲板へ出た。

「今度は二等室だ。おい。」

「もうよかる。もう起きとらん。」

「眠ていりや幸さいわいだ。何だか、それでも寂しいな。行こう行こう。」

私たちはまた船尾の方へ廻った。

階段を下りる。と、突差とつきに白い白い電灯の光がパツと眼に当たった。私たちはくらくらし
た。

危うく転びそうになって、私たちはやっと私たちの身体からだを階段の欄干てすりに支えた。そうし
ておずおずと下を差し覗いた。

其処は通路を中にした広い広い雑居の寝室であつた。通路には紅い緒の草履や、スリッ
パが脱ぎ散らしてあつた。

両側の雑然たる寝姿、それは白い蒲団は両側に整列しているが、足元や枕元には旅行案
内、地図、トランク、雑囊、水筒、ゲートル、浴衣、洋杖ステッキ、蝙蝠傘こうもりがさ、麦藁帽などがか
なりに、ほうりつ放しになっていた。

老いたるもの、若きもの、更に稚おきなきもの、商人、学生、教員、画家、牧畜家、官吏、玄
人筋らしい老婆と娘、各種の中流階級の人々が、仰向き、横向き、斜め向き、手を曲げ、
足を蹴ぬき、潜くぐまり、反り出し、齒をむき、眼をあげ、品よく、或は露わに、卑しく、ま
たは素直に子供のように眠りこけていた。

「よく眠ている。よく眠ている。」

「あつ、起きた。」

と、左側の中央部に、互に蒲団をきつちりと引きつけて、そうして、近々と向き合つて寝ていた一組の若い夫妻の、その妻君の方が、ふつと眼を開けて、驚いたようにくるりと背を向けてしまった。

「あ。」

といったまま、私は階段を駆けあがった。

「いけない、いけない。早く早く。」

私たちはまた暗い甲板の上を歩いていた。

「や、無線電信が起きている。だな。じやないかな。そうつとそうつと。」

幽かな、それは幽かな金属性の音律が、げきじやく 閨寂とした夜ふけの暗黒の中に、コチコチ

とカチカチと、それは遥かなびやつきんこう 白金光の小都会の何かの点音のように、絶えては続き、

続きでは絶え絶えしていた。だが、技師も今は眠っているはずだし、無電でもあるまい。

それでは何の音であろう。幽界からのいんしん 音信でも、何かが触知するのか。何か生きた者が、

眼を開いてる者が、紙か、ペンか、受信機か、テエアル 卓子か、椅子かの中にいる。

「あ、きこえる、あ、きこえる。」

*

「おいしい、誰でん起きろ、おいしい、先生が来た来た。来らしたぞ。」

船首へまた大迂回して、測量室の下まで来たところで、Yはいきなり大声を挙げて、三等船室の階段を駈け下りた。

「居る、居る、パンクしとる。先生、車輛会社が居りますたい。早うござり。」

成程、車輛会社は、三つ四つ並べた食卓テエブルの、とある隅っこ後ろの白ペンキの壁にもたれて、ぐにやりと、全くのところパンクしている。

「どうした。Sさん。」

「ううむ、どもならん。」

「浪の音、ソリヤ、どっこい、浪の音ウか。どんこつ、おいか。」

「ううむ、お恨み申すじゃよ。」

「はっはっはっ、P公はどげんどんしたかな。P公。」

向うかわ側の食卓テエブルの一つに、白服の詰襟のボーイ連、P・Q・Rが腰かけたままの突つ

伏し姿で、どれもが一同にひっそりと、声ひとつない。

三等の食堂は一段上になつていたので、下の雑居室は真上からそのまま**瞰望**せるのである。

「おおい、起きろ。や、起きとんな。しめた。先生が来た。さあ起きた。」
と、また、

「医専、慶応、早稲田ア、二高、日本歯科、青年団、写真班、鹿児島ア起きろ。」

と、起きた起きた。二等よりもより雑然たる諸相の中から、湧き出る、溢れ出る、転がり出る、飛び出る、それらの如く、**蠢々**として、**哀々**として、**莞爾**として、**突兀**として、二人三人五人の青年たちがむくりむくりと起き上つて来た。

「やあ。」

「やあ。」

「やあ。」

「やあ。」

「ほう。」

P・Q・R、もまた叩き起されてしまった。

「酒だ、酒だ、やろう、おい。やりまっしゅう、先生、万歳だ。」

「やろう、やろう。」

祝杯。

「T君、君たちは起きていたのか。」

「え、なに寝てはいたんです。こんな晩にはしょうがないんですからね。でもねむってはいなかったんです。助かった。」

「僕も何ですよ、ねむったふりしていたんだ、つまらないんですからね。」

「俺だって、そうだ。Sさんのパンクだって知ってらあ。P公が弱りはてていたぜ。」

「そうだ、そうだ、どもならんどもならんだらう。」

「浪の音ウさ。ふっ。」

「や、まあ、いい、それじゃまあ飲もうや。」

「有難い。」

「歌おう、歌おう、や、やれ。」

関の五本松、一本伐^きりや四本、

「や、誰だ。」と下を。

「おうい、こつちだ、こつちだ。」

「起きて来い。」

「行つていいか。」

「おいで、おいで。」

また一人が、むくりと飛び起きた。

「出よう出よう、ね、諸君、僕のところの甲板に来たまえ。ここは安眠妨害だよ。さあ、出よう。」

出ましよう出ましようで、一同がどかどかと階段を駆け上る。それ、麦酒だ、コップだ、いいか。

でかんしよ、でかんしよと、山家やまがの猿は、ヨイヨイ。花のお江戸で芝居する。

ヨウイヨウイ、でつかんしよ。

でかんしよ、でかんしよで、半年や暮らす、ヨイヨイ、あとの半年や寝て暮らす。

ヨウイヨウイ、でつかんしよ。

青年はいい。活気そのものである。風の音も、大海の浪の響も、今は彼らの感興を煽るばかりに、暗く暗く輝いて来た。

「さあ、ここだ。とうとう還つて来た。そこで、そこらの籐椅子をすっかり集めた。そう
だ。一列に、みんなくつつけて。よし、さあ、歌った、歌った。」

一同はこれに勢を得て、歌ったも歌ったり、「春爛漫らんまん」から「都の西北」「春は春は」
のボート歌、「城ヶ島の雨」「あわて床屋」「かやの木山」「りすりす小栗鼠こりす」「煙草の
めのめ」「さすらいの唄」みんなが知つてる限りの校歌民謡童謡流行唄は一つも残さず唄
い終つてしまった。

「ああ、もう知らねえ。」

「草臥くたぶれてしまった。」

「寝ようや。もう。」

「万歳。」

どっこいしよと腰を叩く奴、ううむと唸る、ああと一人が両手を高く差し上げて欠伸あくびを
する、眼をこしこしとこするのもある。

「泣きたくなつたよ、おい。」と、また一人が駈け出してしまった。

「じゃあ、これで解散だ。君が代君が代。」

流星は、そこで、肅として、並んで唱えた。

ほろほろと涙が滾れ落ちそうになる。

「万歳さよなら。」

「万歳さよなら。」

「諸君。また明日だ、さよなら、さよなら。」

後はしんとした。

キリキリキリと帆綱の鏗が鳴る。大海の暗黒の、風の、浪の響が、そうそうとして、急に凄く高まった。

「先生、わし、先生の裾の方へ泊めてもらいますばい。よかろ。」

Yだけは跡に一人残った。そうして談話室までまたはいり込んで来た。

「泊る。泊れ。だが、どうかな、君は九州つぼうだからな。」

「莫迦いいなさい。」

「俺はまだ美少年だし。」

「ふっ。なんちゆうこつじやい。」

「いうにいわれぬ、その。」

「へっ。莫迦いいなさい。わしあ、そげん卑俗きこつ知らん。」

そんなら泊れと、私はソファの一つに寝て毛布を引つかぶる。Yは鍵の手なりに、私の足へその毛むくじやらの両足を向けると、すぐに、そのまま、ぐうぐうと深い鼾をかき出した。

私もまたそれなりぐつすり^{ねい}と眠入^いったらしい。

ふっと、眼を醒ますと、まだ夜は暗かった。足元を見ると、いつの間にかYの姿は掻き消えていた。

ああ、浪の音だ。

宗谷海峡も過ぎたであろう。もう夜が明ければ樺太だが。

キリキリキリキリと帆綱の鏝。

空はまだ暗い暗い暗い。

おおいおおいと何やらが

海の底から呼んでます。

どうせ、くらやみ、北の海、

おおいおおいで夜もふける。

安別

薩哈噠州サガレンピレオ 北方二里

アレキサンドロフスク 北方約三十里

海岸の白木の角標にはこう記してあつた。日露境界第四方とまた一面に大書してあつた。十三日の午前のことである。どうにもひどい強雨であつた。

*

本来からいえば、小樽を出て翌朝、私たちは樺太西海岸の本斗ほんとに上陸して、真岡まおかより野田だへ汽車で行き、一晩泊つて、それからまた海路を国境の安別あんべつまで続航するはずであつた。ところが、ちょうど摂政宮殿下の行啓ぎょうけいと差合さしあひになるので、急に模様換えになつて、そのまま北へ北へと直航することとなつた。その十二日は全く薄らさみしい日であつた。右舷にはいつでも鮮かな緑と寒い黒檜くろしどの丘陵とが眺められて、何となく樺太らしい

物珍らしさが感じられたものの、いよいよ北緯四十五度の線を越したかと思うと、曇天の日の円までが、ただ白くぼやけて寒ざむと、頼りなく仰がれても来た。海は黒く、滑らかな大きいうねりが続いているばかり、やつぱし明るいようでも輝きはしなかった。それに午近くひるになつてぽつりぽつりと雨さえばらつき出すと、風までが、これに加わつて、どうにも怪しい雲行きと變つて来た。

「今夜はともするとひどい時化しけになりますよ。」

すれちがいに私に挨拶した事務長の言葉がこれであつた。

「明日あしたはうまく上陸できましようかね。」

「さあ、どうも、ちとむつかしそうですね。ここの海岸線はかなり荒いようですからね。」
そうして帽を一寸脱いで、向うへスツスと行つてしまつた。

これまで、私たちはあまりに恵まれた航海を楽み過ぎて来た。少しくらいは時化にでも遭つた方が面白そうな氣もしたが、夜に入つていよいよ本ぶりになると、誰もが言い合はせたように晩飯もそこそこに済ますと、早くからてんでの船室ケビンに引つ込んでしまつた。その中で一人、お能の笛を吹いている音色がしていたが、それもすぐに止んでしまつた。

終夜が波の響と風の音と、それに雑多の——それは帆ほ檣しらに降る、船室の屋根の上じょうか甲

板んぱんに降る、吊ボートに降る、下の甲板に降る、通風筒に吹きつける、欄干てすりに降る、――
雨の音であった。船の揺れはますます激しく、私のいわゆる王様のベッドの洋銀の欄干、
網棚、カーテンの環かんなどは、しつきりなく音を立てて鳴った。

「おやおや。」と私は思った。だが、いつのまにかぐつすりと思入ってしまったものらしい。夜が明けると、早くから飛び起きて、すぐにメリヤスの襯衣シヤツに浴衣で、ドアを押して見たが、颯さつと来る雨霧に慌てて首をすつ込ますと、早速さそくにレインコートを引つかぶってしまった。

「なるほど、樺太は寒いな。」と。

オートミルとフライエッグスと一、二杯の珈琲コーヒー。どうにも洋式の朝飯は日本人にはしっくりゆかないものらしい。そこで、その朝は船室ケビンに籠りきりで、番茶に梅干で温まると、ないしよで味噌汁に飯をあつらえた。酒の翌朝はどうしても味噌汁に限るのだ。白い飯からはほかほかと湯気が立つ。

「どうにもこれがいい。」

「うむ。やっぱりな。」

私と庄亮とは、自分たちの談話室のソファに凭よりかかって、それこそ水入らずで、また

沢庵たくあんをかりかり噛んだ。

「咽喉はどうだね。」

「まだどうもいけない。妙にそのお、ここが痛んでね。」と反対にぼんの凹くぼを片手で叩いて見せた。

「湿布でもするといいいんだがな。」

「いや、僕には按摩あんまがいちばん利くんだがね。」

「あのアスピリンはどうだ。」

「やあ、あれも君のをもう半分もいただいたんだがね。熱は下ったようだが、腹の工合がどうもよくない。」

「西洋の薬はそうしたものだよ。局部的なんだからね。利くには利くんだが、何かの反応が外へ禍する。いわゆる全科的じゃないんだね。だから僕は草根そうこん木皮もくひ主義だ。漢法の方が東洋人には適しているよ。」

「そうかなあ。」

「そうだと思うね。煎薬というものは微妙なものだよ。たとえば風邪の薬にしたって胃の薬も腸の薬も適度につまんで入れるし、十種も二十種も調合して、それは丹念に刻み込む

んだからね。あれがまた同じ処法でも、やはりコツがあるそうだよ。極めて精神的なもので、それは創作的なものだそう。芸術にしたところで、何といつても東洋精神に限るよ。

「実相観入かい。」

「近頃の歌壇の慣用語でいえば、そうさ。だが、写生の語義を伝神とか実相観入とかに転用するのはちよつと変だね。写生は普遍化された語義としてはやはり単なる写生だからね。

子規の写生にしてからが、空想味の深い浪漫的な詩歌に対しての写生説だったんだからね。

ね。一種の反抗運動として見るべきだろう。写生文にしてからがそう。ありのままの平

面描写ということになる。南宗画などの象徴的省略とは違う。もし写生という言葉を文字

どおりに生命を写すと解して、伝神にまで深めて来るとすると、写真でも写真でも、おな

じ意味にとつても、差支ないということになるね。だが、写真といえは写真器械によつ

て撮影され現像されたもの、ハイカラにいえば印画のことだろう。写真といえはまたゾラ

以降の観法だろう。応挙あたりの精緻な写真もそう。だから写生ということも語義とし

ては在来の写生であるはずだ。実相観入にまで及ぼすくらいなら、もっと外の適当な言葉

を持つて来るのが正しいだろう。殊に写生の語義を内観にまで利用するのは考えものだよ。

サンボリズムとリアリズムとは楯たての両面だからね。それも主客円融ということとは渾然として境涯的のものであつて、写生は畢ひつきよう寛かん写生に過ぎないからね。実感に即する抒情までも写生とするのは、少々牽強附会けんきやうふかいじゃないかな。そんなこといつたらまごころでさえ歌つたものは何でも写生歌ということになるね。だが、芸術上の語彙には一々特殊の色もにお香においもあり、習慣もあるのだから、伝統的に意義づけられ差別されたものは在来の意義や差別をおとなく受け継いで置いた方が、混雑しなくてよさそうに思うね。それにむしろ東洋の芸術精神は実を徹して虚に放つたところにあるのだからね。隠約いんやくとか省筆しょうひつとかだ。で、実相の観入といったところで、単なる平面描写の写生とは少くとも格段があるのだからね。もつと立体的な内観的な象徴的なものだからね。ところで、話はまた草根木皮に還るよ。聴くかい。」

「あつはつは、こりやおもしろい。聴くよお。」と庄亮は、両肩から首を振つて、豪傑笑いをすると、両手を蠅のごとくに頭の上で揉もみ上げた。

「いつたい、この頃は芸術でも教育でも何でも彼かでもあまりに専科的分業的になり過ぎている。で、いよいよ偏狭になり不統一になりやしなないかと思うね。我々にしたところで、詩人とか、歌人とか、やれ民謡作家だとか、童謡詩人だとか、一面からばかり見て、手つ

取り早く何かに片づけられてしまうが、これは少々くすぐ擦つたものだな。何故一個の芸術家と見ないのかな。とにかく迷惑至極なものだよ。人体からいつても解剖的にばかり見るのは近代医学の悪弊だな。だから肥厚性鼻炎の切開をすると肺や肋膜を悪くしたり、——それはどちらに基因があるかわからないがね——感冒の薬を飲めば胃をこわしたりする。体内の各種の機関は凡すべてが連絡なしには作用しないのだからね。病源といったところで、それからそれへと繰すってゆかねば、一局部の兆候だけですぐに極めてかかるのは飛んだことになりやしないか。漢法では全的に見るのだ。むしろ直覚的にだね。僕の知っているH老先生などは、患者の顔色を見ただけで投薬してしまう。病気の器が面前にあるのだ、何で手を執とつて診る必要があるというんだ。理窟だね。そういうえばそうに違ちがいないさ。それで百発百中だから驚くさ。その先生は観相もやるし、仏典にも通じている、易学などは大家だというんだがね。人体を宇宙と観くずるといふ漢法医の道は術でなくてやはり道であるのだろう。単なる学理でなくて、創造的な直感的なものだろう。つまり心で観くるのだ。」

「歌とおなじだね。」

「そうだ。実相観入だね。あははは。そこでその先生は自分でコツコツと刻むのだ。一人前の薬を三十分もかかって彼かれこれ是と調査するのだね。僕らが詩や歌を作る時のように、コ

ツコツとやっている。その事に遊びほれるのだ。色々の草や木の香いを嗅ぎ分けながらだよ。そこがうれしいじゃないか。いったい感冒の薬は杏仁水きょうにんすいが何グラムで何が何グラム、一日三回分服といった風に、すつきりと極めてきもかかれまいじゃないか。もつと薬剤の配合は靈感的なものだと思ふね。そこで面白いのは、こういう青年があるんだよ。もと僕の家うちにいたのだが、外国語学校の英文科を苦学して出ると、語学の先生になったところで莫迦ばか莫迦ばかしい、漢法医になるというんだ。今時には変っているだろう。学生時代にすっかりH先生に傾倒してしまったのだ。そこで易などに凝り初めて算木さんぎを寄せたり筮せ竹ちくなどをジャラジャラやり出した。や、なかなか当るよ。」

「あ、あれか。僕も知ってる。それ、君のところいつで何時か逢った、あのT君だろう。ありや、うまく当てたよ。副業線が莫迦ばかに発達しているから、家業は継げなさそうだとか、結局親父の腰巾著こしぎんちやくだどやったね。どうも、やあ、閉口しちやったよ。」

「そうそう。あの時は君も参ったようだったね。」

「ところで、何かい、T君は今どうしている。」

「台北へ行っている。中学の英語の先生さ。止むを得ない事情があつてね。だが、すぐに帰って来るだろう。H先生の内弟子に住み込む覚悟でいるんだからね。何でも台北で病氣

をした時、総督府の病院へは行かないで、ないしよで土人の医者のところへ礼を厚うして診てもらいに行っていたとかで、同僚たちからすっかり愛想をつかされてしまったらしい。いや、みんなが呆れてしまって、旧弊も旧弊、頑愚度がんぐすべからずと笑われていると消息して来た。それがまだ二十三、四の青年だからね。おもしろい。だから、構わない、やれやれとこちらも激励しているのさ。ところで僕の方もこの頃はすっかり草根木皮で、ぶんぶんさしてる。薬でも日本酒のようにお爛をした方がほんとうの薬らしいからね。ビーターミンAがどうのBがどうのものもあるものかい。ほうれん草のひたしでも食べたがずつといいんだぜ。」

「そりや、こつちでいう事だよ。俺んところの蒜にんにく肉や大根のうまさはどうだ。君はいつたい美食すぎるよ。あんなに肉ばかり食べては危険だぜ。胃癌だとか糖尿病だとか、おしまいばかりきまつてる。」

「そりや、君のところの野菜はすばらしいさ。印旛沼は格別だよ。ところで、僕にしたつてこの頃はすっかり調味法が変ったね。ほとんど生のままの味で煮出している。それにだんだん菜食党になって来た。そりや年齢にもよるだろうが、やはり東洋精神への還元だね。」

「なるほど、そこで水墨集ができたわけかね。」

「僕ばかりじゃないよ。画の方だつて、だんだん還元して来るからおもしろい。とにかく東洋は東洋だよ。真の象徴芸術は東洋にあると思うね。」

「ウイスキーより、俺あ日本酒だ。」

「だろう。だから芭蕉の句なぞが、毛唐けとうにわかつてたまるものか。童謡だつてほんとうは境涯けいがいのものだよ。極めて単純化された。むしろ禅でなければなるまいと思うね。実相はあくまで深く観みての上のことだよ。ステイヴンソンとかウオタア・デ・ラアメエヤだとか、大したものではあるまいじゃないか。殊にステイヴンソンの童謡などは常識的で、大人が推測した童心らしいものであつて、畢ひつきょう竟けいの境涯けいがいの童心じゃない。毛唐けとうでさえあれば新進作家だろうとへボ詩人だろうと忽たちまちにどえらい偶像にしてしまうのは悪い癖だ。日本語が世界語でありさえしたら、古来からの日本の詩歌人たちの方がどれだけ偉いらかわかわらないと思うね。よくは知らないけれども。民謡にしたところで、「外国の牧歌が素朴で快活だ、日本のは消極的でお座敷趣味だ。淫蕩だ。享樂的で無智だ。」なぞと、すぐに日本を打ち消してしまいたがる人があるが、それは記紀から万葉、催馬樂さいばら、田樂、諸国の地謡うたというものを真には研究して見ないからだ。すばらしいぜ、田歌たうたなどは。でなくとも、

今の信州その他の青年たちが作る短歌はどうだ。立派に歌壇の水準を出ているじゃないか。それもほとんどが耕作したり、養蚕したり、縄を編んだり、馬を追ったりしている。それぞれに自己の生活を凝視^{みつ}めている。しかも彼らの歌がただに素朴な農民の歌謡だぐらいのものでなからう。立派に短歌道の上からも教養があり鍛練も経ている。人数からいっても歌人としての価値から見ても、恐らくこれほど高い民衆芸術は西洋の田園にはあるまいと思うね。何故もつと日本人は日本の芸術を内省して見ないかと齒痒^{はがゆ}くなるな。一にも西洋二にも西洋だ。それに昨今のアメリカ化はどうだ。」

「だから、俺は印旛沼を開墾するというのだ。よからう。やるぞやるぞ。」

と、「安別だ。安別だ。」と誰か走ってゆく声がする。

「や、安別だな。」

「おお、そうか。着いたな。」

驚いて、二人は立ち上った。

激しい雨の音と、波の響だ。

*

鮮かな緑の低い丘陵、そのところどころの黒と立枯れのうそ寒いとど松林、それだけの眺めの下に、ぽつぽつと家が五、六戸。冬ならば、とても荒まじいであろうところの辺土である。

これが日露国境の安別かと思うと、鬼界ヶ島にでもまざまざと流されて来た感じである。いや、それでもまだ平らかな丘の端れに白い小さな洋館が見えた。測候所でもあろう。そのまた北寄りのこれはやや小高く迂り上った傾斜面の中程に、鼠いろの天幕が一つ角錐状に張られてある。

見ているでも激しい荒波である。それも強雨の霧しづきの中の浜辺で、あちこちと奔走している黒い人影までが、つぎつぎと吹き飛ばされそうに撓んでいる。

ぼう、わう、わう。

あ、犬が吼えてる、吼えてる。

と、小さな鈍いろのランチが高く低く、のめりそうに高く低く、その荒浪を乗りあげ乗り下ろして来る。ぼうぼうぼうぼう。汽笛ばかりがけたたましく弾みをつけながら、横さまに倒れ倒れ起き上って来る。と、後に曳いた大きな舩に、洋服や半纏著の二、三人が

立つて、何かしきりに帽子を振っているが、とても凄まじい揺れ方である。

その時、私たちは思い思いの防水用意をして、既に右舷のブリッジのそばに犇々ひしひしと詰めかけていた。

ランチは程よい距離に近づいたところで、曳綱ひきづなのロップを放すと、代って舳がひたひたと近づいて来た。巡査と村長さんらしいのが直立している。いかにも素朴な風をしている。此処にもそうした人たちが住んでいたのかと思うと、何かしら心強くもなる。

雨は幾分かずつ小降りになるようであるが、波のあおりはいよいよ激しくなるばかりである。ともすると、舳が舷側のブリッジの中程まで糶せり上って、ガチガチとやると、すつと落ち込んで離れてしまう。

「そおれ、あぶないぞ。放せ、放せ。」

「やいやい、そのロップを投げろ。」

「それっ。ちえっ。駄目だ駄目だ。」

「莫迦、こつちへ寄越せ、なあんだ。あつはつは。」

それも、やつとのことので、どうにかブリッジに繋つなぎ留めると、第三班からどかどかと気き早はやの連中が降り出す。「あぶない、あぶない。」である。

と、ランチにまたロップを放る。ランチはまた波飛沫なみしぶきを上げ上げ、半弧をえがいて、ぼつぼつぼつと引き返してゆく。

「万歳。」と艦上から誰やらが麦稗帽を振る。舩からは、タオルをかぶるもの、マントの頭巾に眼ばかりのもの、蝙蝠傘、ハンチング、誰、誰、誰、誰、いつも見知っているそれらが一斉に「万歳。」である。弥次る、はしやく、手を振る、顔で笑う。

すばらしい波と雨と霧。舩は見えつ隠れつ、思わぬところに帽子の幾つかを見せてまた波の向うにずり込んでしまう。そうして割合いに早く小さくなってゆく。その間にも浜ではもう一つの団平だんぺいが騒いでいるのだ。

「これは大変だな。命がけだな。」と笑っていると、つい傍に日夫人が小豆色あずきのコートをつけて、タオルで頬かぶりの、鼠いろの眼鏡をかけて、ちらと愛嬌笑いをした。

「や、あなたもいらつしやるのですか。驚いた。」

「ほほ、えらいでしょ。この恰好。」

「えらいな。タオルはいい。僕もかぶつて見ようかな。もう一つこの上から。」

「そうなきいませよ。これ、浴室のタオルですよ。」

「しめた」笑つてると、いきなりびしやりとズボンのお尻を叩かれた。

「白秋さん、しつかりなさいよ。」

ひよいと振り返ると、旦那様のH君だ。

「やあ、しつかりしている、している。」

これには驚いてしまった。

ところで、私たちの第一班がようやく舟に乗り込んだ時には、第三班のそれらより恐らく一時間は遅れていたろう。

と見ると、もう先発の一群は黒蟻のように、北寄りの緑の斜面を、黙々と螺旋状らせんにのぼっている。角錐形テントの天幕が一つ。その上の頂ちかくまで匍はい上っている影も二、三は見えた。

「あれが国境だな。」と私は見た。

波のなだれが颯さつと頭からかぶつて来た。雨がまた勢いきおいを盛り返して来た。

*

それから、白木の角標の薩哈噠州サガレンピレオ北方二里に遭遇であったのである。

そこで、さきほどからの強雨はいくらか細めになったが、細身の洋杖ステッキ蝙蝠傘をとおして、私はまったくのずぶ濡れになってしまっていた。私は黒の背広の上に薄緑のレーンコートをつけ、白の運動帽をかぶった上から、浴室用の厚いタオルをかぶり、それも吹き飛ばされないために、その首根つこを、また一つの手薄なタオルで、後ろからキツと引き締めて、首で結んで、あまりを長く垂らした、まるで白い兜を冠った川中島の信玄といった風である。

こうして私は国境安別の砂浜に立ったのであった。

上って見ると、沖から見た通りの、それは荒涼たる寒村であった。

先ず目についたのは鐘詰工場らしい、ほとんど吹き曝さらしのバラックだ。大きい、犢こやしほどの樺色の樺太犬がのそりと、その前には出ていた。ざくりざくりと薄墨色の砂を踏むと、昆布や赤い大きな蟹の殻や流木の破片や、何かの脊椎骨が雨にじつとりと濡れて、北海の漁村らしい臭気が鼻をついて来た。

とうとう国境まで来たのかと思うと、ひえびえと私は雨の湿りに顫ふるえたが、また、子供のように其処らを駈け廻りたくもなった。

「や、車前草おおばこだ。素敵素敵。」

それは樺太事前草とでもいうのだろう。すばらしく大きな葉だ。それが踏めば実に柔らかな緑をしている。砂浜から一段上ると、その車前草に縁どられた径こみちが続く。大勢通ったのでひどい泥濘ぬかるみになつていたので、私は草の上を歩く。

「や、驚いた。馬鈴薯じゃがいもの花だな。」

内地では五、六月の薄紫の馬鈴薯の花だ。蕊しべの黄色い新鮮な花。

「や、菜の花だな。これは驚いた。」

とある漁師の家の窓からは女の子がたった一人面かおを出していた。その前の畑には、いかにも雨に濡れた黄の菜の花が咲き群れていた。それに豌豆えんどうの花、背の低い唐黍とうきび。葱ねぎ坊主ぼうず。

この国土のはてに来て、この鮮かな野菜の花を見ることは。この暮春ぼしゆんと初夏との色。私はまたびしやびしやと緑の上を歩いてゆく。この車前草の踏み心地は。

雨がしだいにあがりかけて来た。が、まだ横なぐりに吹きつけるものがある。

砂浜には、細い丸太の長方形の高い柵が、その雨と風との中にさびしくわびしく続いていく。網小屋のようなのも目につく。私は道連れの巡査さんに訊ねて見た。

「これは何です。」

「にしんかんば 鯨乾場じしんかんば であります。これは廊下と申しまして、ここへ鯨を乾すのであります。」

「この小屋は。」

「これは納壺なつぼであります。網や雑具を入れるのであります。」

その外そとに大きな釜が二つずつぐらい据えつぱなしで、何れもが激しい鯨の臭気でもろんでいた。釜の中のは鯨粕であろう。粕の上には雨が降り溜り、脂がぎらぎらと浮いている。そのにおいだ。季節はずれだし、無論そこらには鯨らしいものは影も見えないで、たまたま昆布などがヒラヒラとしているきりであった。

と鴉からすが飛んだ。大きな黒い鴉だ。

ぞろぞろと汚らしい男女の童わらべどもが出て並んだ家の戸口には、軒ごとに紙製の日の丸の旗が掲げられてあったが、それも紅が流れにじんでもうピラピラになっている。髭むじやの男の顔も、そそけ髪みだの淫みだらがましい女の顔も、むさくるしい二階の窓から好奇らしく私たちを眺めていた。それはたつた一軒の旅館兼料理屋らしかった。襖からかみの染点しみまでが浅ましかった。

大きい納壺の一つは戸が開けつぱなしになって、とてもすばらしい黒熊の毛皮がその形なりにぶら下っていた。その黒い黄の交った粗々しい毛並には雨霧が降っかかり、内側の

白い皮までがすすべと冷えきって何か無気味な、その納壺の奥には網が網臭く積まれ、土間には赤子を負った赤い髪目の大きな女の子が、ただむっつりと時化波しけなみの荒海を眺めている。団員の二、三はその中へずかずかとはいって行つた。吊るされた熊の毛皮がぐるぐると、顎あごから廻り始めた。

駐在所があり、郵便局があつた。間まを隔おいてぽつりぽつりと、それはバラック式の果敢はかないものであつた。以前に、国境守護の駐屯兵が住むために急造したという小舎こやのままであるらしかつた。東洋風の簡素なものだ。

だが、何という巨大な虎いたどり杖であつたろう。それらの小舎のうしろ、丘の崖から下の裾まで、叢生した虎杖の早くも虫がついて黄ばみかけた葉の間には、今まさに淡黄緑の花盛りであつた。それに丈の高い女郎花おみなえしに似た黄色い草花の目ざましさは。私はまた佇たち停つて、これらの初めてみる樺太の景趣に目を円くした。

それは燃え立つような細い赤い実のつやつやとむらがつた名も知らぬ木の藪やぶがあつた。

「あれは何の実。」

「ななかまど。」

と一人の男の子が私の問に答えた。

風と雨とがまた激しく音を立て初めた。

「おおい、おおい。」

前から、後から、わが団員の数々が、その風と雨と、しぶきで飛んでゆく霧の中から呼び応える。

こうして、私たちは国境の天測点へと、草ばかりの一つの丘の頂^{てつべん}辺^{べん}を目ざして、泥^{ぬかる}のひどい小径をうねりうねりして登りにかかったのである。

*

既に天測点を見極めて続々と降りて来る誰彼は、頭の上に大きな驚くべき^{ふき}蒨^{ふき}の葉を傘代りにかざしていた。杖にしてついてである。

「ほう、それが樺太蒨ですか。」

「ええ、大きいでしょう。」

「何処に生えています。」

「やたら一面です。」

ほうとまた驚きながら私は登る。靴に巻きゲエトルだが、わざわざと普請して土もまだ柔かなところへ、大勢で雨の中を踏みくずしたのだ。靴も何も泥まみれになる。それに足がかりも悪く、坂は急になるので^{すべ}ることおびたほしい。私はとうとうのめりそうになつて、強く突き立てた蝙蝠傘に思わず全身の重みを托したので、それが弓のように^{たわ}撓むと、その柄^えからボキリと折られてしまったものだ。柄^{がら}にもない華^{きゃしゃ}奢^{しゃ}な洋^{ステッキ}杖^{スティック}蝙蝠傘などを買つて来たのがそもその通りであつた、私は苦笑して、その柄^えと尖^{さき}とを両手に持った。

斜面の中腹に出たところに、例の天幕^{テント}があつた。天幕の裾ははたと風にあおられていた。人声がしきりに笑つているので、濡^{ぬれ}鼠^{ねずみ}のまま飛び込むと、それは私たちのために村の青年団の人たちが番茶の接待に出てくれているのであつた。

麦酒^{ビール}にウイスキー、キャラメル。

まことに赤いシトロンと草の緑は天幕の内部を明るくする。

私は麦酒を技いて貰つたが、凄まじい強雨と荒海の潮鳴りとに耳傾けながら、この国境の山上で味^{あじわ}う麦酒の味はひえびえとしてそれもいい記念になるだろうと思えた。その色も泡も。だが、私は金を払うことを忘れて、一気に斜面を駆け上っている私自身をその後で見出した。

*

そこらは虎杖の花盛りであった。樺太虎杖の花は内地で見るとようなほのぼのとした淡紅いろを含めていないが、その緑がかった薄黄は却て度ましくてあわれであった。それが雨と霧とに濡れしずくになつていたのである。

太い丸太の無雑作な二坪ばかりの周囲の柵があつた。その柵は朽ちかけて、既に外皮のところどころはボロボロにくずれかけていた。その中に日本と露西亞との境界標石が厳然と立っているのだ。正方形の台座に据えられた鼠いろのその標石は高さは二尺にも満たないであろう。北面に驚、南面に菊の御紋章が浮彫りにしてあつた。私は露西亞領の虎杖の草叢にもはいつて見た。

北を眺めると、その海岸線は南と同じようなさして高からぬ丘陵が続いて、立枯れのとど松の疎林が、しきりなく流るる雨雲の下にほうほうとうち煙つて見えた。寂とした国境であつた。

露西亞人村のピレオはつい、一つ二つ向うの丘の蔭にあるのだと聞いた。時々出獵する

彼らの或る者の姿さえ見かけることがあるともいう話であった。国境とはいえ、警備隊も監督官もいるわけではなし、出入自在であるようにも見られた。簡単なものだと言われ、また顔を見合せた。

ここでカメラを向ける者がかなりパチパチやった。

私と友とは、ここで一つ撮ってもらった。武田信玄と国定忠次という奇異な恰好である。

誰だか露西亜の方を向いてつくづくと放尿していた。

天測点はいその上にあった。海上一キロメートル若干の地点である。

其処にも虎杖の花は今がまさに盛りであった。

この虎杖は露西亜領の花

歌の四五句が口をついて出た。だが、一二三句はどうしても出来ないで、私はまた帰路についた。

そこで天幕テントに再びもぐりに行ったものだ。

「麦酒の代は払って置きますよ。」

それからシトロンを一本あけてもらったが、また金は払わずに飛び出す私を見出した。

慌ててまた引き返した。

すばらしい斜面の緑、^{すべ}にるにるにる。

*

ワレラコクキヤウニアリ

妻子を初め東京の諸友に、その安別から打電した時には、私もまた意気軒昂たるものがあつた。

小学校の粗末なテエブルの上で、私はしきりに頼信紙の雛^{しわ}をのべていたが、庄亮君はまた絵葉書に即興の歌などを走り書きしていた。

国^{くに}土^{つち}のはたてに我は来りけり薄紫の馬鈴薯^{じゃがいも}の花

「これはどうだい。」と訊くから、

「そうした四五句は僕の三崎の歌にもあつたよ。」というと、

「こりや困つたな。馬鈴薯の花でなくちやならねえところなんだがな。」と、笑つて頭を搔いた。

「君も気がついたんだね。」というと、

「驚いたよ。全く。あの馬鈴薯の花の新鮮なことつたらないじゃないか。あつはつはつ、こりや困つたな。とにかく。」となつて

ことごとく名は知らぬ草ばな

と訂正した。

駐在巡査のYさんが、そこで扇面など拵げて来る。が、しかたなしに私も筆を執つた。

この虎杖は露西亞領の花

「半分しか出来ておりませんよ。」

この時こそ、泥靴の、びしょ濡れの、異様奇体の団員の群集で、いっぱい充たされた校舎であつた。騒々囂々たるものであつた。

熱い熱い湯気のたつ番茶の土瓶を持ってしきりに奔走していた人の中で、まだ若い都会風の色の白い夫人があつた。郵便局長の奥さんだということであつたが、誰だか、

「こうした処においでになつてお寂しくはありませんか。」とそぞろに同情している者があつた。

「おほほ、それは寂しうございますけれど、馴ればそれほどありませんの。」

「でも、冬はたいへんでしよう。」

「ええ、それはもう。」と流石に肩をすぼめたものである。

見まわすと、窓の上、四方の板壁には、フランクリン、リンコルン、ビスマークだ、西郷南洲、そうした世界的英雄のやすもの廉物の三色版がさも大おおぎよう業に掲げられてあつた。なる

ほど、此処は明治の二十年代だなど思うと、果してどんな教育が行われているものかと微笑された。

「童謡はやっておいでですか。自由詩は。」

「いや、一向にまだやらしておりません。内地にいました時は、考えてもいましたが、こうした辺鄙な処では、ごくごく程度が低いのですからな。お恥かしい次第です。」と教員さんの一人がすっかり恐縮してしまった。

生徒といえ、あの納壺の熊の毛皮の傍にいた赤毛の大目玉の女の子や、アイヌ式の、または劉生りゅうせい式の童男童女はしけどもだろうと思うと、それもあわれであった。

舟の幾度かの往復に、自分たちの順番を待つ間を、私たちは、そのとつっきの鐘詰工場の中へはいって見た。仕事は休んでいると見えて、その板敷きの広間はガランとして、例の大きな樺太犬なるものが獅子のように傲然とその真ん中に蹲うずくまっているだけであった。ただ、これも大きな一つの溜桶に透明な掘貫きの水がなみなみと溢れ、こんこんと湧き出ているのが珍らしかった。奥では燻製の鯨や、蟹の鐘詰の鐘や、シトロン、麦酒の瓶などが、売品として、二、三の卓上に飾り立ててもあった。楣間びかんの即製のピラを見上ると、

黄ストロン 一本参拾銭

赤キング 一本参拾銭

水雷サイダア 一本式拾五銭

と拙ますい字で、しかも赤インキで丸々をつけたのが、「なるほど此処は樺太だわい。」とおかしがられた。

その黄ストロンをまた一本あけてもらった。

*

本船へ帰ると、私たちは初めて自分たちの塹ねぐらに戻ったような気安さを感じた。何かさびしい、あつけないような国境の印象であった。

午後には、やや西の方が霽はれかかって、時が経つにつれて、赤いぼやけた雲の色になった。日が短くて、薄ら寒い空気であった。

能楽の笛がまた何処かの甲板に鳴り出した。

人々はまた椅子を持ち出し初めた。ずらりと外洋を向いては並んでいる。

「赤化せつかは絶対にかんです。」と誰やらが叫んでいた。

「とにかく、現代はあまりに無秩序です。学生間にでもですな、この際大いに尊皇の精神を鼓吹せなくちやならぬ。そこでですな。私は天照皇太神宮と、阿弥陀仏と、我が皇室と、

この三体を一つに祭つて、いやその祭壇を私の家庭にこさえたのです。私は神でなければならぬ仏でなければならぬというような偏狭でなしに、それに皇室と、つまり神を敬い仏を信じ皇室を尊むという、この主義信念を持つて毎日礼拝している。家人にも礼拝させる。訪ねて来る学生にも礼拝させる。これが実に日本人であるところの。」

「あれは誰だい。まるで中学生の演説口調じゃないか。」と一人が伸び上ると、

「京大のA博士だよ。叱つ、しずかに。」とまた誰やらが慌ててすつ込んだ。

「そうです。現代の人心は実に浮薄です。救うべからずです。」とまた頭の頂辺から火のついたような、外の^{ほか}声^{こゑ}がする。

「へへん。」と医専が舌を出した。「ブルジョアが何だい。階級が何だい。チエツ。」と何かしきりにスケッチをしている。

「俺^{おいら}が処^け来^こて見^みろ。西郷先生の城^{しろ}山^{やま}で切腹^{せき}した短刀^{たん}ちゆう^{ちゆう}もんが、チャンと蔵^{かく}してごわすじや。手紙でん何でん持つとる。来て見ろや、そりや、えさつかぞお。」

「喧嘩^{けん}じやないかね。びどく暴^あれてるじやないか。」と、自分たちの談話室では庄亮が湯上りの浴衣の胸をはだけて、濡れ手拭で、きゆうきゆうと、まだ紅みの残ったその首筋を拭き出した。

「なに、あれは地声だよ。薩摩人だよ。ほら、あのA爺さんさ。」

「そうか。あの人はたしか城山に家があるといっていたね。」

「うむ、あれで、汽船も持っていれば自動車も持っている。山も持っているという話だ。何でも富豪だと聞いている。」

「えらい元気だね。喧嘩だったらひとつ出てやろうと思ったがね。」

「ぬうつとかね。」

「あつはつは。」

「お得意の剣道も当あてにはならないよ。尾山おやまの篤とく二郎じろうと相上段というところだね。」

「やあ、これは参った。いつかの歌の会のテエブルスピーチかい。失敬失敬。」

「だが、今日はずいぶんみんなが亢奮してるじゃないか。」

「草根木皮の祟りだろうよ。」

「あははは。まあ紅茶を一杯いただきよう。」

私たちは、早速に船室ケビンの浴槽で、身体を温めて、さばさばした浴衣の着流しで、卓テーブルにむか対合むかった。それから間もないことであつた。

「今夜は飲みそうかね。」

「いや、どうも咽喉がこれじゃあね。」

「困ったね。大切にしたまえ。僕は三等へでも行つて遊んで来よう。気楽でいい。」

「三等も今夜は亢奮してるぜ。」

「何にしろ、あの吹き降りぶりに国境を見て来たんだからね。少々は変になるだろう。」

「だが、A博士はなかなか国粹党だね。」

「あれだね。まあいいさ。日本精神への復帰ということだろうから。僕はこれで真実の尊

皇だからね。」

「そうだな。それは知ってる。」

「結局日本は日本だよ。日本人は日本人だ。」

「となるね。」

「何でも東洋芸術に限る。そう思わないのかな。」

「あつはつは、思うよお。」と、我が庄亮は、また蠅の如くにその両手を頭の上で揉みあげた。

銅鑼が鳴る。

お、夕餐だ。

船が出る。スクリューが響く。汽笛が鳴る。お馴染の船室ケビンの揺れが、コトコトとまた笑い初はじめた。

附記

安別の小学の生徒たちのために、私は一つの童謡を茲ここに贈り物とすることをせめてもの心のやりとする。

海は鞋だったん鞆、

夏の暮。

犬よ、のそりと

出て見ぬか。

鰺にしん乾場かんばの

葱坊主、

鴉からすつついて
啼かないか。

ここはお国の
北のはて、
赤い夕日も
もう寒い。

パルプ

甚深微妙の音もなき響の響が其処にはあつた。内に黒く剛い、しかし外に灰銀の柔かな、平滑な光の面、面は縦に大きく円く、極めて薄手の幅を持つて、その両面が、一方は紫の陰影をしかもまた旋転光の数かぎりなき細かな輪の線を迂らしながら、目にも留らぬ速さで廻つていた。無論腕木の支柱があり、黒鉄の上下楨が横斜めに構えてはいた。その把手を菜つ葉服の一人が両手でしつかと引き降しに压えた刹那である。

榎松の伐りつばなしの丸太の棒が、一本ずつ、続々に、後から後から、鱗のごとく、鯨のごとく、鮫のごとく、生き、動き、揺れ、時には相触れ、横転しつつ、二条のレールの間を、エスカレエタ式の流れに乗つて、遠い屋外の白光から、一旦黄色光に変じ、黄色光から、宏壯な機関室に入つて、やや本然の木の地の明りにその色は沈静して、しかして、コトリコトリと首をもたげて来る。その一列の丸太を載せて、流れは極めて単調である。疾きのごとく、遅きのごとく、流るべくして流れ、移るべくしてただ移る。いわゆる淡々たり寂々たり、虚にして無為だ。

時にまた、レールの上、十二、三吋インチの空間をあけて、かの直径七十吋余の截断刃せつだんじんが、むなしくその靈妙音を放つて、ただに劉りゅうりよう 唳りよう 肅々と空からまわ 廻りしているのである。その旋転光。

と、第一の丸太が流れてその閏門にかかつて来る。恐ろしい刃やいばの下に。

丸太はすでにその荒皮を剥がれているのだ。何時のまに如何なる機械によつて、かくもすべすべとなまなまと、木地も露あらわにめぐられ引きむしられたかそれはわからぬ。その生き肌はだが目を瞑つむつて来る、仰向いて、観念して。うち見るところ、恰あたかも両手両足を断ち斬られた素すはだか裸はだかの美女の首付きの胴体である。しかも生きている、顫ふるえている、わなないていゝる、氣死して醒めて、痙攣して、極度に蒼ざめて、また赤く熱して、膨らんで、張つて、真つ白に死おちかかつてである。もはや逃れられぬ運命が、瞬間が、しんしんと、淙そう々と、その目前に鳴っている、待つている、澄あんでいる、閃ひらめいている。と、ものの一尺ばかり遣り過やして、

じゆう……である。

その膨れて張つた、すべすべとつやつやとした美女の生肌の、丸太の首根くびねつこに、灰銀色の旋転光の截断刃が、物の氣持ちよく、それも音もなく、（恐らく澄ちやうしん 心の極きよくとはこ

うした無音だろう。閑かに、無気味に、降りて、その円弧の端が触れると、
じゆう……ううである。

そのまま、じいいい……と、底無しに喰い入り、押しつけ、放して、すうつと空へまた
十二、三吋あがると、流るる胴体は二つになって、截目も見せず滑ってゆく、その腹部
をまた、

じゆう……である。すうつである。

幽深見難し、甚大無量の、また、円満無礙の、謂うところのおぎろなき物、この霊妙音
は何から来る。おそろしい截断刃はただ廻っている。

神性の惨虐、虚無。

私は息を呑んだ。

丸太はまた、次から次から流れて来る。菜つ葉服はただ、上下槓を下げまた上へ放つ。
これしも黙々と、秒をはかり、吋を見、じいいと深く、それも瞬時に圧えて、殺して、す
うつと放つだけである。

だが、何とすばらしい截断であつたらう、虐殺で。

静かに佇んで、私は身じろきひとつしなかつたが、また目ばたきひとつしなかつたが、

私は確たしかに心でわなわなした。だが、何という快感。恍惚たる無上の残忍感。

私はまったく美女の胴体を、その戦慄の対照として想像した。ああ、このいい知れぬ怪異の殺人。

そればかりでない。私は流るる丸太に自分自身の肉体をすら感じていた。

じゆう……である。

何といい気持ちだろう。ああ、一思いに殺やられたら。うんともすんともいう間はないのである。じいと深く寸のめりに喰い込まれて、すうつと放たれる。その刹那の快感。恐らく突かれ、斬られ、射たれ、搏たつかれ、絞められ、毒されるあらゆる死難よりも、どれだけ恐ろしくて、また安らかであるか。無量苦と無量喜。

廻転する截断刃は、劉曉と、また、音なき音を深める。何という霊妙な誘惑、誘惑、誘惑。
惑。

そうだ。じつと目を瞑つむつて、仰向いて、観念して、流れるままに、この截断刃の下を、こうして肅々として遣り過ごされて、じゆう……うう。

あつ、私はその時、青くなつて、飛びあがつて、我に返つて、駈け出す私を見た。

*

斧だ。

大きな部厚な斧、上の縁へりが黒く、中が両方から内へ反そつて、また開いて煌々こうこうとした斧。これが、ゆつくりと、寛々かんかんと、まるで象がうなずいて、また鼻を退ひく、そのように、立てた六、七吋ばかりの高さの丸太を、ちよいとやる。ほんのちよいと触れて退くだけだが、ばらり、すんすんと縦に割れてゆくのだ。音ひとつ立てるものでない。

截断された丸太が、ころりころりと、ころがつて他のたレールへ移ると、敏捷すばやく菜っ葉服の一人の手へ捕えられ、重々おもおもとこの吊り下った大きな斧の下へ立たされ、ちよいと縁を割られて、ばらりとなる。

槓こうかん杆の、片手は軽い。だが、大斧の、威力は籠る。

鼻が無くてしかもかの象の鼻のアンダンテ。

斧は重くて軽い。ちよいである。

これはまた思おもいよこしまなし
無邪なまじの惨虐。

知るがごとく知らぬがごとく、鈍重で、宏量で、斧はうなずく。虚心平気とはこの事であらう。

斧はうなずく。

「則天無私。」 「則天無私。」

ちよい、すん、ぱらり。

漱石の非人情もここまで来ればおもしろい。

天とは、言葉を換えていえば、「絶対の冷酷」そのものであろうか。

*

轟々々々々々、轟々々々々々、

混雑、擾乱、压榨、粉碎、散乱、微塵^{みじん}、芳香、光、光、光。

や、木つ羽だ、木つ羽木つ羽、木つ羽微塵だ。流出だ。氾濫だ。と、私は呆然とした。

コトリコトリ、トンタンと、割られた、丸太の、体^{てい}のいい薪^{まき}ざっぼうが、レールの間を流れて、ゴトリゴトリガラガラと、放り落される、と、その井堰型の粉碎機の中での、た

ちまちの雑音囂音、大動乱である。

何とすばらしい短時分の粉碎、まさにこれ、霹靂的の粉碎なりである。

椴松の、丸太の、美女の胴体の、今のこの無慙である。

型態すでになし。椴松の生体はここに一切木つ羽微塵となつてしまった。

何とまた驚くべき強力の、暗室内の惨虐だろう。

思うに、前の大斧は則天無私のちよいであつたが、これはまた魔神の怪異である。少くとも一千人の金剛力者は、この機械の中に暴れて居る。何という破壊力だ。

「おそろしい機械だな。」と参観の誰かがいった。

「パルプといやはるのは、へえ、この木つばだすかいな。」と誰かが、その木つばの二、三片をその生つ白い掌の上でザラザラとあけた。

ああ、そうだ。パルプ、パルプ。

高麗丸船上から、この朝、私たちが瞥見した、あの濛々たる黒煙を吐いていた五、

六本の大煙突の立つ真岡工業会社の内部に、私たちは今まさに、兢兢々然たる胎内潜りをやっているのだ。

パルプ、パルプ。

*

観光団員の一人は、鼠色のセメントの壁面に挿まれた、青色の急階段の半で、よろよろと倒れかかった。顔が真っ蒼になっている。慌てて、その男を誰かが引つ擁えて下へ降りた。

「毒瓦斯だ。」わあつと白ヘルメットの近眼鏡が、その背後から転げ転げ逃げ降りたものだ。一種異様の悪臭が私の鼻をも衝いた。うむ、むむむむである。

「あははは、亜硫酸瓦斯だよ。大丈夫。」という上から笑い声もした。

そこで、また、どこかかとおがった。それでも半数は階下の開き戸から表へ飛び出してしまった。空気、空気、空気。

なにしろ、一同、生れて初めて見た截断刃、大斧、粉碎機などに仰天し戦慄し畏怖しきつているのだから、突然、しゅうしゅうと斜め下ろしに吹きまくって来た亜硫酸瓦斯の悪気流には、全くのところたじたじとなつたにちがいない。

蒸し熱い、激しく臭う、沸々沸々沸々とした何かが、階上に充ち満ちていた。樺太とは

いつでも八月の炎暑である。鼠色の壁の幾つかの煤けた硝子窓からは、流石に強烈な日光が流れ込んで、そこらの麦稈帽や鳥打帽や赫ら面や鼈甲縁の眼鏡やアルパカの詰襟のぼんの凹などが一時にくわつと燃え立って、それらがその光線を壁の影へ越えると、また後から後からと来る浴衣や、女帽や桃色のスカートに明って揺れて熾つた。

ハタハタと白い扇子やハンカチーフが群蝶のように舞い出した。おおかたは鼻口を固くふさいだものだ。ところで、「やあ、こりやあ、どえらい羊の胃袋だなあ。驚いた。」と、頓狂な、金魚眼をひんむいて、また「ひやあ。」と叫んだ道化者がいる。

見ると、大きな大きな木釜のどれもが、にちやにちやと、まるで口の中で噛みつぶしたラブレタアそのままの椴松の繊維で、薄ぐろく、盛り高く、一杯に満ち溢れていた。阿刺比亜夜話の魔法にかかった王子や王女たちの羊の、一千匹も捕えて来て、それらの胃袋を断ち割って、中のどろどろを掻きさらって、一とところに集めたら、成程こうでもあろうか。

だが、片々に粉碎されたとはいえ、あのパルプの薄紅い光沢の木つ羽が、木の肉片がこのもこもことした、軟柔かな、粘りの酸っぱい、繊維の、一種の木の練り粕にたちまちの間に変形するとは。

沸々沸々と、瓦斯の立つ痘痕あばたの面めん、これがあの丸太の、美女の胴体とは。
階下はおそらく焦熱地獄の機関室であろうか。

沸々、沸々、沸々々々………沸。

*

清しやうじやう 浄じやうな、そうして荘嚴な大伽藍がらん。

空気は沈静し、天井は高く、光はほの青い何かの陰影と織り交つて、ひえびえと、そうして明るく、幾つかの室内は次から次へ見通しに広い。そうしてまた場外の外光が遠くの遠くに小さく、正方形に白く眩まばゆく切り開かれているのだ。

その取つつきの本堂といったところに、高さ百吋以上の巨大な鉄製の機械が二列に、間を広くあけて並んでいた。如何にも均齊を保つた配置であつた。それらの凡てがまた極めて摩訶不思議な生命力の威嚴を顕現しているのである。

静中の動、動中の静、兼ね備えたこれらの紙かみすき漉機械のあらゆる細部の機関、細きもの、平ひたたきもの、円き、網状の、腕型の、筒の、棒の、針金の、調しらべ革かわの、それらがひとし

く動いて、光つて、流れて、揺れて、廻つて、幽かな幽かな微妙な複雑音と、製紙特有の清らかに爽かに鮮かな芳香と気品とを発して、目に見えぬ電動力の表象体そのものとしての、絶間なき活動を続けているのである。

何とまた其処らに動いている菜っ葉服の人間の、そうして參觀人の私たちの小さなことだ。私たちは唾然として見上げてゆく。セメントの床を踏む靴音までも畏れて謹んでそうして叩頭してゆく。

あの固形体のパルプが、ねとねとの綿になり、乳になり、水に濾され、篩われてゆく次から次への現象のまた、如何に瞬時の変形と生成とを以て、私たちを驚かしたか。この化学の魔法は。

あの鈍色の液状のパルプが、次の機械へ薄い薄い平坦面を以て流れて落ちると、次の機械では、それが何時のまにか薄紫の、それは明るい上品な桐の花色の液となつて入り、長い網の、また丸網の針金に濾されて水と繊維とに分たれ、残された繊維はまた編まれて、吸水函に入り、ここでいよいよ水分が除かれると、たちまちの間に、その次では既に既に幅広の紙らしく光沢めき固まつて来て、次のまた強く熱したローラーの幾つかに巻きつき巻きつき、そのローラーを蔽うた毛布の上を通されるその幾廻転をもつて、遂に最後の乾

燥をおわると、はさはさ、さわさわと白い白い音と平面光とを立てながら、ここにすうすうと閃めき出して来る。すつとまた切られて同型同時の長さとなって、一枚一枚と、大きな卓上に、寸分の謬りも無く、はらりはらりと送り止まって、積り、積つてまたその層を高めてゆくのだ。

何とまた、あの幅の広い広い、そうして薄手の薄手の白紙が、ローラーからローラーへ、一間の余の空間を這つて巻き附くその全く目にも留らぬ廻転と移動とを以てして、些の裂けも破けも、傷つきも翻りもしないことだ。何という叡智と沈着と敏捷と大胆と細心とを、秘めて、また、示していることだ。その神のごとき巧妙、靈性の作用は何から来る。

ほんのたまさか、それも奉仕（そうだ、監視ではない、奉仕そのものだ。）している人間の過失で、何か触れた手の疎忽で、ほんの何かの裂傷でも生じた場合に、慌てて、閃めき流れて来る紙の一端を強く裂いて除けてる、その刹那こそはまた、如何に老練な工人どもがほとんど始末し、整理しきれない速さでもつて、後からと後からと、出来たてのぶんぷんする白紙は奔り出して来るのである。それを手に触れるが早いのか、次のローラーへ、つつと巻きつける、巻きつけるとまた朗々として続いてゆく。その間の葉っ葉服の恐慌は、何とまた高麗鼠のようではないか。

積みれ積みれる白紙は、所定の、高さに層かさむと、目の廻る速度でまた除去して、空くうにし、空へまた奔つて来て乗る白紙へ備えねばならぬ。人間の手よりも紙の迂りの迅さは、それこそ彼らを同所に同一点に、幾廻転をさせるか、思半おもいばに過ぎよう。それどころでない。実に無量の、また極度の迅速生産である事実が、次の室しつへ移つてもまた、幾百の女の二十日鼠ねずみがいかに天手古舞てんでこまいであることか。笑えるものではないのである。

若い女たちも、実に機敏で手馴れたものである。卓の数列に向つて並んで、手頃に重ねた幅広い白紙の層を、ちよいと片端へ右の手の指を触れると、ハラハラハラハラとめくる。その速さには驚く。また、破損紙を識る直覚的の眼と指の確實さと速さにも驚く。だが、如何いかな彼女らも、後から後からと送られて来る生産力のそれには、絶えず追つ立てられ、焦燥じりじりさせられ、慄えさせられ、しまいにはへとへとにされてしまう。見ろ、彼女らは髪もそそげ、どれもこれもが面色は蒼白になつている。

ここにまた、碧い包装紙を拡げ、検査された完全紙の層を、としりとしりとしと載せ、重ねて、揃えて、整えて、またパタパタと四方から包み、サツサツと糊刷毛のりはけで掃き、レットルを貼り、押し、叩き、次の荷造場にづくりばへ送る中年おんなの活躍もさることだが、彼女らもまた同じ種の高麗鼠である譏そしりは徹頭徹尾免れない。何ともあわれな女奴隷であろう。

ところでまた、見ている間に破損紙が天井に届くばかりに積まれ高まってゆくものにも、私は目を瞠みはった。葉つ葉服らのそれは、敗戦の実証であつて、抄紙機に駆使いされ、周章狼狽の果ての過失から、まざまざと彼らは弱者たる彼ら自身を彼らの運転する機関の前に曝さねばならない惨めなジレンマに堕ちてしまったといつていい。機械は本来人間が発明し製作し運転するものであるが、一旦火力や電動力の導火みちびをつけられるその瞬間から、たちまち一の個性を確立して来る。偉大なる生命の大活動が始まる。全く、一の神秘な人格とさえ成つてしまう。その時、人間はむしろ却つて被駆使者となり、奴僕ぬぼくとなり、これ命めいこれに従わねばならなくなる。個々としての人性は蹂躪じゅうりんせられ、生活範囲は制限せられ、遂には絶対の権威を以て圧倒されてしまう。この時、機械や機関は決して生命のない無機物ではない。現代の文明によつて生まれた機械は現代人に血と肉とを与えると共に、またこれを啖くらう。傲然として労働者の父となり王となり、富豪を額ぬかずかせ、国家の政治をも左右する。しかも知るがごとく知らぬがごとく淡々として無為なのも彼らである。さて、私は一人の倭人こびとが、雪山せつざんのように高い、白い白い破損紙の層を背に負つて、この大伽藍の中を匍はうように動き出したのにも驚いた。考えて見ると空くうと空とを孕んだ紙の層はいかに高くとも、実に軽々かるがるとしたものにはちがいない。だがあまりの不釣合いでは

ないか。おお、紙の入道雲が歩行く歩行く、光り輝く紙の雪山が。

そこで、原料叩解機こうかいきに移される。その山と積んだ白紙の層が、また瞬またたく間に、その大腹いふくちゆう中に吸い込まれる、と、どろどろの綿状めんじょうになり、繊維になり、液状のパルプになつて、また紙漉機械へ流れ入る。桐の花色の寒天体になり、乾燥し、また紙に還る。虚心で、迅速、無常光明世界だ。その世界にだ、人間の高麗鼠がちよろちよろと駈けまわる。引つ込む、面つらを出す。

戦場のような騒ぎはまた荷造りにある。しかし此処にも誰として一の私語すら発する余裕を与えられた高麗鼠はいない。事実空気は沈静している。ただ機械力の冷酷と暴虐とはこの工場の空間のあらゆる隅々までにも及んでいるのだ。あの無量生産から寸時の隙すきなく引きずられこづき廻まわされている人夫たちの沈黙の苦力と繁忙とは見る目も痛わしい。彼らは彼らの意志も呼吸も圧迫されどおしである。

圧搾機がある。既に包装され、レットルを貼られた紙の数連が送られて載る、パタパタパタ、トントんと四方に板を当てる、蓋ふたをする。針金の位置が定まる。すうと圧搾機が下りる。ピシャンコになる。そら、函はこが出来た。よろし。運搬台が来る。ガラガラガラガラガラガラ、走り出す。また紙包みが来る。パタパタ、トントン、すうつ、ガラガラガラガ

ラである。

また紙包みが来る。

また来る。

また来る。

また来る。

また来る。

また来る。

また来る。

また来る。

また来る。

丸太の截断から、この荷造りまで、果して何分間を要したであろう。恐らく、私たちの見た時間は二十分と経っていない。

畏怖と驚駭と感嘆と、絶大の圧迫感と、憎悪と崇拜と、私たちはあまりに苛さいなまれ過ぎた。
茲こゝで外へ出た。

夏、夏、夏、夏、

「ああ、青空だ。」

私はほっとした。

雲が見えた。山の緑が、そうして白楊ポプラのそよぎが燦々さんさんと光り、街の屋根が見え、裝飾された万国旗の赤、黄、紫が見え、青い海が見え、檣マストが見え、私たちの高麗丸が見え、ああそうして、白鷗かもめの飛翔が見えた。

いや、それよりも、私たちの立っている広庭ひろにわのこの輝きは、微風は、あ、この涼しさはどうだ。

あ、白い門が見える。門の傍そばの休息所が、

「あ、もし、もし、便所はどちらですか。」誰かの声がした。

一斉に、また、観光団員の群集が、一、二丁も向うにあるW・Cへ向って、いつさんに駈け出して行った。

真岡

真岡まおかはアイヌ語の「モウカ」である。「美しい波の上」という語義だそうである。

十四日の午前、その美しい波の上に来た。

前の夜、国境安別の海岸と別れた私たちの高麗丸は、元来た南へ南へと下航して、黎明れいめいに野田の沖合五、六丁の処にその機関の運転を停めた。予定の上陸地であったのである。だが、夜来の激浪がまだおさまらず、空しく迎いのランチも舁はしけも、煙と汽笛と駄目だ駄目だというかましい叫び声だけを、おそろしく高く低く上下させながら、空と浪とに掻き濁して、また跟よろけ跟けて引き還してしまったのであった。で、しかたなしに二時間の余を続航して、今度は真岡の鮮かな緑の小山の一連と、市街と、パルプの真岡工場の数本の大煙突と濛々たるその黒い煙とを、近々とその右舷に指呼しこし得る距離まで来て停った。浪はやはり激しく起伏していた。それでも野田よりはいくらか時も経って氣勢が衰えていた。これなら上あがれぬこともあるまいとなつて、まず第一班から迎いの舁へ乗り移った。棧橋へ上つて見て私の第一に喜んだのは、その前の広場に群たかつて客待ちしている簡素な

馬車の幾つかであった。せいぜい四吋インチばかりの波型の幌飾りが四方を取りまわして、その幌飾りの縁へりが青で、それが八月の微風に涼しげにそよいでいた。極めて開放的で、無雑作に黒と赤との板枠をはめた座席の上の空間には細い四本の柱が立っているきりであった。

「こりやいい、ひとつ後で乗って見たいね。」と私はいった。

「よかろう。」と庄亮も御機嫌だった。メリヤスのズボン下の尻端折しりはしよりで、リボンもない台湾パナマの帽子をヒョコツとかぶって、不恰好な大きな繻子しゅす張りの蝙蝠傘を小腋にかかえ、それから歌のノートを取り出した。

「写生しておいてくれよ。」というから、

「よろし。」と私も早速黄色い小型のノートを開いた。

空はよく晴れていた。そうして真岡の街は歓迎門が建ち、黄や赤や緑や紫の万国旗で賑にぎよく満飾ぎにぎされていた。つい一日前に摂政宮殿下の行啓を仰いだのであった。行啓気分が到る処に充ち満ちて、まるでお祭りであった。で、私たちは素顔としての素朴な樺太女「マウカ」へ会える、親しい、それでも物果敢ものはかない旅人としての私たちの期待を裏切られた。そうして盛装した植民地美人「真岡」に、こちらと同じく鉄道省主催の観光団員としての挨拶と接吻を投げねばならなかった。

真つ直に一、二丁行つて左折すると広い坂になつて、白い白い銀の葉裏をひるが翻えしているポプラの片側並木の輝きがまず目に映つた。近づいて見るとそれらのポプラの葉は普通のまるま円葉でない、楓のような葉であつた。裏は毛ばだつて白かつた。これが馬車の次に珍らしかつた。私はその葉の一つ二つを、早速にも撈ぎ採つてゐる誰かから貰つた。

「独逸種だねじゃないかな。」と一人がいつた。

その前に普請中のなにかし新聞社があつた。やっぱり内地ではない何かを感じられた。その隣りが役場で、階上が商業会議所であつた。

その階上で歓迎の茶菓を饗せられて、『樺太要覧』という小本と絵葉書とを一同が貰つて、また少し上手かみての新築の小学校へ入つた。日は暑かつたが、校舎の内部はまだ生々しい木の香がぶんぶん匂つて、何かつ度ましい旅愁をさえ味わせられた。

昨日、殿下の御休憩所に当てられた一室をその戸口から拝観すると、広い、素木しろぎづくりの極めて質素なものであつた。床には黄と緑との花模様のあるリノリウムを張りつめて、上段に正方形の壇があり、壇の上に、これも極めて素朴なテーブル卓子と一脚の椅子があるきりだつた。私は敬礼をして隣室の物産陳列室に入った。

花椰菜はなやさい、千日大根、萵苣ちさ、白菜、パセリ、人蔘にんじん、穀物、豆類。海産物でははしりこ

んぶ、まだら、すけとうだら、からふとます、まぐろかぜ（雲丹）、それから花折昆布などが目についた。私は売店で樺太地図を一枚買って、そこで外へ出た。裏の幔幕の向うでは運動会のおしまい頃で何か騒いでいたがそれも聴き棄てにした。ただ出口で海老茶袴の二、三と逢ったが、着こなしがいかに野暮くさく、面相がいくら内地とは違うなぐらいで、それも軽く擦れ違ってしまった。

それから少し歩いて、いよいよ例の馬車に乗った。一台にはA博士夫妻が乗って、真岡工場の方へ駆け去り、他の一台に庄亮とA博士の令息と私とが三人、早速の市街見物である。りんりんりんりん、りんりんりんりん、いくら行ってもさした見物もないので、今度は工場の方へ向きを換えさすと、広い広い一本道を工場へ、駆けつけた。両側には裝飾電球の支柱が各戸ごとに並んで、遠い遠い正面には工場の白い門と大きな灰白色の建物ばかりが埃りつぽく見えるだけで、妙に面白くない通りであった。着いてから馭者のぼり方がひどいものにも驚いたが、そのりんりんりんもそれでおしまいになった。

工場の参観は改めてここに書かない。此所で「樺太のパルプ並製紙工業」という樺太庁版の小冊子や紙の見本や絵葉書を貰って、また私ら二人は一足先きへ外へ出た。すると後ろから白髪つの支那服の和製タゴールさんが追い蹤ついて来たので三人になった。

真岡は原名エンルモコマブ、樺太西海岸での第一の殷賑な小都会で、鯨漁で有名だとい
うが、パルプ工場以外、夏にはさして興味を惹く街でもなさそうに見えた。

「つまらないじゃないか。停車場へ行つて待つていよう。」

「や、何か目^めつかるよ。」

「目^めつかったのは、ほれ向うの靴屋ぐらいだよ。少し内地とちがうようだな。」

「しようがねえでさあ。あんな雪^{ゆきぐつ}沓なら何処にだつてありませんかね。」とN老人。

「とにかく、お昼餐^{ひる}でもやるか。」

「や、しめた、蕎麦屋がある。物は試した。はいつて見ようじゃないか。」

それは汚ない縄暖簾^{のれん}式の、どかりと腰かけておい一杯というやつだが、主人公なかなか
風流人と見えて、一銭銅貨大の孔があいて日の光が射し込んだその壁の上に拙^{ます}い字で貼り
紙がしてある。

貸^{かしきん}金はならぬ都の八重ざくらけふ現金の人ぞこひしき

だが、蕎麦は不思議にうまかった。蠅^はがいること、蠅^はがいること。

（真岡をここまで書いたが、書いていて自ら興味のないことおびただしい。前のパルプ工場で緊張したので一寸気抜けのした体である。こうした記録的紀行は書きたくないのだが、いったい真岡という街が雅味のない街だったのだ。此処の駅を出てしまつたら、何とか筆はかわるだろう。ここまではまず、息休めのブランクペエジとでも見てほしい。観光団のおつきあいだ。）

多蘭泊

汽車は駛^{はし}る。

玩具のような、小さな、薄汚ない、ゴトゴトゴトゴトピイの二三輛の聯結列車である。

それが私たち觀光団第一班のためにわざわざ臨時に仕立てたというのである。これがまた、真岡、アイヌ語のモウカ「美しい波の上」という美しい語義を持った樺太西海岸での第一の市街から、南へ南へ、終点本斗を指して出た、や、それは今出たばかりの煙の、むくり、むくり、むくり、ぽっ、ぽっぽっである。

汽車は駛る。

さして高くない一連の小山^{こやま}の麓^{ふもと}に添って、

「や、これはひどいな、まるでザラザラの石ころまじりの、赤土ばかりじゃないか。この斜面は。」

「それでも上の方に檜松^{ひまつ}が見えるじゃないか、あつ、空が青え。」

「や、虎杖いたどりだ、これはどうも驚いた、虎杖ばかりだ。」

「どうも土地が磯こうかくですな。虎杖の生えたところは磯ろくな地味じゃありませんよ。」とA博士。

「や、唐黍とうきびだ、三尺ぐらいしきやないね。ほう紅い房がもう出てるよ。」

「まだほのあかき唐黍の花、か。」

「もう歌かい。」

汽車は駛る。

私は見ている。

「や、すかんぽだ、すっかり枯れてる。どうもおかしいな。だが、いい色だな。カステラのふちそつくりの渋さだな、あの穂は。

や、また、すかんぽだな。

虎杖とすかんぽばかりだな。

や、白馬はくばだ。

虎杖から顔を出した。」

汽車は駛る。

「Kさん、二班と三班はどうなりましたね。」と誰やらが声をかけると、

「ええ、二班は真岡泊りで、三班は野田へ引つ還すはずになって居ります。」Kさんは東京鉄道局の旅客掛である。

「今朝はどうも野田はひどうございましたな。どうもあの波ではとても上れそうではございません。」と老団長。

「そうでした。上ればよかつたんですが、彼地あちらでも歓迎準備をして、花火など揚げていましたので気の毒しました。宿もとつてありますので、三班だけ行つて貰いました訳で。ええ。」

「野田はおもしろそうですか。」と私。

「いえ、別に。」

「それは気の毒でしたね。明日四時間あすも汽車で来るのでは大変ですね。」と、これは若い警部のA君。

「じゃあ、真岡組が一番当つたというんですかい。」タゴール老だ。

「いや、これで、ここだけの話ですが、一班の方が、実は大当りで。あした、少し引き還して、アイヌの部落を見に行くことになって居りますので。」Kさんが伏目で、気の弱そうな笑顔をする。

「あ、アイヌ部落。それは何処です。」これは小樽からの新来の客の一人で、ラジオ狂で、いつかの晩ももう碌にJ・O・A・Kが聞えないと悲観していたF君。テニス界の清水氏の夫人の兄さんだ。

「ええ、この沿線です。多蘭泊^{たらんとまり}。もう一時間もしたら通るでしょう。汽車からも見えるはずです。」と、向うの隅から札幌鉄道局の旅客課のS君。

「樺太アイヌですな。」と京大のA博士。

「さようで。」

「その部落ばかりですか、アイヌのいるのは。」

「や、まだ、東海岸に五箇所西海岸には三、四箇所ぐらいはありますが、ええ、此処らでは多蘭泊ぐらいですな。野田の一つ隣りに登富津^{とふつ}というのがあります。」これは樺太庁の水産課。

「へへん、何やろかいな。アイヌにも芸妓^{げいしや}はんがありまへよか。」神戸富豪のNさん。

九州男のYが「金持ちなんてん下俗げさくうしてなん。」といった人だ。

「あつはつはつはつ。」「ははははは。」「ひつ。」

こいで、

「Nさん、本斗ほんとにはいますぜ、そら。お楽しみできあ。」そこでピーと、やったはタゴール爺さん。と、その口から片拳かたこぶしをはずしながら、大きな眼鏡を長い紐と一緒に片方ずらかしにして、円い、光った、悪童のような眼をする。そして、ちよつと、その傍の庄亮の肱をつつ突いた。

「やああ、こりや、あつはつはつはつ。」と庄亮、両手を頭の横でうち振りうち振り、豪傑笑いだ。

汽車は駛る。

西日が強いので、左側はすっかり鎧戸よろいどを上げてある。それで残念なことには海岸が見えない。

一つ落とす。暑い光がかつと差し込む。

見える、見える、草葺くさぶきの漁師の家が、海はすぐ前だ。一面に今日は光っている。

「や、高麗丸が行ってる。」

その側の皆がわみんながトントントンと鎧戸を落とす。硝子戸までガタガタとやる。反対の側のも二、三人は立ち上って来た。

「なるほど、今行くんだな。」

「ちようど、同時になるでしょうね。それとも汽船ふねの方が遅いかな。」

「そりや遅れるでしょうね。向うが。」

「だが、心丈夫ですな。」

そうだそうだと、誰もがこの時は同感したであろう。永い間自分たちの家にして来た汽船ふねだ。それに今日初めて、真岡に上げ棄てにされて、団員が三方に別れ別れに今晚は分宿するといふのだから、何かしら心細い頼りないような気がしないではなかった。それに今朝は今朝でパルプ工場でかなり機械の威力に脅かされて来たのだ。そこで、今、同じ方向に今夜の泊りの本斗を目ざして、自分たちの高麗丸が、やや少し斜め先きに、船体を真横に見せて、さほど遠からぬ沖合を駛っている。

あ、光ってる、光ってる。あれは舵機室の硝子だ。

あ、あの檣マスト、煙突、煙、々、々、

あ、黄だ、白だ、紫だ、赤だ。

あ、通風筒、あ、あの船室ケレンの丸窓、

あ、あれが自分たちの船室ケレンだな。

あ、誰か欄干てすりにいる。

おおい、おおいと、汽車の窓に乗り出して、一人が麦藁帽を振ると、

おおい、おおいと、また一人が麦藁帽を振ると、

おおい、おおいと、また一人が白扇を振ると、

おおい、おおいと、またまた一人がハンカチーフを振ると、

おおい、おおいと、あ、向うで何か振った、振った、振った。

光る、光る、光る、光る。一面の波の光だ。

汽車は駛る。

玩具おもちゃのような樺太の汽車。

カーブだ。や、砂浜だな。

木柵、木柵、木柵、

海老茶だ、あ、すかんぽだ、あ、お襠褌だ。あ、お負っている。

あ、草家くさや、草家、板壁。日の丸。

日向葵ひまわり、日向葵、黄、黄、黄、黄、黄、

あ、裸の子供だ。

「わあい。」

「わあい。」

「わあい。」

「ばんざあい。」

「べんじゃあい。」

「じゃあい。」

と、

「北原さん、無線電信は来てましたかい。」

白髪はくはつの支那服の、また牧畜家の、茶目の和製タゴオル老人が、西日の窓に向った私のぼ

んの凹くぼに、うまく例の揶揄と笑いとを射撃した。

当った、と思った。

私の上衣のポケットの中には、つい、先程旅客課のKさんから受取ったばかりの、今年四歳になる坊やからの無電のそれがはいつていたのであった。

カゼサンヤンドクレパパノオフネ

アブナイヨ

汽車が停った。

やや、開けた山裾、家があちこち、みんな日の丸の旗を掲げた、つい前もお祭り気分の運送屋、

毛糸があります

と、貼り紙した店の横の雨戸袋。

ぞろぞろと汽車から下りる、またプラットフォームを駆けて来る。茄子とトマトの籠、赤ん坊の目、目、頭、帯、々、足。違う違う、顔色が違う。眉の毛の深い女、娘、ひさしがみ廂髪。

「アイヌだ。」

「アイヌだ。」

「や、なるほど。」

「へえ、なある、これはよろしいね、なかなか別嬪やないか。毛深うおまんな、へへん。」

「Nさん、本斗がありますよ。」

「そやかて、待ちなはれ。へへん。」

と、

「皆さん、此処が多蘭泊たらんとまりでして、ええ、今度汽車が動き出しましたら、その部落の間を通りますから、よくお気をおつけになつて下さい。それからきれいな川へかかります。その川筋はまた鯺のよく獲れるところで、ええ、後で車掌に鯺漁のお話でも致させたいと思いますから。」と、札幌の鉄道局。

ピーと、玩具人形の駅長さんの呼子よぶこが鳴った。

片手を一の字。

汽車が駛る。

あ、べにあおい紅葵べにあおいだ、

あ、また。

どうだ、あの色の新鮮なことは、不思議だな。小田原あたりよりもずっと色が純粹で明

るいな。

あ、また葵だ。高い高い高い。

「や、アイヌの家だ。」

「出ている、出ている。」

「どれ。」

「ほうら。」

「やあ。」

「あ。」

汽車が駛る。駛る、駛る。

アイヌ、まことにアイヌの村にちがいない。彼らはまったくアイヌだと、私は観た。

アイヌは、アエオイナ神、別名アイヌ・ラク・グル（アイヌの臭いある人）に依つて創造された祖先の後裔だと自身に彼らを思っている。アイヌは鬚はこぶで頭を、土で身体を、柳で背骨を創られた。とまたいわれている。アイヌの眼めのかほ窩は深い。頭髮が深い。神々の髪の毛の人として彼らはその美髪を矜ほこっている。彼らは古伝神オイナカムイオキクルミを矜る、その蝦ア

アイヌモシリ
夷島の神を。

アイヌは白^{はくせき}皙人種であろうか。だが、かの人種の皮膚は銅色がちの鳶^{とびいろ}色だとジョン・バチエラー氏はいった。私はそれを信じよう。

何とあの彼ら及び彼女らの髪の濃く眉の濃く髯の濃いことであろう。

紅葵は鮮紅で、蕊^{しべ}が黄で、上向きがちに目を仰いで咲く。根から枝が別れて、そろって延びて、花は段々を成して幾つともなく前に横に上に下につく。多蘭泊の紅葵は高い高い脊丈である。乳緑の葉っぱ、茎、枝、みな水々しく、そして毛ばだっている。咲きかけの折り目のついた紅い蕾^{つぼみ}がそれらの頂^{てっぺん}辺にある。

向日葵の大輪の黄^{おうごん}金色^{しよく}もまた、私の想像していたアイヌの村にはなかった。しかし、この多蘭泊の部落には、廂^{ひさし}よりも越えて輝く五六七八の大輪がひとむらがり群を成している。これも日に向って廻る。

家は低い草葺である。でなければ鮮人の小舎^{こや}のように見ぐるしく、またバラツクの網納屋^{チセ}のようである。それらの家屋も絵葉書などで見る北海道アイヌの伝統的^{チセ}家屋とはほとんど趣を異にしている。あまりに日本化している。日本化したといえ、それは日本の乞食の住居のような陋^{ろう}屋^{おく}がいかにも多く見られたのである。

だが、アイヌである。人種は確かにアイヌである。だが彼らの服装は浴衣がけである。シャツにズボンである。浅ましいのはまた乞食同様の風俗もしている。

が、紅葵の傍、向日葵の花叢はなむらの中、または戸毎こごとの入口の前、背戸せどの外に出て、子供まじりに、毛深い男女のぼつんぼつんと佇んでいる姿を見ると、人種の血肉は争われないものだと観た。日本人の私などには通ぜぬ深い何かがある。アイヌのそうした哀愁はまた何から来る。

おお、みんなが今空を見上げている。

おお、またいわゆるアイヌ模様の厚司あつしを着た爺がいる。いる、いる。二人も三人もいる。

何と、かの爺どもの胡麻塩の蓬ぼうぼう々と乱れて深い渦巻きをした髪の毛、凹くぼんだ黒い両眼に蔽いさがった眉毛、口髭、毛むくじやらの胸まで長々と垂れた頤髯あごひげだろう。何と荘厳な顔貌と威厳ある風采の持主で彼らはあるであろう。

あ、トルストイがいる。トルストイがいる。

おや、あの爺どもも空を仰いだ。

と、

「驚だッ」と、誰かが窓から見あげた。

はつと仰ぐと、アイヌ部落の、そのややうち開けた谿谷の上、海に迫った丘陵の榎松の黒い疎林の、その真つ蒼な空に一点、颯爽と羽風はかせを切っているのは、
あ、たしかに鷺だ。

鷺は飛ぶ。飄ひようとしてまた流れて、翼を撓たわめて、あ、大きく張った。
向うところは韃靼の黒い遥かな大うねりの波濤の彼方である。

鷹ひとつ見つけてうれし伊良古崎

芭蕉

これだなと私は思った。

あ、アイヌが先刻さつきから見あげていたのは、あ、これだったか。

青い青い空ではある。

汽車は駛る。

汽車は鉄橋にかかり、潺せんかん湲かんたる清流の、やや浅い銀光の平面をその片側に、何かしら紫の陰影かげをひそませた、そして河原の砂の光った、木の橋がある、そのつい下手しもてを駛って

轟ごうとまた響きを立てた。

「皆さん、鯨漁のお話をいたすそうです。」札幌鉄道局のS君が戸口で、立って帽子を脱とつた。前額の禿かぶがてらと光る。少い髪を櫛目を透かしてべつとりと撫でつけている。

まだ若い車掌が、切符改めの通りすがりを、赤い顔して、引き留められて、克明にハツと頭をさげた。

「こりやいい。頼みますぜ。」

と、誰かが手を拍たたいた。

旅へ出ると老人組までが、いや却つて茶目にもなる。

ピーと、またタゴール爺さんが口笛を吹いた。

「へえ、へえ。」と、車掌は目を伏せて、「ちよつとちよつと。」と間あいだを頭を下げて、手を戴くように、前の車へ切符拝見と出かけそうに、行きかける、それをタゴールさんが、矢庭やにわに引つ捉えると、無理に自分の座席の隣りに抑えつけてしまった。

汽車は駛る。

驚おどろを見つけてから、私の心は閑しずかになった。

私は海を、遠い荒波を、通り過ぎる目の前の浜の小石を眺めている。

汽車は今、ひたひたと湛えた潮の、つい汀を快い左右動を楽しみながら駛つてゆく。

韃靼海の八月のやや赤みかけた円い太陽が、まだ水平線から、うち見に四、五尺の空に輝き輝きしている。だがその下の遥かの遥かの寒い霞の曇りはどうだ。向うの何処かに沿海州。

荒れてる、荒れてる。外は飛沫が凄まじいが、三五四丁の此方はまたとろりとした一面の閑かさで、腐れたようにも濁っている。劃っているのは飛び飛びの青黒い岩の弧線である。

あ、鳥がいる。

飛び飛びの岩のひとつひとつに、どれもが同じ北の一方を向いて、鴉よりはやや小さい、鶺鴒よりもやや大きい、南国の鳥とも違った、何か寒げな、尻尾の動く、嘴の細そうな鳥の姿である。

外の波濤は穂がしら白く、内のとろみは乳黄で、またやや光った銅色で、閑かなようでもどうにもならない澱みがある。

澱みは凡てが昆布である。

子供がひとり、つツと此方こちらを見て佇たった。浜辺は昆布が散らかってる。

昆布が海を腐らしている。飛び飛びの岩の弧の線まで。

あ、たんほほだ。

汽車が停まった。

「ほん」と
「本斗」「本斗」

山高やまたかに燕尾服の、品のいい老人が、車窓に向つて直立した。若い従者がうしろに立つた。

老紳士は山高を脱った。そうして、謹直おしぎな叩頭。

本斗の町長であつた。

本斗の一夜

「おおい。まだかあい。」

と、こちらの二階の欄干へ、浴衣がけの三尺帯で乗り出したのは私である。

「おおい。もうじきだよ。」

広い通りを隔てた向うの理髪店から、椅子に掛け、姿見に対つたまま、その鏡の中から、ザツと刈つたばかりの坊主頭をしきりに振り立てるのはわが友庄亮である。首を竦めてキチンと構え込んでいる。何か脹れぼつたい頬の、細い細い眼で笑っているようでもある。

八月十四日の、樺太は本斗の晴明な暮れがたのツイライトである。摂政宮殿下の行啓を仰いで、ついその翌晩、お祭り気分の濃厚な、黄や碧や赤やの色々な装飾の中で、実に鮮かに一斉に電灯が点いた。それから五分とは経たなからう。殊にもこの真向うの姿見、硝子棚、バリカン、廻転椅子、カバーの白白白、立ち廻る理髪師の背広の、ズボンの白、掻き立てなすりつけた客の頬や頤の石鹸の白、琥珀の香水、剃刀の光、鋏のチャキチャキ、そうした銀と緑との小夜景がまるで近代劇の或る場面かのように私の前に展開され

た。その横文字の看板の、そのまた屋根の、町並の上の近くは濃く青く、はるばると末は冥くらんだ韃鞅だたん海である。またいくらか薄い空の青みである。縁へりは陰かげつて白い寒い雲の流れである。

そうして、沖には高麗丸の船室ケレンの灯ひが、美々びびしく、ちらちらと、今や輝き出した。
チャラン、チャラン、チャラン。

何やら金属性の透つた音もきこえて来る。

「お腹が空いたぞお、いい加減にしないかア。」
と、また、乗り出す。

「じきだよオ。待ちたまえ。」

「頭は済んだかあい。」

「済んだよ。これからお面かおだ。」

「洒落しやれれるな、おい。」

「洒落しやれはしねえ。」

と、剃刀がピカリと上へ反れた。危険危険、後ろ斜めに凭もたれ気味の、その刈りたて頭を。
ピーと、按摩の笛。

おもしろいおもしろい、按摩も白の背広で、むぎわら麦稗帽である。

背広といえど小樽で見た按摩も、これは霜ふりではあつたがやはり背広でカラをはめ、薄汚れてねじれてはいたが、何か黒に赤みがかつたネクタイを結んでいた。キト旅館でひとり机に向つていた時のことである。縁側からにじり込んで、しもぎ下座にズボンの膝を折目正しくかきこまつたその紳士を見て、私はまた土地の新進歌人のひとりかと早合点をした。それで、こちらも丁寧に向き直つて、さて、「あなたは誰方どなたですか。」とやったものだ。

「ア……ン……マでございます。」
眼をばしばしで仰向いた。

流石に北海樺太はちがつている。

白、コツコツコツ、白、白、コツコツ、ピー。

「エンヤラヤアノ、エンヤラヤアノ、エンヤラヤアノヤアヤ。」

跳ね跳ねして、ちいさな二人の女の子と男の子とが、ややほの白い広い通りのまんなかを歌つて来る。これも白っぽいなど見ていると、またその後からののはのつぽで白で、おおま大跨ただ。支那料理のコックでもあるかな。おかも岡持ちささげて、また、

「エンヤラヤアノヤアヤ。」である。

ひらひらと、海の上では鷗かもめか何かが飛んでいる。一等星、二等星、生れたての幽かすかな星。あ、波の音らしい。急にざわついて、またひっそりとなった。

「まだかあい。おい。」

妙に心がひもじくなる。で、煙草に、マッチをシュツと擦る。

と、隣りの室へやでも誰かが立った。

欄干てすりに出る。

またその隣りの室でも咳をした。

欄干に出た。

白の支那服の、白髪しらがの、白髻しらひげの、和製タートル老人の姿も見えた。

こうして、アーク燈のような薄い紫の空気の、遠くは重い匂いの紫となる。

海暮れて鴨の声ほのかに白し

芭蕉

*

白い障子を閉めきつて、何だか薄ら寒いなどとなった。夏は夏でも夜分は急に冷えるのがここらの気候だと思われる。襦袢どてらを浴衣の上に重ねる。それからぼつんとちゃぶ台の前に坐ると、傍の手あぶりには炭火がかつかと熾おこっている。それでも、ひしゃげた鉄瓶が、触さわれば周りの疣いぼ々いぼがまだ温ぬくみかけたばかりである。

そこでお盆の上の蓋ふたもの物のつまみを取って開けて見る。なんと貧弱なビスケットだ。なすった白の、薄紅の花模様を一つかじつて、淋しいなどなる。

お、電灯でんきは無論点ついているのである。それもコードがダラリと垂れ過ぎた。立ってひと結びくりあげると、白い陣じんがき笠形の上の埃が両手にくつつく。

ところで豪傑笑いの友人はまだ帰って見えない。

「あはは、どうです。今夜はひとつ探険にでも出かけますか。」

隣りから声をかけた。小樽からのちかづきの、あの俊敏な紳士の、麦酒ビール会社の重役の、ラジオファンのF君である。さつきからこちらの悄しよげ気かたをすっかり観察していたものに見える。傍にはこれもその連れのもういい年輩のHさんが長者らしく正坐して、またこちらを眺めている。HさんはF君と同じS市の人で、同じく札幌の農科大学出（そういえば和製タゴールさんのN老人もその第一期の卒業生だそうである。）の有名な牧畜家だと聞

いている。温顔の、それでいて重厚な犯し難い風采である。I公爵の従弟だとも、また人格者だとも私に話してきかした人もあった。俊敏と重厚と、いい取りあわせであるが、そのうえ、二人は非常に仲がよさそうに見える。F君は眉根をキツと寄せて金縁眼鏡で、声をあげて笑ったが、Hさんはこれも眼鏡だが、ややすこしく禿げあがった広い額の、髪は正しく搔いて、鼻の高い、それで眼元で優しく笑った。なかなかよく練れていそうである。それと比較くらべるとこちらの二人はどんなものかな。これも非常に気が合つて、それで二人とも駄々のろまつ子で、何か野呂間のろまのようでもある。とにかく私も我儘わがまま者でかなり気むつかしやだが、この私を一度も怒らせぬところは不思議に庄亮えらいところがある。「まだ一度も喧嘩しないね、妙だね。」と、いつか私が笑ったら、「喧嘩してたまるものか。」と彼も笑った。

「だが随分長い旅行だぜ、誰だつて一度ぐらいは気まずい思いをするものだよ。」とまた笑ったら、「あつはつはつ、僕なら大丈夫。」と頭を振り立てて豪傑笑いをした。その庄亮はまた、いつもになく、チョボチョボの不精髭など剃っている。

「出かけるかな。だが、飲めないでしょう。お酒は。」

「麦酒なら少々はいけますよ。」

「でも、この麦酒じやね。」とHさんが火箸ひばしをいじった。

書き忘れたが、隔へだての襖ふすまは初めっから開けっぱなしにしてあるのだ。

「エンヤラヤアノ、エンヤラヤアノ、エンヤラヤアノヤアヤ。」とまた表を通ってゆく。

「エンヤラヤアノヤつて、ありやいったい何の唄です。」とF君。

「ソオレ漕げ、ヤアレ漕げというのです。たしか中国辺の船唄だったと思います。本歌もとうた

は忘れましたがね、一寸こうした節だったようです。船頭おんどかわいや、穩戸おんどの瀬戸で、エンヤラヤアノヤア、ソオレ漕げ、ヤアレ漕げ、一丈五尺の、一丈五尺の、艫ろが撓しわる、エンヤラヤアノ、エンヤラヤノ、エンヤラヤノ、エンヤラヤノ、エンヤラサノサア。もつともこの歌詞は別物ですよ。」

「なるほど。でも、何だかちがつてやしませんか。あのエンヤラヤラヤアノヤアヤは。」

「そう、少々妙ですね。」

「や、はるかに見ゆるは本斗の港とやっていますよ。」

「ほう、それじゃ替唄かえうたでしょう。」

「本場じやないんですね。追分はどうです。」

「忍路おしよろ高島たかしまですか。あれは流石こつちに松前から此方こつちのもですね。信濃の追分とはまた味

がちがつていい。」

「信濃の追分というと。」

「あれこそ追分の本元でしょう。馬方うまかたがし節なのですね。西は追分東は関所せめて峠の茶屋までも。あれです。」

「すると、こちらの追分とはどうちがいます。」

「こちらのは船頭唄の追分です。節廻しが凡すべて艫拍子かづねに連れて動いて、緩く、哀調になっています。信濃のは馬子唄まじょうたですから、上り下りの山路やまみちの勾配こうばいから、轡くつわの音、馬の歩調あしじょうに合わせて出来上ったものなのです。シャンシャンと手綱たづなの鈴が鳴っています。小諸こもろ………出て見いりや、となります。小諸節ともいいます。」

「おもしろい。はは、それで、どっちも追分ですか。文句もおなじな。」

「いや、やはり信濃のが本場の追分ですね。西は追分だとか、今の小諸出て見りやだとか、

小諸出て見りや浅間あさまの嶽たけにけさも三筋のけむり立つ

さまが来ぬ夜は雲場くもばの草で刈る人もなしひとり寝る

浅間山から鬼や尻けつ出して鎌でかつ切るような尻しりを垂れた

あはは。まったく浅間山の麓から生れた唄ですな。あの信州の追分は今では寂びれ果ててしまいました。昔は中仙道と北国筋との追分でした。杳掛や軽井沢と並んで浅間三宿といったのだそうです。大名行列で随分盛んだったでしょう。その追分には馬頭観音が立っているんですがね、いつか行って見た時には、まだ早春で枯草の中にぺんぺん草の花が咲いていましたよ。古い旅籠屋では油屋という、元は脇本陣だったそうですが、以前のままの大きな古い建築で、軒下には青い獅子頭などが突き出ていました。剥げちよろけですがね。二階が出張ってしましてね。それに入口の板の間が広く、柱が大きくて、ありや国宝ものですよ。それに浅間の裾野一帯が落葉松林でした。や、翁草がずいぶん咲いていました。あの幅の広い林道を材木をつけた二輪馬車がカラカラカラと通るのです。霧のような雲が流れてね。や、これは話が横道に逸れてしまいました。砕けたところでは、

碓氷峠の権現さまよ、わしがためには守り神

送りましょかよ送られましょか、せめて峠の茶屋までも

というようなものになっています。この信濃追分が北越の航路から蝦夷地へ流れ流れてゆくうちに、いつとなく波の響きや艀拍子の中で洗われ揉まれて、遂にはあの船唄としての追分の哀調になったのでしょう。その土地土地で松前追分とか渡島追分、江差追分とか呼んでるのがそれです。新潟辺ではそれを松前節としていますが、それは逆輸入から来た一種の錯誤感で、こういうことは東洋と西洋との間にもよくありますよ。浮世絵と後期印象派、芭蕉あたりの象徴句とマラルメあたりの仏蘭西象徴派との関係、調べるとまだいくらかもあるでしょう。ところで、おしよるたかしま忍路高島ですがね。

忍路高島およびもないが、せめて歌棄磯谷までうたすついでそや

帯は十勝とがちにそのまま根室ねむろ、落つる涙の幌ほろいずみ 泉

これがこちらでの最も古い追分でしょう。この頃では前唄とか本唄とか組にしているようですが、そうそう、前唄の方はいわゆる松前前歌で、調子が軽い。」

「忍路高島には義経伝説がどうかいいますが。」とHさん。

「積丹土人の酋長の娘の話でしょう。いや、あれはほんとうじやなさそうですよ。外ほかのアイヌ伝説と混同したらしいのです。理窟は何でも後でよくくつつけますよ。」

「替唄というものも沢山ありますかしら。」F君がまたこちらを眼鏡越しに透かした。

「それは年代が経つうちに、その歌曲に合せた新作も出来るでしょうし、諸国の俚謡りようだの、小唄などが混入して歌われることは随分あります。大概の唄は二十六字調ですから、融通が利き過ぎるくらいです。で、大島節の歌詞が安来節でも歌えるし、都々逸どと逸の文句が相撲甚句にもなるという風です。それに有名な歌詞はよく方々の土地で盗まれもします。坂は照る照るでも地名だけを変えて歌われたり、

男伊達だてなら千ヶ崎沖の潮の早いのを留めて見よ

という大島のがつしやがしやが節が、小笠原の父島では八丈のしよめ節で

男伊達ならワントネの岬はなの潮のながれを留めて見な

という風に転化されて、それが小笠原特有の歌のように思われたりします。それにおかしかったのは、つい昨年でしたが、中央公論か何かで或る人の島々の民謡の事を書かれた中に、私の八丈風の新作の民謡が、昔からの八丈の古謡として入れられてあつたことです。

向うで歌っていたので、生粋のしよめ節の唄と思いちがえたでしょうが、こうした例はいくらもあるでしょう。で、多少とも年代的に知って置かないと飛んだ恥をかくことになります。民謡の精髓というものはやはりその土地で生れたところに生命があるのですからね。樺太本斗のエンヤラヤアノヤアは、こりや眉まゆつば唾まじものですよ。」

と、「やああ」と、やや顔を赤めて大にこにこで、庄亮が飛び込んで来た。つるりと片手で刈りたての頭を撫でて、着ふくれた襦じゆ袍姿らうさの、陀々羅だだらな足どりで、「はっはっはっ。」「とまた笑つた。

それを見ると急にまたひもじくもなつて来る。

「どうしたんだい。もう夕飯だよ。」

「あつはつはつ。失敬。」と、眼を細めて、首を振り振り、坐ると、また、「やああ。」と肩をゆすつた。

「お洒落かおだなあ。いつまで面かおなんぞあたっているんだい。」

「なにそのお、海岸へ行つていたんだよ。明日は魚釣りに行くんだぞ。」

「見て来たかい。」

「うむむ。釣れるそうだ。舟でひとつ出かけるか。」

「どんな魚です。」とF君。

「いやあ、しまった。訊くのを忘れた。なんでも魚だよ。」

「のんきだなあ。」と、今度はこちらで笑い出した。

「樺太横断はどうする。きまつたら真岡の自動車屋へ電話を掛けることになっているんじゃないか。」

「どうもそのお、この感^か冒^ぜじや冒險はむつかしそうでね。明日は半日休養しようと思つている。やはりみんなと一緒に大^お泊^{とまり}へ直航することにしようよ。」

「少々弱つたね。」

「今夜は按摩でも呼んでひとつ。」

「按摩はさつき通つたよ。白の背広で。だがよく按摩の好きな人だな。僕などは擦^{くす}つたくてしょうがない。」

「はっはっはっ。君はとても駄目だよ。」

「それにしても飯の遅いには困るな。ベルをひとつ押してくれ。」

「よおし。」と後ろの床柱の方を向く。

「はははは、ベルはさつきからのべつに押してますよ。」そこはF君抜け目がない。

「だが随分悠長ですな、ここの家は。北海道から此方は妙にベルが利かない。」

「凍っちゃったんでしようよ。」

「ですがね。すこし変つてますよ。じやないですか。」

「まったく、これあ、虐待ですよ。」

「それにしても、まるでバラックですね。梯子段だけでもつてるような宿屋だ。」

ここでいつて置くが、このSS旅館なるもの、何か下等な材木の木の香ばかりが生々しいが、スリッパでも穿かねばとても脂っぽくて歩けそうにもない薄汚さで、そのうえ、廊下の突き当りにはきまつて凸凹の姿見ばかりが、白ペンキ塗の厚縁の燦々で、脾胃い、すぐにも撓つて外れそうな障子や襖の劃りの、そこらの間毎には膏藥のいきれがしたり、汗っぽい淫らな声が饅えかけたりしている。浴室へ行けばぬるりと沁るし、暗くて狭くて、天井が低くて、息抜きも無ければ、上り湯もない。歪形のペシャンコの亜鉛の洗面器が一つ放つたらかして、豆電灯が半熟れの鬼灯そのまま、それも黄色い線だけがWに明つ

てるだけだから驚いた。それにしても店の真正面の梯子段の堂々としていることは、赤渋のニスの塗り立てで、まるで、しゃいしあい、トントントンの遊廓式である。えらい梯子段だなど這入る時に見て上った。

「手を拍くかな。」と庄亮。

「や、待っていようよ。神妙にしよう。恐れ入った。」

と、ポンポンポンポン。さては和製タゴール老か、警部さんか。これはきびしいせつかちだ。

「エンヤラヤノ、エンヤラヤノ、エンヤラヤアノヤアヤ。」

外は祭りの電光飾。

*

「へへん、来やがれ、畜生、何が何だつて、今頃になって、碌でもないあまりもののお客なんぞをふり当てやがるんだ。と、てめえも小っぴどくやつつけやした訳で、へい。」

瘦形の、小柄の、巾着切りか刑事見たいな、眼が迫って険しい、青いしゃつ面の、四十

前後の、それは鼻つぱしの恐ろしい番頭君が、かまきり蠅螂さながらの敷居際の構えで、ヤツと片手の利鎌とがまを振り立てた。宿帳をつけに来て、坐り込んでしまったのである。

のつけから、あまりもののお客とやられて、思わずギョツとしたのは、庄亮、H、F、白秋だ。

悲観した。

「ふつ、あまりものとはひどいじゃないか。」とF君。

「へっ、これは御勘弁を。それでも何で、やっぱりBB旅館のあぶれ……。」

「あつはつはつ。あぶれは驚いた。こいつはおもしれえ。」と庄亮。

「あぶれのお客をおつつけやがって。——と。」

「おいおい、いい加減にしないか。」とF君。

「あぶれだよ、あぶれだよ。」と白秋。

「おもしれえ、おもしれえ。」

「あぶれじゃないよ。こつちの勝手で、別れて来たまでさ。BB旅館があまり混んでいるようだね。まだ団長へも私たちがここに来ていることを知らしてないくらいだからね。あまりものを向うで意地わるく押しつけたという訳でもないさ。」これは重厚だ。

「失敬きわまる。出ようじやありませんか。」これは俊敏だ。

実際私たちは、怪しいお客の剰余あまりじやないのである。駅から町長の案内で、海岸寄りのBB旅館の前に初めは立った。

何でも鉄道局との打ち合せも済んでいたものと思われたし、東京の旅客課のK君も附いていることなり、や、お疲れさま、どうぞとあったので、そこで一同が安心して鞆を投げ出し、埃つぽい編上げの紐も解いたのである。だが少々渋ったのは桃色のスカートの、鼠色の華奢きゃしゃな眼鏡の、海老茶帽子の、そうした夫人同伴のB重役H会社員K工学博士あたりであった。別室があるかないかの問題である。ところが廊下でかなり騒さわついたのは昨日からの客がかなり混み合っているようで、それに旅館の方でも例の講こうじゅう中式団体客並みに何でも一坪に二、三人の鮎詰すしづめで済ませるものと多寡たかをくくっていたらしいのだ。一等船客の贅沢達が三十人も押しかけて、それで別室別室では狼狽したのは町長ばかりでなかった。やつととにかくどうにか収まつたらしいが、そちこちの形勢がまだ蜜蜂はちの函はこの穩かならぬ眩きをひそめていた。私たちも一旦その後あとから上あがりかけたが、往来から何か意味あり気にF君が目交めまぜをするので、また靴の紐を結び直して外へ出た。F君はHさんを語らつてサツサと歩き出した。そうしてその筋向いのこのSS旅館へ這入はいると、前の会話に出た

堂々たる遊廓式のまた博覧会の竜宮風の赤ニスの梯子段をトントンであった。私たち四人に、N老人にA警部、それにわが友若山牧水に似た鼠頭巾の小爺ちいじいさんにその連れの万まんせ世橋いばしはなにがし宿屋の主人公、この二人はお江戸の酒徒だが、さぞ今頃は縮こまって、悲しい無言の憤激をその衰えた眉根の皺に寄せていることであろう。

「へへ、どうも相済みませんで、お客様には何とも申し訳ございませんが、じたい、こうしたいきさつでがして、へい。」と、スツスツと乗り出した。この蠅螂かまきり少からず神経性だと見える。その利鎌を今度は二た振り右と左で空くうに反す、その柄つかを両膝しかに確と立てると、張り肱ひでの、何かピリピリした凄こめかみい蟀谷こめかみになる。

青い青い青い青い、青臭い。

「いや、なんでございますな。癩しやく、癩しやくでして、ええ、そもそもB B旅館なるものが、そりゃあ本斗一の大店おおみせでしょう。でしょうがね、何かあればこれ見よがしだ。見識づから面をしくさる。役人共とは結托する。勝手気儘のし放題で、宿屋仲間の公德を蹂躪じゅうりんする。……

公德がおかしいのか、ふふつと誰かが笑った。

「てめえどもは、御覽のとおり、安普請やすぶしんのバラック旅館にはちがいないのですがア。」

「梯子段はえれえよ。」

「へっへ、御常談でしょう。」とちよつとたじたじとなったが、それでもすぐに立て直して、ギョロリ眼めの半腰はんごしになった。

「何がBB、何が町長でございますだ。昨日きのうも昨日、団体客が三百人も来る、宮様の行啓中だ。さあ騒ぎだ。この潮時に一軒で独ひとり占しめするのも気の毒だ。半分別わけてあげよう。へん、別けてあげようが聞いて呆れるじゃありませんかね。さあ収容おぼつかない。自力にあまるならあまるで、SS頼む、弱った、助けてくれでいい。そりや平生は平生、そうでがしよう。向うと此方こつちだ。商売敵かたきだ。角突つのき合いならどつちもどつちだ。だがいざとなりやお互の公德心に訴える。相互扶助でがさあね。」

「ほほう、相互扶助。」

「へえへえ、そうした理窟じやありますまいか。よしんばプロでもブルでも水平社でもでさあ。」

「おもしろえ、おもしろえ。」と、庄亮。

「恩を着せるにやあたらねえ。畜生、生意気ぬかすな、と、ここまでこう癩かんの虫がぐつと込みあげて来ましたね。だがでがす。まあそうしたもんじゃねえ。町長さんの口添えもあ

り、これも本斗のためだとひとまず胸をさすって、そこは潔く引受けたのでがした。」

「そうかい。ふうむ、流石だ。」F君も茶目だ。

「ところで、畜生、今朝になつて、話がちがつた、三十人しか来ない。こちらだけで引受ける。はいさようなら。よくもぬかした。鰯にしんかす粕、強突張ごうつくばり、どうするか見ていやがれ、と、こりやあてめえの怒るのが無理はありますめえ。」

「そうそう。」とHさんもうまく遣る。

「それに町長も町長でがさあ。そうなれば知らぬ顔の半兵衛さんだ。山高でフロックコートで、お従者ともを連れてすうと素通りで、や、SS、気の毒した、御苦労とも抜かすこつじやねえ。何といつてもブルはブルでがす。大店おおみせのBBの肩ばかり持ちやがって、成つちやいねえ。たかだか植民地の町長ですからな。無鳥島の蝙蝠へんぶくでがすな。」

「温厚ない町長さんじゃないか。風采の立派な、ちよつと珍らしいよ。」と、これは私だ。

「そりやあ押し出しは立派でがしよう。知れたもんじやありやせん。お客さんが這入られた。今度は頼むだ。ちえつ、莫迦まがにしていやがる。」

「まあ怒るなよ。七、八人でも僕らが来たからいいじゃないかい。」

「いけません。」

「夕飯ゆうめしでも早く持つて来さしたらどうだい。」少々心細くなる。

「そりゃ差し上げます。でがすがな。三百人の二分の一で、百五十人だ。よしてきた、やつついで、暗いうちからコツコツコツコツ、なにしろ、切り込みでも容易なこつちやねえんで、やつと用意が出来て、さあいつでも来やがれとなったところで、たった八人、それもあまりものの。」

「おいおい、よしてくれ、またまた、あまりものかい。」

「へへえ、それでも癪さかに障りやがるんで。や、こいつあ失礼を、はっはっ。」

「笑いごつちやないじゃないか。もう支度は出来ているんだろう。」で、じりじりとなつたのはF君である。

「いや、昨日の御行啓の後でして、なにしろ、樺太庁のお役人は来る、新聞記者は騒ぐ、それに軍人、商人、何々団員で、すっかり満員の大盛況で、実は家内中へとへとなつたところで、今朝の切り込みで、それで見事にスカ喰くつたんですからな。一同張り合い抜ひけの体ていでしてな。昨夜よるべだつて誰ひとり寝ねやしません。いったい団体客だんたいきゃくに碌ろくな……いや、へへえ。」

「悲観、悲観。」

「おやおや。」

「おもしれえ、おもしれえ。」

あはははと、みんなで笑いくずれたが、

「ともかく、食べさせるのか、いつたい。」

「へええ、差し上げますには差し上げますですがな。もう一切いっさいがっさい合切種切れで、着も附合せも何にもありやしねえでがす。」

「それでも百五十人分。」

「いや、あれは胸くそがわるいので、根こそぎ外ほかのお客さま方へ御馳走しちゃいました。遺恨骨髓に徹すで。こうなるとさっぱりしたもんでさあ。日本晴れで、へへ。」

外のお客さま方が呆れる。我々の外には一室か二室しか塞がっていないのにと思うと噴き出したくもなつたが。

「そこで、こつちはどうなるんだい。」とまたF君。

「ええ、とんとまだ何ですがな。支度を致させますならこれからでがす。」

「ふふむ。」

「や、どうも、へへ、それでは宿帳の方をなにぶん。」

くるりと身を翻すと、スツと一飛び、トントントントントと、梯子段を駆け下りてしまった。

*

「驚いたな、これは。」

「おやおや、鐘詰の筈かい。」

隣りは隣りで、

「やああ。酸っぱい椎茸だな。これは固い。や、なんだ、大和煮か。」

「はは、^{するめ}鰯の付け焼きとは初めてだね。」

「どうです、食べられますか。ひどい晩餐^{ばんめし}ですな。」とF君の眼が眼鏡越しに笑いかけ

る。お互、こうなれば何か問題が起きる方が結句茶目気分の幸福を感じるのだ。

「プーアですな。プーアだな。」

「おもしれえ、おもしれえ。」

「吉植、おもしろえおもしろえで両手を振ってばかりいたって七面鳥の卵が湧いて来るはずはないぞ。ベルをひとつ押してくれ。」

「あつはつはつ、美食家の君にはたまるまい。俺はこのトマトで結構。」

「トマトだつて心がコチコチじゃないか。俺は御免を蒙る。ビフテーキでも取ろう。」

「そのビフテーキが小樽式。いや、もつとコチコチだろうよ。」

「弱つたな。F君。これはやっていますか。」と、そこで左手を一寸と口の辺^{へん}。

「サイダーにしましたよ。麦酒はまたサクラでしようからな。」

「こつちはいつてあるかい、酒は。」と庄亮の方へ。

「いいつけといたはずだがね。あつはつは、とんと貉^{むじな}の道だよ。」

「鼬^{いたち}の道とは聞いたが、貉の道とは、これも初めてだね。」

「そうかい、鼬かい。あつはつは。」

「弱る。俺はもうむぐつちよで、高麗丸へ帰りたくなつた。」

「印旛沼なら、この頃は鯉のあらいに鯰^{なます}の丸焼きというところだね。白焼の鰻もおつなも

のだけ。」

「俺のところだつて、この頃は鮎のフライがある。それに鱈^{さわら}は今しゅんだな。コールドビ

「フが食べたいな。おい。」

「茄子、かぼちや南瓜、にんにく隠元、にんにく大蒜、うちの畑はいいよ、そりや。」

「だが、あの大蒜には閉口した。」

「あつはつはつ。あの時の君のしかづら響め面つてなかったぜ。うちでは話の種になっている。」

「ほう。そうかい。」

「ところで、ここの料理だがね。罐詰物なぞにしくなくても、なんでこの土地の新鮮な魚や野菜を附けないのかな。」

「内地の物だともいいことにしてるんじゃないかね。これでも優遇のつもりかも知れん。」

「優遇じゃありませんよ。」と向うから声がする。

「ねえ姐さん。や、酒が来た。まあひとつ遣ろう。どうだい。」

「うむ、ありがてえ。」

と、そこで口を盃へ、顔を見合せると、二人とも、や、や、や、

「駄目だな、どうも。」

「こりやいけねえ。」

と、その時、旅客課のK君が「やあ。」と這入って来た。何かおどおどして、気弱そうな微笑を眼の縁ふちに湛ふちえて力がない。立ちながら、帽子を片手で。

「どうも手違いばかりいたしまして、今日はすっかり失敗です。こちらは如何いかがでしょうか。」

「面白いですよ。なかなか。」

「あつはつ、素敵素敵。」

「虐待極れりです。」

「いや、いいでしょう。まあ。」

立ち疎すくんだK君、

「いや、あちらでは団長が怒り出しましてね。」

「やっぱり鯨詰めですか。」

「ええ、何分昨日きのう行啓ぎのうの今晚ですから、居残りでかなり混雑していますし、宿でも町の方でもすっかり疲れ切っているのです、どうにも行き届きませんでね。団長などは外出中に無断へやで室へやを取り代えられましたのでね。御機嫌すこぶ頗る斜めです。我々觀光団の面目に関するといふので、困りました。」

「鉄道省の方ではあらかじめ何か打ち合せしてあつたんでしよう。」

「ええ、手筈はよくついていた訳なんです。」

「まあ、いいでしょう。」

「と、こちらの方がまだ優待ですぜ。」

「じゃあ。どうぞあしからず。」と頭を下げて、K君は出て行った。

麦酒の方がまだましだろうとなつて、それから、

「玉子焼きにでもするか。」

「玉子焼きとは窮したね。」

出来るかと、女中に訊くと、出来ませすという。そこで誂あつらえて、チビリチビリ麦酒を嘗め
ていると、何時の間にか隣りではひっそりとなつた。早や影もないのだ。

待てども待てども玉子焼きは出て来ない。

「按摩でも呼ぶかな。おい姐さん。」

「玉子焼きはまだかい。おい姐さん。」

かれこれ一時間も経つたか。やつと、両手でウントコサと擁え込んだのを見ると驚くべ
し、直径一尺五寸余もあろうと思われる雅味のない大皿に盛りも盛つたり、恐らく十人前

は焼いたであろうところの部厚な白^{しろまだら}斑の玉子焼きである。それにおおかたは冷めきつている。そうだろう。これくらい多量に焼くうちには何の温^{ぬく}みも飛び去ってしまうであろう。

「おい。二十四匹の黒^{くろつぐみ}鵜封じ込まれてパイの中。というマザア・グウスの童謡があるが、この玉子焼きなら三、四十匹の二十日鼠は棲めそうだな。いささか非常識だね。」

「おもしれえ、おもしれえ。」

(ここで書き添えて置くが、この玉子焼きは翌日の勘^つ定書^けには拾何円とか書き出されていた。)

外はあかるい電光飾。

*

エンヤラヤアノ、エンヤラヤアノ、エンヤラヤアノヤアヤ。……………

「あ、やってるな。」

山の手寄りの駅の空では赤や緑の電^{でん}灯^きが深紫の闇の中に煌々と二列に綴られていた。何

かまたほうほうと汽笛ふえのけはいもした。私たち、庄亮と同じく襦袢どてらぎ着のタートル老人と私とは、うち連れて、冠木門かぶきもんに見越しの落葉松からまつといった風の軒並の前の、うち湿った暗い通りをあるいていた。夜はもう十時に近かつたろう。

たまさかに、障子が橙色の灯影ひかげに燃え立つように明つて見える二階はあつたが、それでもまだ素見ひやかしの客の姿も、そこらの格子戸の中には見透かせなかつた。

だが、こうした見知らぬこの北方の夏の夜の雰囲気の何処かで、内地で聴くようなあの三絃ねじの音締めがして、そしてあのエンヤラヤアノヤアヤである。

大きな貸座敷風の構えも一戸二戸はあつた。大概はまた待合風の怪しい景情であつた。

「よう。目めつけましたよ。あつはつはつ。」

N老人が突然立ち留つて、上を仰ぐと哄笑した。

土蔵風の階上の窓は開かれて、その窓の欄干てすりに横向に凭もたれて、そのまたほろ酔なつめづの棗なつめづ面らを外気に吹かれていた。Dさんだ。初め私は中学校長かと思つたがそうでもないらしい

かつた。温厚な人柄らしかつた。すつ込もうとしたが、どっこい、N老人そうはさせない。

「押しかけますぜ。ないしょごとはすぐ暴露ばれまさあね。お連れさんは誰方どなたです。」

「や、これは、上りたまえ。」

今は仕方なしという風、それで、どこどかと這入って、何処だ何処だと、梯子段から上つて、やあやあやあである。

「これは驚きましたね。かねての謹厳組たる皆さんが。やあ、Kさん、貴方もですか。」
そこにはわが親友Mの義父わしとうさんたる建築家のK大人が、もう顔を真赤にして小さく床柱に凭よりかかつて、いい機嫌で旅のころもは篠すずかけのう、篠かけのうであった。

神戸の縞しん商しょうであるNさんなどは、飄逸な海亀さながらの長い首を前伸びに跟よりさして、ヤレ漕こげソレ漕こげエンヤラヤアノヤアヤである。芸げい妓しやとも白首しろくびともつかぬ若い女を二人ほど手元に引きつけて、それもいい加減に本性を露あらわわしかけているのだった。

我々一同着座。ほどよい陣形に割り込むと、さて、盃の雨がふる。

「へへん、何やな、おまはん狐やろかい。見なはれ。これでも芸妓はんいうてますさかい、阿呆あほうらしやな。」

「ちえ、どうせ、狐ですよ。」と、三味線をペコペコやっていたのが、口をヒョイと尖らした。眼の縁ふちに紅べにでもさしたのか、それがなるほど白首の狐の面。

「Kさんききなはれ、これが化け猫や。樺太いうところは凄こわいもんやな。エンヤラヤアノヤアヤや。」

「エンヤラヤアノヤアヤはおもしろいね。歌って御覧。」

「はるかに見ゆるは本斗の港、みいなとエンヤラヤアノヤア、ヤレ漕げソレ漕げ、エンヤラヤノ。」

「やはり、何だな、本斗の港だな。」

「行啓記念の唄やいいよる。へんな唄やな。」

「ははあ、そうか、ほう。」

これでわかった。拙い唄だと思つたが。

Nさんはいよいよ出て卑猥になる。

「ストトンストトンと通わせてえ。これが流行のストトン節や。」

「知ってますようだ。」

「今さら嫌とはどうよくなや。」

「嫌なら嫌だと最初から。でしょう。」

「いえばストトンと通わせぬ。」

「ストトン、ストトン。」

「籠の鳥はどうやな、籠の鳥。」

「知ってますよお。逢いたさ見たさに怖さもわすれえ……………」

「さあ立とう、立とう、皆さん。」

「まあ、まあ、よろしいやおまへんか。ええやええや。」

それでも、流石に勘定高い。切り上げることは知っている。すぐに一緒に立ちかけた。そしてひよろひよると狐の面にしなだれかかった。

「あら——だ。いやあ。助けてええ……………」

と、「なに泣いてはるのや。さあ、来なはれ。」

「出るに出られぬ……………籠の鳥……………」

海には高麗丸。船室ケレンの灯。町には明るい電光飾。

*

星。星。星。星。

空馬車、

空馬車、

空馬車。

ぽつり、ぽつり、ぽつりと、奉迎門の明るい電光飾に、三人の襷袍着の姿が埠頭の広場に現れる。中の一人は白髪に白髭である。

空は暗い。

波の音がする。

高麗丸の灯も近々と綴られてる、その沖に。

あ、ひらひらと何やら白いものが飛んでいる。

私は両耳に両手をあてる。

ほういほういと声がする。

と、巨大な奉迎門の黒い影、影、影、

正門と両側の小門。

あまりにシンメトリカルなその投影。

私たちは明るい反射光の中を通り抜ける。

緑の杉の葉のアーチには、鯨にしんがいる。鮭さけがいる。眼まなこが光る。腹はらが光る。口くちばしが暗い、尻尾おしりが暗い。

昆布こんぶがある。烏賊いかがいる。荒布あらめなびが靡なびき、大きな朱色の蟹かにが匍はづい、貝かいが光る。

暗い、青い、赤い。

凡すべては本斗の海産物で裝飾したその奉迎門ほうようもんは、確かに思いつきであった。

私は脚柱あしむねの一つに耳みみを当てる。

韃靼海たてんかいの深い、遠い、冥くらい響こもきが、海鳴りうみなりが、波なみの音が、潮騒うしなが、

あ、きこえる、きこえる。

「や、君きみは此処ここに何をなにしているの。」

左手の脚柱あしむねの暗い投影えいけいの中に、濃い鼠ねずみの潮しほじみ雨あめじみた角錐形かくすいけいの天幕テントが一つ、その中に、これも鼠ねずみの頭中かぶ付きの汚きたれ破やぶれた雨外套あまがきをかぶって、誰たれやらごろ寝ねしていた。

テントの中のカンテラの灯あかり、血ちのような豆まめの灯あかり。

「夜番やばんしているのです。盗ぬすまれるといけないから。」

「何を。」

「あの鯨にしんや蟹かにを。」

おお、そうして、昆布を、貝類を、鮭を、荒布を、雲丹うにを、すけとうだら、樺太鱒ますを。
エンヤラヤアノ、エンヤラヤアノ、エンヤラヤアノヤアヤ……………
暗い暗い海、

星。

星。

星。

白いひらひら。

ほういほういと声がする。

樺太横断

ひどい自動車である。幌は破れ、車体は彎^{ゆが}み、タイヤは擦り減り、しかもごろた石の凸^で凹^{こぼこ}の山坂道を駛^{はし}り上るのである。揺れるの揺れないのでない。これが樺太横断を決行しようとする私たちの使用車だというのだから驚く。

西海岸の真岡から、樺太庁の所在地たる豊原まで、二十余里の山野を、蝦夷松^{えぞまつ}、椴松^{とじまつ}、白^{しらかんば}樺^ばの原生林を抜けて、怪獣のごとくまた疾^{しつぷう}風のごとく自動車で横断することは、少くともこの旅行中の一大壮挙にはちがいない。この話は国境の安別^{あんべつ}から南航の船上で幾^{いくたひ}度か提議されたが、決死の覚悟ならとにかくまず見合せたがいいだろうとなった。それほど危険至極の事だと噂されていた。それでもまだ私と庄亮とは諦めがつかないので、真岡に上ると、市内見物の道すがら、縁^{へり}の青い波型の飾りをそよがした例の簡素な幌馬車をリリリンリンで、最寄りの自動車屋をあちこちと探し廻ったものだ。見つけて、訊き合せると既に出払って一台の客^{きやく}待^{まち}もなかった。樺太庁のを借りようとしたが、行啓後のことで、凡てが豊原へ発ってしまった。で、名刺を渡して、明朝行けるようだつ

たら本斗から電話をかけるからということにして、またリンリンリンでパルプ工場へ駛はしらした。本斗の一夜ですっかり興が醒めて、やはり団員と共に大泊へ廻航したが安全だし、半日の小閑をぬすんで、沖釣にでも出かけようかとなった。それが朝になると、咄嗟とっさに横断の議が極きまった。N老人と警部のA君が飛び込んで来て、俊敏のF君が奮起し、それに私までが燥はしぎ出したので、重厚のHさん、風邪ひき鯨なますのわが庄亮までが、よし行こうとなった。と、汽車の時間までにもうキツチリ五分しかないという。真岡へ電話をかける、勘定つけを呼ぶ、団長へ単独行動についての諒解を求める、やれ、シャツ、やれ靴下という騒ぎで、大慌てに慌てて停車場へ駆けつけ、それから、汽車へ乗ると初めて、みんなが顔を見合せた。

「さあ吾々の団長を選挙しようじゃないか。」となる。N老人が最年長者だ、極きまった極まったで、これは一議に及ばず可決、それから誰いうとなくロツペン団なるものが出来あがった。オホツク海は海豹かいひょう島とうに三十万羽も羽ばたいているというロツペン鳥ちようを聯想して、吾々の六人をもじったものだ。たわいのないことおびただし。このロツペン団かなり不良である。

真岡駅へ着いたのが九時。その駅前のなにがし洋食店の階下から見た外光はすでに白く

輝いていた。自動車の来るのを待つ間に私たちは幽かに沁み出る額の汗を感じながら、爽やかなアイスクリームの黄を啜り、水筒に水を、弁当鞆にサンドウィッチを、チョココレエトケーキ、餡パン、思い思いに用意した。

と、自動車の爆音がした。それが、このひどいぼろぼろの幌の、タイヤであった。高等の大型だというのがこれである。それにやつと六人が膝と膝とを突き合せると、運転手がすぐに一人十五円ずつの切符を切りはじめた。一台六十円の貸切りという約束とは違っている。それにまた山高帽に青風呂敷の蝙蝠傘の尻端折の男を一人、途中から拾って無理にも割り込ませようとした。これでは乗合いであって特別仕立てではない。貪慾にも程があると思っていると、とうとう庄亮が怒り出した。

「俺は、何だそのお、日本新聞聯盟の外報部長をしている。」

「へへ。」

「鉄道省の鉄道会員としても視察に来たものだがね。第一貸切りであるか、そのお、乗合いであるか。が問題だろうじゃねえか。貸切りならば約束外の切符制は間違っている。が、そのお、乗合いとするとお、すでにその規定人員を超過して、しかもなおかつ暴利をお…

……。」

プ………ツ、ピツピツピツピツ、急に帽子の後頭をすくめた運転手は、やたらに逃げ腰の、ハンドルにばかりしがみついた。わあわあわあわあつという私たちの歓声に追っかけられて。

だが、危険危険、このぼろ自動車の揺れ方といったら。

*

光、光、緑、緑、

キャベツ、キャベツ、キャベツ、キャベツ、キャベツ。

おや、パルプだ、小舎だ、あ、あか紅だ、かげろう紅だ。陽炎、陽炎、陽炎。

崖だ、椴松だ、熊笹だ。あ、たに谿々々、や、いたどり虎杖だ、

と、パンクだ。

「やったな。」と揃って飛び下りる。

と、また私たちは、高原の、一路坦々たる、おおいたどり大虎杖の林の中に在る私たちを見出した。虎杖のやや赤ちやけた虫くい葉の日盛りである。

自動車は投げ出されたように傾いている。黒と灰色との巨大な昆虫だ。暑い土埃がふっかけて遠く白く奔ってゆく。運転手はまた同じような擦り減らしのタイヤと取り替える。しきりと尻から蹲かがんでポクポクカンカンである。

しんしんと虫の音ねがする。

さらさらと何かの葉はずれがする。

強い強い草いきれである。青、青、青。

そこで六人が、A、A、A、A、A、Aの形に帽子を脱いで駆け出して見る。麦むぎ稈わら、

パナマ、ヘルメット。光、光、光。

「あ、紫だ、や。」

「ブシの花だよ。」

アイヌのブシ矢の塗料の有毒植物のブシの花の新鮮さ。

私はすなわち葡萄ぶどう入りパンをかじり出す。

ひゆう、ひよう。…………

あ、ほととぎすが翔かける、翔る。

*

第二のパンクした時、私たちは青い青い樺太露ふきの林の中にあつた私たちを見た。

おそらく一丈にも近いだろうと思われる樺太露ふきのすばらしい高さ、その紅い線の通つた六角形の太茎ふとぐき、裏白うらしろの、しかも緑の表面の、八月の日光を透かす夕立のような反射。

なんと爽快な嵐、

なんとまた大きな蝸牛かたつむりだ。あ、その触覚のアンテナは聴く、

JOAK、こちらは東京放送局であります。

あつ、そうだ、今はちようど童謡の時間だ。

そこで、サンドウィッチだ。

私は道端の巨大な露の根に両足を投げ出した。清浄な、また沁み出るような葉緑素の濃い香気がした。いや、氾濫だ、大洪水。

庄亮は向うの落林を掻き分け掻き分け見えなくなった。野天の排泄、と思うと深い呼吸がこちらからも放たれてゆく。

開放された、全く。原始の自由のこの簡朴。

ただ、黙々と光る麦稈帽。

私はしみじみとまた、私のホワイトシャツの、自分の汗のにおいを嗅いだ。流るるようなこの汗。

なんとすいすいしたサラダと辛子からしだ。このハムだ、パンだ。

「どうぞすい。」と、白髪白髯はくはつはくぜんの、そして朱面の、白い麻の支那服の、頑健そのもの

N老人が立ちながら、その頭の上の落の葉の一つを仰いだ。

驚くべき葉脈の太い線。その亀の子形。

緑色の太陽。

ポキリと音がした。

あつ、折つたのだな。

おお、歩いて来る、動いて来る、輝いて来る、ひるがえ翻つて来る、一枚の大きな落の葉が。

かが蹲んで庄亮が構えた、その巨大な茎の中ほどを握つて。

私はマツチを擦つた。一本。なんと生きた赤い火だ。

カメラだ。そこだ。パチツだ。

*

第三のパンクした時、私たちは鬱蒼うつそうとした樺太柳の、白楊の、また絹柳の緑蔭にはいりかけた私たちを見た。

木の橋があった。潺湲せんかんたる清流があった。

水は澄み、何か走る魚鱗の光が見えた。

「鮠はえかしら。」

「いや、鮠やまめかもしれない。」

向こうに山があった。椴松の林があった。熊笹の柔かそうな微風の深い斜面の裾にはまた、紅くれないの華魁草おいらんそうに似た花が見渡すかぎりのお花畑を作っていた。

「何の花だろう。」と私は訊いた。

「柳やなぎらん 蘭です。」と運転手は、タイヤに空気を入れ入れ振り返った。

来る道でもよく目についた花だったなど、私は肯うなずいた。あ、あの紅いのもそうだったのだ。

黄色い、安別で花叢はなむらを成したあの丈高い女郎花おみなえし風のも咲き乱れていた。

下手はまた、風に楊が葉裏を翻していた。

その銀、銀、銀。

水面のまた閑かな投影、枝垂柳の深さ。

白い雲、やや潤んで晴れわたった空、大気。

私はまた立ちながら、ポケットから赤い一箇のトマトを取り出して、しゃぶしゃぶかじった。

おお、滴れる、滴れる、トマトの漿水が。

「ええ、おい、桃太郎の桃でも流れて来そうなところだな。」

*

道は椴松の原野から椴松の山林に入り、幾度かまた原野に下り、また山林をのぼってゆく。

そうして山々はますます深く、自動車は迂廻し、迂廻し、山腹をのぼってゆく。

椴松の梢は寒く、林は黒く、そうしてその間からちらと青い空を覗かせてはまた濃く黒

く密叢した林となる。

「ここは何という峠だね。」

「熊笹峠です。」と運転手が答えた。

なるほど、熊笹の大なだれの波のうねりは驚くべく光滑に、また底に暗んで、しかもいかに寝よげな絨氈の青みを重ねた。それが近づけば近づくほどの深みを撓めて見えた。

光が天の一方から流れる、流れる、流れる。

鬱気か、冷氣か、雲が迅いか、日がかげるか、自動車の捲き起す疾風か、私たちの胴ぶるいこそは繁くなると、

ああ、古蒼なさるおがせが榎松の高い枝にかかっている。

風邪氣の庄亮に私は私の緑のレインコートを頭からかぶせた。私の黒いアルパカが吹かれる、吹かれる、吹かれる。

からまつの林に入りて、

からまつをしみじみと見き。

からまつはさびしかりけり、
旅ゆくはさびしかりけり。

この落葉松の私の詩を、私はまた思い出した。
ああ、その落葉松の林にもはいつた。

*

おそらく、私たちを乗せた巨大な甲かぶとむし虫むしは、今は一千五百尺以上の山中を驀ぼくしん進して
いる。

霧は霧を追って奔はしった。風は風を吹き落して奔はしった。

と、遙かに、思わぬところに海の一面が見えた。

あ、黒い黒い韃だつたん鞞だつたん海。

真夏の卷けんうん雲。

まさしく、自動車は逆行しつつある。と思う刹那にまた山頂の一角を繞めぐった。椴松の原

野がまた眼下に見えて、今度はひた降りに疾走する。

真岡から此処までのうち、私たちは、ほんの二、三戸の一部落を見たのみであった。

幽邃ゆうすいと幽深と、北方の原生林の陰鬱な植物の威圧と無関心。

と、

「君とオわかアれて、コラサ。」である。

「松原ゆウけエばア、コラサ。」

や、赤、赤、赤、黄、黄、黄、白、白、白。

安来ぶしだ、

三味線だ。

飾り屋台だ。

や、や、や、襷たすきだ、紅べにだ、姉ねえさんかぶりだ、浴衣だ、赤い蹴け出しだ、白足袋だ。や、や、

や、や。

一、二、三、四、五人。

コラサツと筈はずを両手で、コラサ。

しかも、くわつと明つた真つ白い大道のまん中である。コラサツ。

私たちの自動車は、思わぬこの娘じようし子軍の出現にいきなり前方を塞せかれて、たじたじとなるとガソリンの爆音のみ、いたずらに我が天心へ反響はんきやうさせて、さて停ると、ますます燥はしやいで、浮かれて、ひつかかえたペコペコ三味線の連れ弾きと来た。

コラサツと、コラサツと、

無言の鱒どじようすくいの足取りが左へ左へと腰をひねって廻まわってゆく。

いったい、此奴こいつら、人間であるか、ただしは山の貉むじなであろうか。それは知らぬ。ただ踊る姿は人間の女で、箆へらは手振は足取りは鱒どじようすくいにちがいない。

何たる奇怪。

私は眼をこすつた。

一同も総立ちになった。

「安来せんげエ……エエ……ン……ン。コラサイイ。」

「なアんだ、後家さんか。わっはっ。」N老人が、そして、ひゅうと指笛を鳴らした。

「おもしれえ、おもしれえ。」庄亮だ。

「あっはっはっ、こりやいい、白秋さんどうです。」

飛び込んで、よっほど、その踊の輪の中に這入はって見ようかと、麦稗帽を箆へらに、ワイシ

ヤツの、ハンケチの頬かぶりで思わず立ちかけたが、相手を見ればそうもならず、ただ顔をあかくして笑っている、いと、いと、

「白秋やれやれ。」と庄亮が後ろから背中をこづいた、こづいた。

それは全く踊りたかつたのだが、惜しいことをした。夫子まだ悟入しないと恥入つたな。だが人ひとりにも絶えて遭わなかつたしんしんとした原生林のこの道中の、突如として起つた、この三味線の、紅の襷の、鯛すくいである。私の動悸はまだ収まらなかつたらしい。

よく見れば、白粉おしろいこつてりの女どもであつた。

小さな、玩具おもちゃよりやや大きな飾り屋台には桜の造花をつらね、赤と黄との幕を張り、金壺円何々殿寄附のビラさえ二、三枚は風に吹かして、さて、曳いて、歩いて、また輪になつてコラサツであつた。

だが、あたりには家も見えなければ人影も見えないのだ。

天には日がちいさいちいさい。

F君が錢を投げた。

ところで、また、白日はくじつ光耀こうようの下で、形もない鱈もくずの、日のごぼれの、藻屑もくずの、ころこ

ろ田螺たにしの、たまには跳ね蝦えびの立鬚たてひげまで掬おうとして、箆をかくく、足をあげ、手で鼻をつまみ、振りすて、サツとまた箆を、空へ、コラサツである。

色っほい、色っほい。

「やははい。」と顎を出す、眼で挑む、「旦那やア。」となる。

それ逃げ出せと、甲虫の突進だ。

サツと、娘子軍途を開く。そこで私も銀錢をみつぶし、チャリンと撥ぼちで受けると、片眼のそのお婆が、

「へい、ありがとう。」

「行つてらつしやい。」「ごきげんよう。」「また、今晚ね。」「チュウと鼠鳴きだ。」

狐につままれたかな。

ああ、榎松、榎松。さるおがせ。

*

「あいつら何です。」

「白首しらくびでさあ。」とN老人。

「あ、家が見えて来た。」

「どれ、ほう、村だな、村だな。」

「や、お祭りらしいよ。」

それでわかった。あの娘子軍の一行、浮かれ浮かれて、村はずれを、人の気もない山へ山へと練り出した、そこで遭遇でっくわした私たちだったのだ。酔興酔興だとも思えるが、流石に原生林の中の寂しい生活者の姿である。

「ストップ」と誰どだか怒号どなった。

ビールやサイダアのビラがある、「ひやむぎ」と書いた貼紙、店は開け放して、長い床し几ようぎが二、三脚、硝子すたれの簾、造花の軒飾り、祭りの提灯。

物珍らしさに、私たちはその土間へずかずかと這入って見た。そうして黙々と肢や脚を揉もんでいる卓上の銀緑の蒼蠅あおばえにこれはと目をしかめた。

「ひやむぎでもやるかな。」と私が笑うと、

「健啖けんたんだなあ。」と庄亮が驚く。

だが、ビールの一、二本がすぐと抜かれた。

いわゆる後家さんの屯所とんしよであろう。それらしい二、三軒が向いあい、その新聞紙貼りの二階の壁までが露わに見通せたが、野猪のじしのような毛むくじやらの男の幾人いくたりかの顔も、とある廂ひさしの下に何だか陽気そうに集っていた。外に荒物屋が一軒。

此処が清水村逢坂。

何でも、そこらの山林にいる伐木人夫どもが、たまに酒でも飲みに行って来ようという、ほんの五、六戸の部落らしかった。それでも何という寂しい夏の祭りであろう。晴衣著た子供たちの姿も見えなければ、化粧した若い女のけはいもしなかつた。

いや、ありつたけの娘子軍は、すでにチャンチャカチャンチャカの鱒すくいに出払ってお留守なのである。

そこで、水筒に水を入れ替えて、またガソリンの爆音を立てさせた。

*

林が林に続いた。高原が高原に続いた。

露領時代のままの駅えきてい通が或る林中に幽かに薄紫の炊煙を立てているのも見た。その駅

通は丸太組で、極めて簡朴な、そうして異国風の雅味を持った建築であった。それに赤みがちの錆色にも古びが付き、硝子窓の切り方などかなり凝って、尖った屋根飾りや軒飾りなども単純で、いかにもまた雪の深い樺太の情趣を忍ばせるものであった。

蹄鉄、ながえ長柄の鎌、フオク、斧、なた鉞の類がその土間には放り出されてあった。

日の光が、黒い椴松の梢々の間でちらちらした。

薄ら寒い雲の流れでもあった。

と、その上手の、かみてまだ木の香のなまましいバラックの、戸は引いて、窓も閉めたのが、その中では何か盛んに喧騒していた。たしかに酒に酔うた五、六の人間の放歌ほうかこうぎん高吟がきこえた。

そのバラックの前に黒塗りの立派な函自動車はこが待たしてあった。

私たちの甲虫はその前をまた爆音高く通過した。

*

私たちはまた、こうした原生林の中の幾つかの駅通や部落を通り過ぎた。部落といって

も全くの寒村で、急勾配の廂の長い丸太式の家が二戸か三戸か、ほんの飛び飛びに並んでいるきりであった。

山はいよいよ高く、林はいよいよ深く、道はいよいよ迂回して、気流はまたいよいよ冷ゆるばかりであった。

霧が驟雨のように流れて行つた。

ああ、さるおがせ。寒い寒い幽かな糸状の懸垂。英国風のクラシツクな風景画の黒楸の骨格。その枝々のあのさるおがせ。

そうして、私はまた見た、その背景バックの白い雲の峰を、

また、密叢した落葉松を、

赤楸と赤だもの疎林を。

そうしてまた暗い谿谷の中腹の白く輝くしらかんば白樺を。

何という処女林、清高な、犯し難い、しかしまた永遠の神性。

私はまた想像した、雪に埋れうも、氷に閉され、伸びては枯れ、枯れては生おうる林相の無常を。またその光明を。

あ、あれは何だ、あの赤い実の鈴生つた蔓草は、やどり木は。

あ、紅葉も見える。もう秋だ。ああ、もう秋だ。

*

山峡^{やまかい}である、ややうち開けた。

リュクサツクを負った、絵の具函を水筒を肩から掛けた、三人の角帽の学生姿が流るる霧にぼやけ、日の光にまた現われて、その幽かだったPPPが急に大きい影像をつい目のさきに爆^はじかせて、逆に振り向くと、「やあ、やあ、やあ。」と満面の笑顔を輝やかさせた。

「やあ、君たちだったの。」

「おお。」

「ほう。」

「M君、や、T君もだね。」

「Y君、これは驚いた。」

口々に私たちも驚いて帽子を振った。自動車は停った。日本医専の二人に工科大学生の一人であった。

彼らは徒歩で昨日真岡からすぐに発足したのであった。

「さあ、乗りたまえ。諸君。」

「つかまつていいですか。」

と、早速に両側の踏台に飛び乗った、そうして上の幌の柱にいずれもぶら下った。甲虫に黒蟻が取りついた姿勢である。

「貸切りだよ、かまわないよ。」

庄亮がすかさず、運転手は笑わず、ポウ、プツプツプツプツプツである。

「昨夜は何処へ泊りましたい。」

「逢坂です。」

「なるほど、これはおえらい処へ。あつはつ、彼^{あそこ}処の後家さん綺麗でしたかい。ことにM君などは大もてでごわしたろう。」

「僕らはそんな不潔な処へは泊りません。荒物屋です。奥さんは立派な人です。」とMがムキになると、

「へえ、あつはつは」とN老人が哄笑した。

霧がまた驟雨のように私たちを追い越して行つた。

午後の日もよほど廻つたらしい。

きょうきょうと何鳥か啼いて、また幽かになった。

ああ、黒楸、

さるおがせ。

*

一望の耕作地、すずや鈴谷平野。

いよいよ私たちの自動車は最端の峠をその麓の坦道へと迂回し初めた。

だが、その山腹のお花畑の美しさは、その紅はくれない黄は紫は、全く何に譬えよう。たしかに

それらは高山植物の気品と清香とを充ち満たしていた。

ああ、光がのぼる、のぼる。

ああ、また、なだれる、なだれる。

風だ、光だ、反射だ、影だ。

その中へ目がけて、私たちの巨大な昆虫はまっしぐらに驀進する。

と、また、山火事に焼け黒ずみ、また雪に雨に白く晒された榎松、白樺、落葉松の疎林が、ほうほうと寒い梢を所在に震わしている。その閑寂、その地の華麗。

「山火事跡かな。」

「いや、開墾のために焼いたんだらう。」

「だが、少々焼き過ぎたね。」

「飛火したかも知れないさ。」

私と庄亮とはこう問い答える。

螺旋状に段々と下降しつつ、俯瞰し、また大観しつつ、遙かに、翠緑の丘陵を平野のあなたに発見し得た私たちは、いよいよ、豊原に近づきつつある喜びのために歓声を挙げた。まだまだ三里か四里かはあるだらう。

突進、突進。

赤、赤、赤、赤。紅、紅、紅、紅、紅、黄、紫、黄、紫、赤、赤、赤、赤。

飛躍、飛躍。——咆哮、爆音、風、風、風、風。

*

「あつ、パンクだ。」

「また、やったな、ちえつ。」

と、この第四のパンクの時に、それこそ私たちはもう曠々とした平野の耕作地に這り込んでいた私たち自身を見た。

まことに砥のごとき途上であつた。

両側の畑には穂に出て黄ばみかけた柔かな色の燕麦があつた。またライ麦の層があつた。トマトの葉の濃みどり、甘藍のさ緑、白い隠元豆の花、唐黍のあかい毛、――

また、飛び飛びの伐り株、測量のテント、道端の虎杖、そうして樺太露。

立ちつづく電柱の薄紫の磚子、針金。

麦粉、乾草を積んで東し西する荷馬車、また俵のうえに眠つてゆく少年。

ああ、なんだかファイルムで見たエルサレムへゆく巡礼道の情景と、そっくりではないか。お、馬が来た。農作馬車だ。粗末な土まみれの木柁の中に十五と十二ばかりの眼の大きな百姓娘が坐っている。

馬はほくりほくりと傍らの露の葉の林へ這入つてゆく。

ほう、馬の首が露の葉にかくれた。妹の娘が振り返った。あつ、姉は澄まして馭ぎよしてゆく。うれしい緑のこぼれ日、こぼれ日、こぼれ日、こぼれ日。

「此処で、何です、いつか自動車が顛てん覆ぶくしましたんで、人死にがありました、それで豊原道みちは危険だとなつてしまいましたんですがね。いい迷惑でさあ。全く運転手の過失で、こんな何でもないとこで飛んだドジをやったものです。」

運転手ははずしたタイヤをガバガバと地上にひつ転がすと、今度のまた破損の箇所
にゴムの継ぎを当て当て、アラビヤ護ゴムで粘くっ着けると、トントんと叩いて見た。これから
また例のポンプで空気を吹き込もうというのだ。技倆の未熟も恐ろしいが、掛替えさえも
一つしかない、それでもう四度もパンクした、継ぎはぎだらけの膏藥貼りのタイヤの、こ
のぼろぼろ自動車に乗った者こそ災難だろう。危険千せん万ばんだと思つたと笑いたくもなつた。
それでもまだどうか此処まで来られたからいいようなものの、逢坂あたりで、代りのタ
イヤもパンクしました、もう動けませんとでもなつたら、命は無事でも、行くにも行けず、
還るにも還れず、一同立往生の憂目うきめを見た事だろうと思つと、思わずほつとしたものだ。
どう見たところで熊笹峠にせよ箱根の新道ほどの危険な懸崖はなかつたと思つた。

どちらにしても、もう豊原は近いのだ。

「御迷惑さま、さあどうぞ。」

結局パンクの数の多いほど、今はかえって楽みであった。何故かといえ、その度ごとに、私たちは十分の暇いとまを得た。眺望し観察し散策し撮影もしたのであった。だが、もうこれきりであろう。

自動車は駛り出したが、相変らず揺れる、揺れる。

お、誰だか長い柄の草刈鎌で、一面に熟れかえった燕麦をスウイスイと刈り立ててる。いい香においだ、いい香においだ。

*

観ると、いつのまにか、目当めあての鮮やかな丘陵の緑に、裾の鼠にぼやけた白い重い雲がかぶさっていた。

その梢の隠された疎林、疎林、疎林。

斜陽はすでに黄ばみかけたが、さして強くは輝かなかった。

ただひろびろとした燕麦や豆の畑に、何かしら冷氣だった物の影が流れて、また明ると

もなく後明^{あとあか}りしては陰^{かげ}って行^いった。

だが、道はいよいよ善^よくなつてゆく。

なんといい豊原道だ。

向^{むか}うから小さな人影^{かげ}が来た、生きて動^{うご}いて、何か帽子^{ぼうし}に幽^{おそ}かな円光^{えんこう}を発^たてて。陽^ひを真^ま正^と面^{めん}に受^うけたのであつた。

一分……二分……

車体はイキナリ左へ投げ出^だされかかつて停^とつた。凄^{せつ}まじいパンク。

すれ違いさま、あわやと見たので、思わず急^{いそ}角度^{かくど}で避^よけようとしたのである。転^か覆^かこそは免^まれたが、今^{いま}度^どこそ道の真^まん中^{ちゆう}でパンクしてしまつた。

「危険^{けんけん}危険^{けんけん}、あつはつは。」

「やりきれねえ、やりきれねえ。」

だが、私たちはまた道端^{みちばた}のやや高^{たか}畦^{あぜ}の斜^{かた}面^{めん}へほつぽつと凭^たりかかつたり、蹲^かんだりした。わが庄亮^{しやうりやう}は「やりきれねえ。」といいながら、歌^{うた}のノートを取り出^だしては書^かきつけて、ともかく悦^{よろこ}にはいつていた。

「しつかり頼^{たの}みますよ。」と謹^{きん}直^{ちく}なA君^{くん}が今^{いま}度^どばかりは擲^{ちやく}揄^う気^き味^みにきめつけた。

運転手は一生懸命であった。

この第五のパンクが騒ぎとなった。

ところへ闇やみくも雲に後から驀進して来た一つの高級自動車があった。あの露ロ西亞風の駅通の前に見たのがそれであった。

酔ってる、酔ってる、全くもって、山高帽の、モウニングの、また麦むぎ稈わらの背広の、眼鏡の、ホワイトシャツの、藤とう八拳はちけんの、安来節の、わいわい騒ぎの眼と鼻と口との連中が、不意にその前途を塞がれたので、停ると、いきなり、

「こりや、やい。ポンプ野郎。」となった。

「こりや、やい。」

「うむ、こりや、やい。眼があるか、やい。」

「天下の公道だぞ。不届者奴め。」

「往来だぞ、公道のまん中でパンクする奴ウがあるかア。」

「規則違反だぞ。」

「赤だも、そっち避けよい。」

「林野局のお通りだぞ。」

「下郎くたばれ。」

「ばかア。」

運転手はへえへえで、それでも手順も一向につかぬか、あ、また、螺旋ねじまき巻まきばつかり廻まわしている。

こちらは、ほう、あの御仁体が樺太庁は林野局のお役人だそうなど眺めている。

「早くせんかア。」ドドドン。

「ひつしよびくぞ。」ガタガタ。

「こら、こら。」ドンドン、「馬鹿野郎ツ。」

いくら躍鬼やっきとなつたところで、そう早急に始末のつく訳はないのだから、もうこれで五度のパンクでいかな膏薬万能のタイヤでもそうそう無理な治療が利こうはずもなし、気長に待つより仕方があるまいと、こちらはみんなが呑気である。

空に孔でもあかないのかなと、私は仰いで手枕だ。

そこで庄亮、「おい白秋、長柄の鎌でスウツスと刈つたらなあ、あの燕麦を。」

俊敏F君観察だ。手と足何本突き出した。

重厚Hさんはただ苦笑いでカメラをそつちへ向けている。

和製タートルさんは大茶目だ。ぴゅうと指笛でも吹きそうだ。眼鏡を片っ方はずしてる。医専の一人はスケッチだ。畑の向うの楡にれの木はいい形だなど、やっている。外ほかの一人は実直だ。心配そうに避けている。

工科のY君、流石である。ガバガバパンパン手助けた。

警部のAさん京都府だ。知らぬふりです。めんどうだ。

「こりや、やい、観光団の馬鹿ッ。」

「頼たのもし母子講。」

「竜宮の身投げ。」

「助平じじい。」

「イヨウ、ハイカラア、ふとつちよう。」

「ちきしよう。」

「何しに來たア。」

「榎松強いぞッ。」

「さっさと行きやがれ、へへんへんだ。」

おやおやと、こちらは眼交めませで、取り合わぬ。

「やいこりや、天ン下アの公道だじよツ。」

「ひきしよびくじよツ。」

「ばきややろうツ。」

だんだん、お声が悲しくなる。

この間^{あいだ}おおよそ二十分間。

やつと、形ばかりの修繕を済ましたと、

また後ろでは勢^{いきおい}を盛り返した。

「待てえツ。」

「俺の方を先きへ通せ。」

「寄せろ。」

「名刺を出せツ。」

この時、庄亮、剣道仕込みで、すうつと立ち上ると、

「運転手君ツ、さあ、お通してあげるぞお。諸君、押してくれたまえ。」プツプウプツプウ。擦り抜けると逃げた逃げた、一目散である。

「えらいお役人もあつたものだね。」

「ええ、どうも威張りくさって困るのです。」と運転手。「植民地ですからなあ。」

「だがそのお、パンクして交通を停めたのはこちらの失策だが、一度叱れば済むことを、そのお、しちくどいからね。」

「僕たちは林野局の局長のAさんへの紹介状を持って来ているんです。今夜も泊めて貰うはずですから、いいつけてもいいです。」と医専のM。

「まあ、いいさ。黙っておくさ。」

そこで、私たちはまたぼろぼろ自動車へ乗る。ぶら下る。駛り出す。

また、パンクだ。

「ええ、もう一里弱ですから、このまま滑走してしましましょう。」

これにはみんなが笑い出すと、

「ようし、やれ。」

「やっつけえ。」

驀進、驀進。

*

揺れる、揺れる。

や、楊だ、並木だ、光る、光る、光る。

や、紅葵だ、

向日葵、向日葵、

や、西瓜の花だ、縞西瓜だ。素敵。

「や、や、露西亞人の家だね。いいな、あの丸太組みの建築は。」

「いいなあ、広い通りですな。」

「や、旗なぞ出しますよ、お祭りですかしら。」

「や、豊原だ、豊原だ。」

「万歳。」

「万歳。」

「びゅう……うる……る。」

*

と、町へ入る左口、とある広場に、これはまた大げさな灰色の天幕^{テント}。

おお、あのトロンボオンは、

クラリネットは、

おお、あの喇叭^{ラッパ}、

おお、太鼓は、銅鑼は、

そうだ、曲馬^{チャリネ}、曲馬^{チャリネ}。

滑走、滑走、滑走。

そこで、ふつと振り向く、ちらと眼に入ったは、天幕^{テント}の前、象だ、象の子だ、小さい、背中に金と赤との印度織りの鞍掛けを着せられて、垂れ下った両耳の、長い灰いろの釣^{かぎば}鼻^なを揺^ゆっては振り振り客呼びしてる。や、や。

「あ、君、象の子がいる、象の子がいる。」

小沼農場

緒あかいがガサガサした粗皮の椴松、蝦夷松、たもの木などの丸太で組立てた樺太庁農事試験場の歓迎門は流石に簡素であった。まことにいい趣味だと思わせた。

私たちの一行は小沼こぬま駅へ着くと、すぐに線路を越えて、その入口にかかった。よく掃かれて塵一つとどめぬ白い農園道は、坦々として真っ直ぐに熟うれいろ色のライ麦や燕麦の畑中を通っていた。行啓の名残で、黄や赤や紫や青やの万国旗が此処でもまだ翩へん翻ほんとしていた。その下を、薄い翅はのかがやく蜻蛉とんぼや蝶々の番つがいが、地にすれすれに流れたり纏もつれ飛んだりしていた。空は蒸しても何かしら光らぬ北方の曇天であった。

豊原から此処までの二駅の間は、たも、ばっこ楊、落葉松の疎林に紅紫の楊やなぎ蘭らんや薄黄やまうどの山独活、ななつば、蝦夷蘭の花がまだ野生のままに咲き乱れて、ただ処々に伐採跡の木の根っ株が顕れていた。だがこの小沼へ来ると、総てはうち開けて整然とした穀物と野菜の祭りが私たちの前であった。

案内役は林野局の局長のAさんである。

前夜、私たちはあらかじめ定められた北一条のH屋旅館にひとまず落ちついて、大泊から廻つて来る同勢を待ち受けることにした。その晚餐後、最寄りの書店で絵葉書をあさっていると、其処へ医専のTが這入^{はい}つて来た。

「どうしたい。」

「Aさんの官舎へ泊めてもらうことにしました。きさくな人です。飲むとおもしろいんですよ。非常に歓待してくれましてね。そしてずっと泊つていいといつてくれます。」

「ほう、それはいいね。」

「先生を知っていますよ、Aさんは。なんでも弁当箱に書かれたことがあるでしょう。愛翫^{あぐわん}しているそうです。小田原の親戚からもらつたといっていました。Aさんも相州の人だそうです。」

「ほう、あの醍醐味かね。」と私は驚いた。

実はこういうことがあつたのである。

私がまだ伝^{でん}肇^{じょう}寺の間借りをしていた時代だからかなり古い話である。海岸のKという人の貸別荘によく遊びに行ったものであるが、ある時、山^{やま}本^{もと}鼎^{となえ}君と二人で、その奥座敷で快く饗応されるままにいい気になって、海を眺め、半日の小閑を楽しんでいた。

主人は手のついた白木の弁当箱を持ち出して何か書いてくれという。そこでよしよしと酔筆をふるった。それが醍醐味の三字であった。いつかしらまた、それがAさんの手に入つたものであるらしい。主人は土地や山林に關した仕事をしていた。商才に長けてなかなか機敏な人であった。

「一寸、林務官が見えていますから。」と時々中座した。その時の二階の客というのが、今思うと恐らくAさんであつたであろう。

私たちは陶然としてしまった。もう少し酒興が深めばいよいよ羽化登仙というところで、サラリと正面の襖からかみが開いて、コツコツと杖こそ突かぬが、ぬうと這入つて来たは白髪白髯の老紳士とその老夫人であつた。主人は後から元氣な赤い顔をして蹶ついて出て、

「ええ、こちらが十二畳でございます。」と、上座の私たちを、目八分に透かすと、

「只今、ここに御酒ごしゅをめしあがつていらつしやるのが北原白秋先生に山本鼎先生でございます。お家賃は百五十円で。」

「おいおい。」と鼎さんが私の袖を引いた。

「僕らも家賃の中へはいつてゐるらしいよ。」

「や、こりや驚いた。逃げよう逃げよう。」

向うでも流石にすぐに引つ込んだが、後できけば、有^{ゆう}福^{ふく}ななにがしの子爵とやらであった。

二階の客も逃げたらしい。小田原旧城の倒れ木の払い下げもついぞまとまったという話もきかなかつた。

ああ、あの醍醐味の弁当箱かと、私はまた独で苦笑した。

そのAさんは背の高い瘦形の、鼠の背広に麦稗帽という軽装で、気前よく私たちの先へ立つて行った。役人臭のない、極めてさっぱりした中老人である。そうして時々突拍子もない諧謔を弄した。(だが、その翌日、林野局に私が挨拶に行った時は全く硬直した官僚的態度で、や、そうですか、や、と大きな事務卓を隔てて、にべもなく私の純情を跳ね返してしまった。そこで一寸てれた形になった私はそこそこに辞去したものだが、同じ昨日の人でありながら、こうも役所では変れるものかと思議でならなかつた。これは別に悪い意味でいうのではない。私にはわからないから杲然としてしまったのである。)

さて、私たちの歩みが薄紫の花のむらがる馬鈴^{ばれいしよ}薯^{いしよ}島の前に来たところで、何か親しい秋雨のような細かな霧雨も降り出して来た。

*

この菜園でも、白い蝶のひらひらが低く、燕麦の穂から穂へわたっていた。蝶の翅も幽かに雨を感じたらしい気であった。

菜の花の鮮黄の群れも目についた。

もち稗も熟れていた。

亜麻畠のややほの青みを保った熟いろの柔かさ匂やかさは何ともいえなかった。まだ紫の花がちらちらと残って、多くは小さな小さな円い実をつけ初めていた。

菫葱の花の大きなやや毛ばだった紫の球にも細かな霧の小雨がかかっていた。

庄亮はノートに歌を書く。

私は標木を読んで行く。

ライ麦（アルコール原料）かな。

アムール、

サクソン、

スプリング、

ウラジオ
浦塩、

アプルツク。ランランラン。

やあキャンデータフトか。白い花、これはいい花、写生しよう。

や、トマトだ。蕃茄^{ばんか}か、アリアアナか。

や、や、南瓜^{かぼちや}だ。ころげたな。

デリシアスかい、

ハツバードか。

まさかり南瓜だ、驚いた。

魔法杖でもちよいと振りや、娘ふたりがダンスの杳^{くつ}にもなりそうだ。躍れよ躍れよ、お

どり杳。

や、草苺だ。ド、レ、ミ、ファ、ソ。紅いな紅いな、雨の粒。

や、木柵だ。御免なさい。

ほう、すかんぽだ、枯れ花だ。

朝鮮黍^{きび}だ。唐黍だ。

青刈り用とはフレツシユだ。焼いて嗅ぎましょノスタルジャア。や、や、なるほど、秣まぐさにしますか、勿体ない。あかい垂れ毛も濡れている。

なんと緑の疣いぼいぼ々々だ。胡瓜きゅうりの花も顔まけた。

やつ、いい凶案だ。花椰菜はなやしきい。民謡集の金版かなばんだ。

やあや、火焰菜かえんさい、火のようだ。ゴールドビーフのつけあわせ。

亜米利加防風あめりかぼうふう、ちさ、セロリー。ゴールドンセロリーは金の莖。

瑞典蕪スウェーデンむぐら、大蕪おおかぶら、銀の鰯いいわしがちらかれば、さしずめわたしの雲母集きりら。

人蔘にんじんの髯、七、八寸、家畜用だと人はいう。

や、蜜蜂だ。ぶうんぶん。胴は花粉で真つ黄だな。花の色よりまだ濃いな。

おい、おい、庄亮、歌ができたぞ、四五句だけ、

大麦黄なり夏蕎麦のまへ

白花じゃがいも、赤いもだ。

紫の花、白いもだ。

雨、雨、雨、雨、傘さした。

私は口笛吹き吹き行つた。

洋館前の芝生には、円い花壇がふたところ。

実に愉快だ。黄だ、赤だ、雪白、紫、緑いろ、

白玉葵^{あおい}、赤玉葵、

スウィートロケット、シヤスターデーシー、

また、金蓮花、

そして、ちらちら、コスモスの淡紅^{うすべに}いろの花盛りだ。

そして細かな雨がふる。

裏へと口笛吹き吹き行くと、

蔓^{つる}細^ほ千^{せん}成^{なり}、茄子の花、おはぐろつけたて^{ちゆうとしま}中年増、

黄と白、赤の葱坊主、毛槍かつげば^{ともやつこ}供^{とも}奴^{やつこ}、

人蓼の花、八重垣姫の花かんざしの額^{ひたいがみ}髪、

花の痛いは種^ご牛蒡^{ぼう}、勸進帳の篠懸^{すず}けだ。

此処にも細かな雨がふる。

ピッチピッチ、チャップチャップ、ランランラン、
ピッチピッチ、チャップチャップ、ランランラン、

あ、あ、牧舎が見えた。

なんと抒情的な異国風景、

ああ、春榆^{はるにれ}、山査子^{さんざし}、白樺^{しらかんば}、

広い広い牧草の原、

あ、羊だ、羊だ、遠くを人が追って来ている。

牧歌牧歌と誰やらが叫んだ。

私の小唄は閑かになった、浮かれ心は。

小雨も幽^{かす}かに小やみになった。

*

洋風の牧舎の様式は早速に小型の黄色いノートを私に取出さしめたほど私を魅了した。私は克明に写生した。

その屋根は上部で段がついた深い急勾配で、正面から見ると将棋の駒の外観をしていた。棟には幾つかの空気抜きむねの小さな塔が並んでいた。屋根裏の窓は広く二層になって、上のは小さかった。入口は思い切り大きい両開きの木の扉が左右に裏板を見せて、ほの暗い内部を透かした向うにかつきりした長方形の雨空と緑との画面がうち明っていた。

私たちは紅い火焰菜の根を掌てのひらにのせた場長さんの後に蹠ついて、濡れ雫の蝙蝠傘をすぼめすぼめ這入って見た。

第一は牛舎であった。

其処には通路を中にして、両側に対い合せに間割りまじきがあり、その一つ一つに、エアアシヤー種や、ホルスタインの種たねうし牛と牝牛とが沈々と深い瞳を光らしていた。何れも黒くつやつやしかった。角ががっしりして撓たわみ、両耳が垂れ、そうして悠揚と突っ立っていた。

糞尿に黒く湿ったその床も、それでも帚ほうきの目がよく届いていた。青草のにおいもした。

他の牧舎には耕馬もいた。内国産アングロマン種、北樺太産洋種、内国産洋種。

骨太く、肉づき厚く、脚短く、逞ましい黒い馬の、流るるがごとく光沢の皮膚。

「耕馬はこれでもちやならないね。どうだ、このおすばらしきは。」と庄亮がいった。そうしてその一頭の長い額を叩き、頬の膨らみから頤の毛並を軽く軽く撫で擦った。馬は眼を細め、薄あかい歯茎をむき出し、顫ふるわせながら、さも擦こばゆそうに笑った。

雨がまたしめじめと降りかけた時に、私たちは養狐場の高い板囲いの潜り戸を開けてもらっていた。

ほの黄色い燐の火でも燃えちろめきそうな空そら合あいであった。

樹といつては白い幹の凋落樹の白樺がただ一本うち湿っているきりであった。

狐は通路を隔てた両側の高い金網のなかを幾つかにまた割った各自の庭を与えられていた。庭の中央には脚高の細長い小さな巣箱があり、その横から一方へ斜に樋のようなものが地面へ向けて突き出してあった。その樋の口から、きよろりと狐の眼が光った。その樋の下には階段があった。狐はその階段の下の地面に潜り穴まで穿うがっていた。

ともすると、庭に出て金網近くをきよそきよそと徘徊している黒狐もあった。疑心深く、驚いては逃げ、狡猾そうにまた後ろを振り向いて立ち留った。

ああ、雨がふる。

私たちはビスケットを投げた。だが狐は徒に尻込みして容易に金網に近づこうとしなかつた。

「じりじりしますね。何でああ疑い深いでしょう。」と医専の一人が舌うちした。

「そこがいわゆる狐疑逡巡こぎしゆんじゆんというやつだろう。」

褐色の尾の薄い青狐もいた。十字狐や赤狐もいた。その中に尻尾の尖りの白い黒狐の仔だけがまだ人なつこく、はしつこく、金網に飛びついて来た。可憐なその赤い舌が庄亮の掌てのひらを嘗めた。

「あつはつはつ。こりやいい。おもしれえ。」

「無邪気だね。子どものうちはみんなああだな。」

ああ、雨がふる。狐の目つきに、毛の光沢に。

こんと一声。

秋雨めかしい、燐りんのにおいの小雨である。

養狐場を出たところで、私はまた牛舎の白い狭霧さぎりを、厩舎や豚舎の小雨を見た。雫しずくを含んだ鮮緑の広々とした牧草の平面を、また散在した収穫舎、堆肥舎たいひ、衝舎、農具舎、その

急勾配の角屋根を。

またうち湿った闊葉樹、針葉樹の林を、森を、また花いろの遠い煙霞を。

ああ、目に透かすと、先ほどの羊の影絵は早やなかつた。

旅愁がしきりに動いて来た。

私は狐に遣り残しのべとべとのビスケットをわが手に嘗めた。

「羊はもう出て来ないのですか。」と私は歩きながら場長さんに訊ねた。

「めんよう緬羊ですか、いや、雨が降り出したのでもう入れてしまいました。なんならもう一度

外へ出して見ましよう。雨も止んだようですから。」と、その人は答えて、「それじゃ、

どうぞ此方へ。」と緬羊舎の方へ急いだ。

蔭の深い楡の二、三本の木立が、其処には幽雅な雨霧をまだ梢の緑に保っていた。

何という完全な楡の象すがたであつたろう。楡ほど枝ぶりの整った木は珍らしい。殊にそれが

老木になつたほど喬たかく、また鬱蒼と張っている。観ていていかにも北方の木の母だという

感じがする。

その木立に一本の山査子さんざしがまた隣となっていた。

製こぎえたばかりの白木の卓テエブル子と二、三脚の同じ白木の長椅子ベンチとがその蔭に出しっぱなしであった。卓テエブル子も長椅子ベンチもじつくりと湿っていた。

私たち——Aさんと、医専の二人と庄亮と私とは、その榆の根方ねかたに座をしめた。

少し離れて左手にまた一本の、それは最も完全な老木の榆が涼しい繁りをそよがしていた。その蔭に正方形の白木の壇が据えられてあった。そうして白木の卓子も置かれてあった。つい前日に摂政宮殿下の御座所だったとのことであった。

そうして私たちの度つましく取り囲んでいるこの卓子は、恐らく殿下の侍従たちの額うが恭やう々しく集められたことであろう。殿下も白木の壇上の白木のあの卓子に、おん身を、そのお椅子を寛かんかん々と進めたもうたことであろう。そうして遠い白樺の林のかがやきを、牧草の一面の微風を、なんと御覧遊あたりばしたであろうか。何という簡素と高貴。

御座所の方に向つて、また、四辺あたりを広く眺めまわして、しみじみと私は崇敬した、日本皇室の神聖と、吾が民族の由来する伝統と精神とを、そうして愈いよいよ々に幸さきわうわが国の言ことと霊たまとを。

御座所の後ろにはささやかな、また清らかな浅い池があった。何の作るころもない、自然のままの池であった。その水面が薄く明つて、平らかに、また何かの影も映していた。

そうして周りの、紫の玉を綴った紅苜蓿べにつめぐさや、四つ葉の黄の花の馬うまじやし肥やしやとすれすれに落ちついていたいい静まりを匂わしていた。あの水を緬羊も飲み近寄るのだなと私はまた透かして見た。それは幽かであった。

音がした。それは初めはあるかない響きであった。その覚おぼつか束ざわない騒ざわめきが、次第に柔かでもある深みを持った重い確かさで、前の緬羊舎の戸口から、緑の濡れしずくの草っ原へもこりもこりと動いて来た。

改めて駆り出された緬羊の四、五十頭の群であった。

新月形の両の角を振り振り、素すの額のまろい眶まぶたの肉の垂れた、眼の柔和な、何か老いて呆とぼけ面の、耳の蔽い毛の房ふさふさ々として、部厚い灰色の、凸でこ凹ぼこの背の、気の弱い緬羊は密集して、誰から、どの列から誘うとも誘われるともなしに、おのずからに草を食べ食べ移つてゆく。その鈍い動きが動くにつれて立つる音から、古びた綿わた埃ほこりの渦うずのような、また絨じゅうたん氈たん臭い、そして高まる神秘性の何かの総合音が感じられた。

めうう……めうう……とあるものは首をあげた。ほとんど総ては下向き下向き、草を食べ食べ移つて行つた。

と、場長さんが、若い技手に白い陶器のミルク入れと、白い西洋皿と、透きとおつた薄

手のカップとを運ばせて来た。白い二つの皿には水つぽい新鮮なサラダの緑を、白い三つの皿にはやや薄黄のマイナスソースをかけた羊の蒸肉を盛ってあった。それにはまた薄あかい割り箸を添えてあった。

ミルクが一回のカップに注がれた。

「これは搾りたてですから召しあがって下さい。サラダも撈ぎたてです。」場長さんはまた附け加えた。

「この羊の蒸肉は昨日のお残りです。」

それはと一同がお辞儀をした。

「ありがてえ、ありがてえ。」と庄亮が例の両手を振り振り、その頭をひつ擁えると、ふくれた眶を紅くして、目で喜んで、また頭を打ち振った。

「や、殿下もこれを召しあがったんだな。」と、私も恐縮した。

「ええ、奉呈しました。それにお扨従の武官たちにも出したのでした。そのおさがりです。」

「いい時に来あわせましたな。ひとつ戴きますかな。」とAさんはピシリと箸を割った。

「乾杯、乾杯、さあ。」と立ってミルクのカップを私が差し上げると、

「天皇陛下万歳あい。」とAさんが太声ふとこえにどなった。

「皇后陛下万歳あい。」

「万歳あい。」

「摂政宮殿下万歳あい。」

「皇太子殿下万歳あい。」

「万歳あい。」

そこで、また、

「羊の蒸肉万歳あい。」と私が叫んだ。

「さあ、このミルクだ、搾り、搾りたてのミルク万歳あい。」

「搾りたての、あつはつはつ。」と庄亮が哄笑すると、「や、万歳、万歳。」と軽く早口に、鼠の縮しまぢみ縮の、尻端折の、メリヤスのズボン下の、黒兵児帯へこおびの、腰手拭の、それがあつはつはつで掛けてしまった。そして、

「これはすばらしい。このサラダも万歳だ。」

「ほんとだ、これはフレッシュだ。しゃきしゃきする。」

緑のちりちりした葉に雨がいつぱいつぱいしている。そのサラダは全く地面じべたから湧き出た滋

味そのものの新鮮さと気品とをひるが醸ひるがえている。

「お乳をかけましょうか。」

「いや、これで結構、ついでにその泥のついた火焰菜も。」と私が笑うと、

「あつはつ、甘いよ、そりやあ。」

「甘くていいじゃないか。僕はこの頃だよ、詩を作る時には、きつと砂糖を嘗めるよ。」

「やつ、こりや、初めて聞いたね。君が砂糖を。」

「おかしいかい。」

「おかしいとおお、それはお酒でございましょう。」

「酒はきらいだ。」

「あつはつはつ、そうでしょうとも。」

「だがね、砂糖を嘗めるのはほんとだよ。頭が緻密になっていい。疲れが直るよ。だから、紅茶にドツサリ入れて何杯も何杯も飲む。」

「驚いたね。」

「酒は好きだが、酒を飲んだら僕には詩も歌もできないね。小唄ぐらいはどうだか知らないが、どうしても観照に罇ひびが入るね。慷慨激越の詩ならとにかく、精確な写実をやる時は

酒に酔った感覚では駄目だ。心は鏡のように澄んでいなければならぬからね。それでも書ならば陶然として書き飛ばすがね。無慾恬淡てんたんだね。とすると歌なその時は少々固くなり過ぎるかも知れないな。もつとも書はどうでもいいと思う気持ちがあるからだが、詩や歌は本芸だとしているからね。酒の時はまた酒だけでいい。でないとな酒の美德を傷きずける、
とこうなる。」

「やつぱり、酒のみだよお。」

「いいさ、だが、甘いものもやるよ。」

「じゃあどうぞ、お砂糖をどつきり。」と技手君が砂糖壺を差し付けた。

「ありがとうございます、いただきますよ。それじゃミルクをもう一杯。」

これはうまい、濃厚だ、実につめたい、「おい、庄亮もう一杯やれ。皆さんどうです。」
となる。

「よかろう。だがいいかい、そのお。」

「かまやしないよ。」で、「いくらでも搾れるでしょう。」と、すこし顔が紅くなる。

「よいしょ。」と医専のTが声を掛ける。

庄亮、「砂糖といえぱ、俺はもう閉口閉口。何だろう、そおれ、千葉から印旛佐原へか

けて、本党は親父の地盤だろう。去年の選挙の時なんだがね。俺たちは、そのお、朝の暗くれえうちから、草鞋わらしばきの尻端折で、吉植です、ええどうかよろしく、ええどうかよろしくさ。あつはつは、やりきれねえ、やりきれねえ。だが、じつは半分は歌を作つてあるくんだからおもしろい。それこそかまやしねえ。山路などにかかるてえと董すみれが咲しいてる、四しじゆ十雀うがらが鳴ういてる。廐うまやの裏でも通りかかつて、屁でもプツと落すと、馬がコトリとやるんだからね。きまりのわるいのわるくないの。」

「よくやるんだね、君は。だがお砂糖はどうしたい。」

「そのお、お砂糖がア、問題なんだね。それ、どうせ印旛沼だ。あつちに一軒、こつちに二、三軒だ。一日がかりだアね。とう、やつと尋ねあてると、吉植です。それはまあ御鄭て寧いねいさまに、さあどうぞ、さて、そこで砂糖を。」

「砂糖を。」

「お手をどうぞというから、それ、右の手を出すと、お砂糖さ。こいつはたまらねえ。だが、そこは神妙に、ありがとうございます。厭な顔でもして見たまえ、何だ吉植威張つてやがる、俺ら百姓だがアとなる。そこで一票フィさ。仕方なくなく嘗めるんだ。あつはつはつ。それがまたそのお、次から次へとそうなんだからね。掌はベトベトする、口は甘

つたるくなる、胸はむかついてくるしね。悪く行き合せると、田舎の事だから牡丹餅ぼたんもちをこしらえてる、餡粉あんこの草餅を揉んでる。まあまあ、どうぞお一つ、それやアお一つ、てこ盛りで、勧め方があくどいからね。それに野天のてんは暑いし。」

「あつはつは。」とAさんが笑い出した。「それはお苦しい。」

「ええ、そのお、こう咽喉元まで詰め込んだやつを、正直に、や、もう真平まっぴらとでもいおうものなら、それ、また一票ファイとなる。ポロリポロリと涙がながれる。そこへもつて来て、お隣りへ廻ると、またお砂糖。親父を代議士に持つんじやねえ。子泣かせだよ。」

「なるほど、そう一々お砂糖をお嘗めならなくとも、どうにかなりそうなものですね。」

と場長さん。

「いや、後で気がついたんですがね。そのお。」

「いつも後で気がつくんだ。」

「待ちたまえ。そこで、と。そう嘗めてばかしじややりきれねえ。で、嘗めたふりして、こうそつとふところへザラザラザラさ。秘伝だね。だが、こいつも困ったよ。内ふところがそれ汗まみれだろう。ベトベトする、くつつく。とても気持ちかわれえ。」

さあつと驟雨が走つて来た。

驟雨は樹林の前、牧舎の裏ほど白く白くその雨あしを際立たせて、一齐に騒めき慌て出した緬羊の円い円い円い背の重なりを、たちまち模糊たる霧煙の中に引き包んでしまった。めう……めうおおお……めう……めう……めうおおお……

それこそまた濡れ鼠になって、向うの向うの庁舎の方へと、いっさんに駆け出す私たちであった。

*

大陸的な樺太の八月の驟雨である。いかにそれが異郷風の壯観であったかは想像してくられたまえ。

私は眺めていた。庁舎の押上げ窓の硝子を透かして。

目も彩な花壇の紅が、紫が、雪、白が飜った。雨の飛瀑が襲来した。

フィルム。フィルムの急速度の線、線、斜線、

前面の菜園が。——青黍、もち稗、花椰菜、火焰菜、トマトが、南瓜が、ああ大蕪が。

すばらしい、すばらしい。雨だ、音だ、銀だ、ああ、緑だ。霧だ、霧だ、霧だ。

亜麻が、ライ麦が、燕麦が、夏蕎麦が、菜の花が、ああ、また大麦が。蝶だ、ああ、光った、乱れた。たたきつけられた、急角度に。

濛々もつもつと、隠見する遥かの白樺、たも。ああ、榆、ばつこ楊。家、家、家。見渡すかぎりの牧草。

や、汽車が来た、紫の煙、煙。

「あ、彼処あそこです。露西亞人のパン屋の家は。」と場長さんが、Aさんの話の途中で立ち上った。

先ほどの若い技手が、熱い熱い番茶を卓上の茶碗に注いでまわった。

「此方こちらにも露人がいますか。」と私は振り返った。

「ええ、一、二家族居ついでいますかね。」

「何をやって暮らしています。」

「パンを焼いたり、牧畜をやったり、それはおとなしいものです。」

「聖代の徳化にうるおっている訳でさ。ありがたいもので。」とAさんは敷島しきしまに火を点じた。

「白系の良民ですな。元は北樺太にいたのですがね、バルチザンの残党や赤化の無頼漢ど

もの脅迫から、とうとう堪えきれなくて南へ落ちのびて来たのです。気の毒なものですよ。それでも此方へ来てからはすっかり安心して、日本はいいといっています。もつとも、露領時代からの住民もいます、丸太式の小舎に。」

「校倉風あせくらのでしょう。あれはいい。豊原のはいり口でも見かけましたが。」

「いや、豊原には旧露西亜人街がありますよ。もつと揃っています。」とAさんが頬杖ついた。

「それはいい。ひとつ見に行つて見ようか、吉植。」

「うむ、いいね。それからそのお、ツンドラ地帯というのは。」

「幌内ほろない川沿岸の一円の地帯で、つまり蘚せんたい苔類の堆積で深い幾段もの層を成しているのですね。下層は土に化したように、こう黒く、や、これがそれです。」と場長さんは後ろへ、室の一隅に据えた大きな硝子戸の長方形の棚を指さした。

なるほど、下部は黒く、中部はやや褐色に幾段もの脈がついて、上部は黄や青の苔の、そのツンドラの断層面がそのままそっくりその中に飾られてあつた。

「なんですよ。そのツンドラ地帯にはフレップという紅い果みの生る灌木が密生していますね。それがフレップ酒の原料です。まだですか、紅い酒ですが。」Aさんは、そして微

笑した。

「フレツプ酒ですか。昨夜一寸やつて見ました。甘いんですね。」

「でも刺戟は強いでしょう。」

「え、あれはアルコールに色をつけたんだとばかり思っていました。あまり紅いんですからぬ。」

「や、生粋の樺太葡萄酒です。」

話はそれから航海中の出来事や、横断のパンク自動車、逢坂の後家さんの安来節、これから廻ろうという敷香しくかのオロチヨンギリヤークの生活、海豹かいひょう島の噂に移った。

雨がまた一しきり窓硝子をたたいて飛沫ひまつを散らした。

ガランとした白い一室である。

「これはいい、庄亮、踊るにはもつて来いだな。」

「あつはつ、やるかア。」

「でも歌えまい、君には。」

「あつはつはつ、歌はちよいと、そのお、困るがね。」と首を竦すくめて、

「それでも何だよ、踊るぐれえなら、お弟子格でやれるよお。」

「T君どうだい。踊れるかい。」

「何です。伊那ぶしですか、家庭踊でしょう。」

「田辺さんの家庭踊じゃないさ。本場の伊那ぶし。」

「踊れますとも、僕はこれでも信州人ですからね。」

「や、それは失敬、だがもう僕は酔っぱらったよ。」

「お砂糖にかい。」

「雨にだ、ほら。」

外は濛々とした霧けぶり、銀と緑の驟雨、驟雨、驟雨、

あ、模糊として、なおかつ白い白樺の遠景。

「さあ、諸君踊ろう、踊ろう。静粛に。」

音は走る。

夏は走る、走る、走る。

イワンの家

雨はまだ激しかった。

緑である。白しろ茶ちやである。黒である。濃こい鼠ねずみである。そうした自分たちの、または農

場から借物のレインコート、雨合羽、軍人マントの一行五人が、案内の技手君を先きに立てて、全くの濡れしずくになつて飛び込んだが、其処がイワン・クリロフの家の入口であつた。

「おいでかね。」

内では何やら答える声があった。

ずかずかと技手君ははいつて行つた。私もみんなの後から、蝙蝠傘こうもりの雫をきりきり、そのままで躓ついて上つた。もつとも雑草の離々たる原つばを横切つて来たので、私たちの泥まみれの靴は綺麗に拭かれていた。

頭の禿げ上つた乳つぽい赤ら面づらの、眼の柔和な、農民風の五十男の露助ろすけが、何か羞恥はにかんだような驚きと親しさを見せながら、立ちあがると私たちへ笑いかけた。ペチカの前にで

も踰かんでいたのらしい。濃い藍色の労働服を着ていた。横から見たら首の根つこが鼠ねずの裸は児だかこのような紅べにいろをしていた。毛むくじやらの両手だ。

技手ていずが何か手真似まねで戯ふざけた。そしたら露助ろすけが、またしゃつ面つらを一層赤くして、「あつはつはつ。」と笑った。

「まだ日本語が話せないのです。」と技手が私たちを振り返った。

「何という姓ですか、この人は。」と一行の誰やらが訊いた。

「クリロフ。そうだったね。」と技手が眼で笑った。

「クリロフ。」

露人もまた眼で笑った。

何と素直で善良なロスキー気質であろう。おおまかで如何にも寛かん々かんとした無智。

クリロフの家は樺太における露人の住居特有な校あせくら倉くら式の丸太組のそれではなかった。

極めて粗末なバラックで、ただ洋風に窓を劃しきり羽目板をぶつけたに過ぎない。

私は見まわした。

入口の一室はほんの六、七畳の板の間で、突き当りは物置らしい開き戸になっていた。

右手の窓下にはフライ鍋やスープ鍋、瀬戸びきの大きな杓しゃく子し、葉や罐かんなどが雑然とぶらさ

がつている、これが台所だ。

セメントのペチカは右の室へ通ずる渋がちの廉更紗やすさらさのカーテンの傍に造りつけになって、そのまた隣りに、これも粗末なテエブルが一つ出しっぱなしになっていた。ほかほかと焼けかかったパンの香いがして、ペチカの焚き口には赤い火の反射が幽かにはみ出していた。

外にはまだ雨の音がしてた。

「や、パンだな、焼いてるな。」

というと、イワンがふつと私の方を向いた。

指でちよいと、ペチカの方を、そして私が茶目ると、赤いおやじさんがぼんぼんと片手でその首根つこを叩いた。

「あつはつはつ。」

医専のMとTとがカメラを胸へ、そつと俯うつむ向いて、前へ出ると、

「ジャメジャメ。」

慌てたパン屋さん、大きく両手を振って、すぼりつとカーテンを後向きにもぐりにかか。それをどかどかと追って、みんなが這入って見て、また見まわした。其処そこが食堂、い

や、寝室らしくもある。木造りのほんの型ばかりのベッドが、奥への通路の赤い更紗のカーテンの傍にたった一つ、ベッドには白い藁蒲団に白い枕に白いカバー。

「簡素なものだな。」

だが向つて右手の硝子窓には黄の赤い蘭科の花の鉢が一つ、大きな素木しろぎのテエブルの上に載せてあつて、その怪しげな生物が、またこの大陸風のこの雨の日の外光を思いきり吸いふくれていた。

燃えあがる焼点。

「ツイトーフ。カムチャツカ蘭です。」

と、技手が私に答えた。

大きなテエブルの両側にはベンチ風の薄汚れた木の腰掛が一脚、二脚、クリロフの一家はここで、互に向い合せて、さて、スープの鍋底を大きな杓子でひっ掻きまわし、パンをもぎり、レッドワイン赤酒を、また牛の髓骨をしゃぶるらしい。そこでベッドは赤い爺さんのにきまつた。たぶたぶと大きくて、長くて、そしてぴたりとくつつけた、もえぎ萌黄模様の壁紙には染みがある。

その上部にこれはまた浅草物の石版画。

何であろうと、仰いで見ると、これは驚いた。遼陽占領奥軍大奮闘の図、竜宮風の城砦が今まさに炎上しつつある赤と黒との凄まじい煙の前面で、カーキ服の銃剣、喇叭ラッパ、聯隊旗、眼は釣り上つて、歯を喰いしぼりの、勇猛無双の突貫突貫、やあ、万歳万歳のあつちこつちでは黒のコサツク帽の、緋の上衣の、青ズボンの、髯むじや露助の助けて助けてに真向、拝み討ち、唐からたけ竹割り、逃げる腰から諸手突もろてき、ウーラーウーラーも虫の息でへたばる背をば乗り上げ、蹴立てて躍進、伝令使だ。

「ほほう、露助滅茶敗けじゃないか。」

クリロフのおやじ、呑気なものだ。あつはつはとまた笑つて、しきりに手ばかり振つて
いる。

「ジャメジャメ。」

と、奥のカーテンをまくつて、またのろくさとかぶつて消えたところで、どこどかと私
ちだ。

そこで後から躡ついてはいると、また見まわした。

十七、八の金髪の娘が一人、向うの隅っこに身をひそませていたが、何か青い毛糸の編
針を動かし動かし、キツと此方こちらを見た。瘦せぎすの鼻の高い、それでも飾らぬ野生の美し

さはその眼にその頬に蓄つぼんでいた。

そこで、みんながたじたと化した。

ふつと後ろを振り返ると、私は顔から火が出そうになった。

声もせぬ幽かな姿、

黒い頭巾をかむって、黒い服をつけて、それはまことに白はくせき皙の、髪も眉もまつげ睫毛も、その太い鼻も、頬の額の深皺も雪のような、何か品のよい老婆が、壁際の白いベッドに白いクツションを高く、下半身に白い薄手の毛布を引きあげて、そうして白い両手をその上に組み合せて、じつと此方を見入っていた。

何という無作法な旅ごころで私たちはあつたらう。私はまだはしや燥いでる一同の後ろから、この不意な、そして無遠慮な異郷人の闖入行為を立ちすく竦んで恥じねばならなかった。

閑かな窓硝子からの光。濡れしずくの硝子の内側には紅べにや赤の草花の鉢を一鉢、小さな脚高の花卓の上に置いたのが、そのまわりが鮮新な、しかもかえってうら寂しい気分にもつてもいた。

白皙の老婆、（そうだ、もう八十にもとどきそうな）は私たちを見ると、幽かにその白い睫毛をしばだたいた。そうして、何の声をも立てなかつた。

諦めはてた老いの心の姿をまさしく私は見た。

老婆の青い瞳は深かった。

どうせ彼女らは無智な農民には違いなかった。恐らく本国の土地もかつて踏んだこともあるまい。沿海州から北樺太へ、北樺太から国境を越えて、どうにかバルチザンの残虐から逃れおせたものでもあろうか。二十何年か前の祖国と日本との戦争なども無論知っていそうにもなければ、ロマノフ家の稜威みいつを一朝にして衰えさせた、かの大敗北の噂話でもあるいは聞いたこともなかったであろう。だからこそ遼陽占領日軍奮闘の石版画の額などを掲げて安心しているのであろう。流れ流れて日本の領土にまで移り住んで、そしてまだまだ住みついたというでもなく、言葉も通じなければ、かろうじてしか日常の糊口ここうすら凌げないという一家である。日本の国と人とに今はひたすら取り纏すがってはいるものの、由来小悪こわるで狡くて、勝っては傲おごり、弱みにつけこみやすいのが日本人のある階級の特性である。善良で無智と見ると何処までも層かさにかかる。だから果して末々までも頼られるかである。

老婆は諦めはてた心の幽かな姿で、幽かに白い睨毛を合せている。

その老婆の枕のうえには、私は見て度つましくなった、金の十六弁の菊の御紋章が光り、
今きんじょう上皇后両陛下に摂政宮と妃殿下の御尊像が並び立たせられた石版刷りの軸が一本、

まことにありがたそうに掛け垂らしてあった、そのそよともせぬ閑かき。

と、また、向うの壁と壁との隅、その高い上部にぶちつけた三角の小棚には何が恭々しく飾られてあつたか。

ニコライ皇帝、

その皇后、

手札形の 真鍮縁しんちゆうぶちのその御真影こそはあわれであつた。

私は黯然とした。

「撮影さしてください、ね、いいでしょう。」

医専の美少年のMがしきりに娘のナタアシャ（そういう名だったと思うがちがったかも知れぬ）へせびつっていた。ナタアシャは顔を赤くして反射的に編針を持った片手をうち振っていた。気の少し強そうな、だが邪心のない素朴さが彼女の瞳に見えた。

どかりと、ペチカの方で、テエブルに何か投げ出す音がした。

黄がちの鼠の鳥打帽に鼠の服をつけた、眼の白っぽい、鼻の高い十五、六の少年が其処には突つ立っていた。何と長い脛すねだろう。

呼び売りの露西亞パンの函はこを紐ながら首からはずして、快活に此方を見たところだ。

「帰ったね。」

と、技手が声をかけた。

少年はただ笑った。

それから私たちもペチカの前へ引き帰すと、娘のナタアシャも蹠いて来た。馴鹿トナカイのよ
うな軽い身振りだ。

「君の名は何というの。」

「イワン。」

「そうか、イワン、いい名だね。」と私は微笑した。

いかにも露助らしい名だと思えた。イワンの馬鹿ということがある。だが、この少年な
かなか敏捷はしつこい。

「君、ここにイワンと書いてくれないか。」

誰かがそのノートを突き出した、鉛筆といっしよに。少年は奪うように手に取ると、窓
際へ寄つて、何か走り書きしたと思うと、今度は急に擲たきつけるような恰好をした。

「ナタアシャ、君もひとつ。」

ナタアシャはほつほと笑った。そうして頤を突き出すと、叱るような眼をした。それで

も面白そうに鉛筆の心を嘗めた。金髪がふさふさと揺れた。

「小父さん。」とまたMがやると、

「ジャメジャメ。」で、手を振った。

「じゃあ、撮らしてくれないか。」

爺さん、いよいよ赤い顔をして、また首根っこを叩いた。そうしてイワンとナタアシヤと自分とを指ざした。

「じゃあ、みんなでいいじゃないか。」

「ジャメジャメ。」で、また尻込みしてしまう。

「じゃあ、家を映そう。」と私たちが外へ出ると、今度は硝子窓を開けて、内からさも映してもらいたそうに赤いにこにこ面で差し覗くのだ。

イワンの顔も出た。

ナタアシヤの顔も出た。

「なあんだ、じゃあ、並びたまえな。や、そうじゃないんだよ、小父さん真ん中だ、そら、そのとおりとおり。」

医専がひとりで、雨だまりの草っ原からうれしがっていると、赤い露助のおやじさん、い

よいよ固くなって、それこそ直立不動の姿勢になる。そうして物珍らしそうな、また、極きまりの悪そうなおどおどした眼つき。

なんと善良な露助だろう。

なんと無邪気なのつぼ。

なんと素朴な。

恐らく、生れて滅多に写真など撮ってもらったこともなかったかと思われた。

カチリ、

「よし、済んだ、ありがとう。あ、もういいんだよ。」

「写真送るか。」とイワン。

「送るよ。」

イワンがナタアシャを突き飛ばしそうにした。ナタアシャはイワンの肩を撲うった。

雨はもう霽あがりかけていた。

すかんぽ、すかんぽ、紅更紗。

*

小沼の駅へ帰る途々も、私はクリロフ一家のことを考えていた。

かわいそうにみんなが気が弱くなっている。郷に入れば郷に従うのが最も滞りがなくてよいかも知れぬ。しかし果して彼らはいつまでも今のパン屋で暮らしてゆけるものか。たいてい信じがたいとは感じながら、強いても取り繕わないでは安んじていられない流浪者の境遇こそはまたとなくあわれに思われる。といつて赤化の北へは帰れない彼らである。

周囲の日本人に対する複雑した異種族の感情を抑えて、ともかく生きてゆかねばどうにもなるまい。それともまたヌーボーの露助のことだ。私が考えるほどのものでもないかも知れぬ。案外に野呂間で、今日を今日として悠々と楽しむ心も一面には持つていそうにも思われる。だが、あの子供らしい「ジャメジャメ」にも何かしらの暗い哀調は籠っていた。

通りへ出ると角に呉服屋兼小間物店があった。私は麻のハンカチーフを買った。連れの庄亮はゴム足袋にゲエトルを買って、穿くと、ぐるぐるとその片足に巻き出した。

店には火鉢が二つ、火がカンカンとおこしてあった。樺太は八月でも雨のふる日はうそ寒い。

「あのクリロフという露西亞人の家がありますね。」

「へい、ございます。」と痩せぎすの主人が答えた。

「あれはどうにかやっていますか。」

「ええ、パンを焼いていますですが、相当にやってゆけるようでございますよ。」

どうしたものか、私は主人のうしろに積み重ねた紺足袋の真鍮の小ハゼが目しに沁しんで仕方ながなかつた。

駅へ行つて見ると、豊原行の臨時列車はまだ仕立中であつた。

朝早く大泊から東海岸の栄さかえはま浜はままで直行して、またこの小沼まで引き返した観光団の

一、二等客は、その合間に雨中を農事試験場の参観に出かけたということであつた。

待っていると、ぽつぽつと帰つて見えた。

臨時列車も野天のプラットホームに這入つて来た。

私たちは乗り込んだ。

だが、一行の全員を収容するまでには、なかなか間がありそうに思われた。

「露人の家がありますよ。」と教えると、「や、それは。」と退屈まぎれに飛び出す人々もあつた。

見える、見える、あのカムチャツカ蘭の窓が。

雨は霽りかけたが、まだ露人の家のあたりの空は薄鼠色にうち湿っていた。いや、もう日が暮れかけても来ていた。

「や、来た来た。」

と、誰やらが叫んだ。

少年イワンであった。首から黄いろい紐を、前の函には、それこそふかし立ての露西亜パンを山盛りにして、活潑に改札口を出ると、ちよいと横向きの白い頸すじを見せた。

レールが間に四条。じつくりと枕木も小砂利も濡れて、右も左も椴松の林が遠い、遠い、遠い。

「あれです、露西亜人の息子は。」

とても物好きな観光団です。それはとういので、それに少々腹も空き加減の、恰もよしというところで、乗降口からレールへ飛び下りると、また駈け上って、

「おい、パン。」

「おい、パン。」

「おい、いくらだ。」「おい。」で、「時に真つ黒に群ってしまった。」

イワン少年の片手の銀、銀、銀、銀。

瞬まく間に売切れ、そこで、イワンはまた小躍こおどりして、飛ぶように後うしろを見せた。
またやって来た。また一斉に群ぐんった。

万歳、売切れ。

ピーと汽笛が鳴った。

イワンはぼかんと向うのプラットホームに突っ立っていた。胸の空から函はこを反らし気味に。
「さようなら。」と此方こちらで帽子を振った。

イワンは一寸ちよっと顔を赤くした。そうして特に見知り越しの私たちの眼と眼とぶつかると、
莞爾かんじとして片手をあげた。

「さようなら。」

そしてまた鳥打帽をつかんだ。そしてまた顔を赤くして笑った。

振ってる、振ってる。

白樺しろかば、

白樺、

白樺、

汽車のカダンスが速くなった。

豊原旧市街

見えた、見えた。露西亞^{ロシア}人街だ、ほら、

丸太小舎だ、

あ、柳、

窓、

窓、

窓、

あ、赤だ、白だ、紫だ、花だ、

素敵だ、

流れだ、^{あひる}鷺だ、

おや、鶏だ、

さあ降りようと、私たちは自動車から早速に飛び降りた。

朝の八時頃、まだ昨日の雨の名残がどこやらに薄^{うっ}すらと籠^{かご}って、しつとりとしたいいい香

気の空気であつた。

大通北一丁目二丁目三丁目四丁目と出て、やはり北へ向つた幅広の白い一筋道が、元露西亜人の住居じゅうきよしたという旧市街ウラジミロフカへの往還である。私たち二、三人は博物館の参観、公会堂での観光団歓迎会へ臨む前のほんの小閑をぬすんで、その旧市街見物と出かけたのであつた。

橋を一つ、また一つ、それから、やあ、此処だ此処だとなつた。

道の左側にはささやかな流れがあつた。私はその流れに沿つて、また立ち留つて見入つた。

まったく校倉式の丸太組の露西亜人の家々は簡素で、また幽雅で、しかもいい寂色さびいろに古びていた。

純粹なものにこそ真実の意味の美しさがある。日本の古い百姓家やにしてもその茅屋根の勾配ひさしといい、張り出しの廂ひさしといい、土間すすといい、煤すすびた大黒柱すすといい、外庭すすといい、いかにも日本固有の雅味がある。

それにしても、この原始的な丸太組の壁は、また飾りのない急勾配の板屋根の形は何と云つていいだろう。硝子窓の割り方もいかにも素朴で、それにどの家のどの窓にも何か色

彩の濃い淡い草花の鉢を見せてある。流れに沿うた裏口のポーチも板張りの平面で、それに二、三段の無造作な周辺、水ぎわの緑の草、盛りの紅葵、あるいは向日葵ひまわり、様々の夏草の花壇、柳の根といった風である。空には奥ゆかしい廂の上に枝垂柳しだれやなぎが垂れている。こうしたのが露人の百姓家だと思つと、この頃の新開地の日本家屋の醜さがつくづく不快でたまらなくなる。樺太の原生林に、露人はその始めまったくいい生活をしていたにちがいない。

私たちの第一に訪ねた家はことに廂が深かった。イワン・チャハンスキーと標札が出ていた。無論農家であつた。主家おもやつづきに牛舎があり、中庭を隔てて、一層古びて頹れかけた茅舎かややの穀物納屋もあつた。その間の庭の突き当りに細丸太の木柵があり、その外は野菜畑やクローバーの原つぱになつていた。

鶏が、その庭に、純日本種の鶏や矮鶏チャボがココココと求食あさり求食りしてあちこちしていた。それを見て私は何とない微笑の頬にのぼるのを禁じ得なかつた。

「鶏が遊んでいる、日本の鶏が。」

別に不思議でもないことながら、露人の住居すまいだけに私には妙に珍らしく、また親しく感じられたのである。

私はその廂の下へはいって案内を乞うた。

戸口は開いてあった。

内は二室ぐらいしかなさそうであつた。その取つつきの八畳ばかりの板の間の中央に、何か色の交つた白地の頭巾をかぶつたお婆さんが一人、古びた素木のテエブルしんぎに大きな木の盆を据えて、黄ばんだ麦粉をしきりに両手で捏こねかえしていた。そのお婆さんが眼で笑つてうなずいたので、私たちも這入つて行つた。うなずいて目礼して。ただ言葉が通じないかと思つたので、ただ黙つて笑つて見せた。向うでもきさくに笑つて見せた。

川沿いの窓際にはやはり明るい草花の鉢を置いてあつた。その硝子戸の外にも紅玉葵とろろあおいや黄蜀葵とろろあおいが咲き盛つていた。

外庭に向つた一つの窓の前のテーブルには何か白いきれが拵ちゆうばあげられてあつた。洗つて乾かした洗濯物らしかった。中ちゆうばあ婆が横向きに木の椅子に腰かけて、何か継つぎ剥はぎしていた。これも明るい頭巾をかぶつていた。二人ともよく肥つていた。

極めて簡素であつた。

奥寄りの壁際には、これもお粗末な木のベッドが寄せてあつた。薄紅色の浮織りのクツシヨン、白い蒲団のカバー。

それだけ、

や、まだあった、白い笠の電球。

麦粉は黄色く、そうして白く輝いた。

饅^すえかかったトマトのにおいがした。

茶の赤い牡^{おんどり}鶏が一羽戸口から這入つて来た。閑かなその呼びごえ。

私たちは目礼して外へ出た。

二人のお婆さんはそれまで何一つ言^{もの}をいうでなかった。だが、温かな親しさと、幼ない桃色の上気と、軽るい好奇心と何かの反射的亢奮とが彼女たちに見えた。

牛舎は空^{から}であつた。主人が牽^ひいて出たらしかった。

雨あがりの朝の光線が、今度ははつきりと穀物小舎の屋根の影を地上に映した。

「こうした百姓家では牧場も持つていなさうですがね。」と、私は白髪の和製タートルさんに訊いた。

「や、何でさあ、最寄りの原っぱへ連れて出るのでさあ。このあたりはまだ原っぱばかりですからね。」

なるほど到る処の夏草であつた。

私たちが外の板橋へかかると引きちがいに、同じ観光団の誰彼がどかどかと踏み込んで来た。

この悪趣味の連中が、あの二人の老婆たちの幽かな半日の楽みを驚かし、あの無作法で何か憤らしてくれねばよいがと、私は振り返ると、手を振った。

「や、こりやひどい家だなあ。」という銅鑼どら声こがうしろにした。

通りへ出ると、同じく丸太組の家が、それももうよほど廃頽している軒並が向う側にも続いていた。日本人の家も交っていた。

その中に、主家おもやの外に牛舎か何かの建増しをしている露人の一戸があった。

肥った年輩の父親とその息子らしい二人の少年が、まだ骨組ばかりの屋根の上にあがって、専念に新らしい不足の垂木たるぎをぶちつけていた。父親は鼠の鳥打帽に藍色の労働服、息子たちは白っぽい鳥打帽に白のシャツに白ズボン下、夏はまことにその屋根の上の新材木と軽装の三人に光っていた。

ところが、いつの間に群たかったものか、赤や白の薔薇の徽章を浴衣の襟、あるいは背広のボタンの孔に挟んだ観光団の数十人が、往来から盛んにカメラを向けて騒いでいた。

それのみでない。ずかずかとその主家にはいり込み、納屋をのぞき、牛舎へ廻り、ほと

んど傍若無人の限りを尽していた。

屋根の上の露助は、初めは不愉快らしかったが、まだ黙って知らぬ顔で見ている。それがいよいよ一斉にその足元からカメラを差し向けられると、堪えかねたか、赤い顔して、思いきり大きくその片手を振りまわした。それでも幾十のカメラはひるむ段でない。

パチパチパチパチパチパチパチである。

や、まだ、まだ、――

「写真泥棒。」

と、一人の息子が憤怒を飛ばした。純な少年のこの憤怒はまた、彼の白面を朱のようになななにした。

と、父親^{てておや}の露語の怒声がまた極度に爆発した。

下では、一時たじたじとなったが、

「なんや、あれが馬鹿野郎いうのかいな。」と一人が、ひひと笑うと、連れて誰^{だれかれ}彼がまたどつと囃^{はや}し立てた。

上ではもう狂気のように逆上した。

「泥棒、写真泥棒。」

「帰れ、くそ、畜生ッ。」

「がっがっがっがっ、ぶるぶるぶるッ。」

下では

「いよう、七面鳥。」

あたかも、この時、粗帽粗服の一高生らしいのが通りかかった。

「やれ、やれ、負けるな。」と上を向いた。そうして、「一体何だ君らは、帰りたまえ、乱暴も程がある。」

と立ちはだかった。

「やれ、やれ、俺が承知しねえ、くそッ、てめえたち何だ、何しにうせやがった。」

隣りから日本人の老百姓が飛び出した。息をきってふるえている。

「しつかりやんねえ、××スキー。」とまた一人の日本の百姓が躍り出して来た。

「止よしたまえ、諸君、止よしたまえ。」

と私たちも手を振った。何と恥かしいことだ。

「此こいつ奴ら、朝つばらから入れ変り立ち変りだからたまらねえでさ。無作法過ぎまさあ、それに勝手に家の中は荒らす、写真は撮る。いくら何でも辛棒がしきれませんや。」と、ま

た一人の日本の百姓が、私たちに訴え初めた。

まったく、弱者と見て傲り^{たかぶ}、群集を頼み、旅先を茶にして、彼ら観光団の俗悪者は不法を不法と思わず、無礼のありつたけを尽したに相違ない。無邪気といえば無邪気かも知れぬ。しかし、こうした性情は日本人の一つの特性ではなからうか。だが、また何と親しいウラジミロフカの街の日本と露西亞の百姓たちであろう。

私はしみじみと眼がしらが熱くなるのを覚えた。

「写真泥棒ッ。」

「しつかりやれ、アリョーシヤ。」

樺太神社

十六日薄暮、私は二、三の連れと、この豊原の東郊は旭ヶ岡の樺太神社に詣でた。しつとりとした雨後であった。坦々とした幅広い道路を、いかにも自動車のタイヤが軽く親しく滑って行った。大鳥居の前で下りると、清楚な白い石畳の道を、また石の段を真つ直に、私たちは登って行った。その両側の土の色も芝生も落葉松の林も石燈籠も、見るものがことごとく雨をふくんで、また何ともいえぬ緑と白との涼しさをしたたらしていた。ことに後ろのなだらかな丘陵の緑は明るかった。私はつくづくと思つたが、この八月の樺太の爽かさは、とても内地に見られない色と香気との新鮮味を持つている。これは驚くべきものだ。展望がまたひろびろとして、しかも清らかで新らしくて、まことに植民地の神苑だと感じられた。祭神は おおくにたまのみこと 大 国 魂 命、おこなむちのみこと 大 己 貴 命、すくなひこなのみこと 少 彦 名 命 の はしら 三 柱 だ。神殿の前に立つと、私たちは皆濡れしずくの麦稈帽を脱とつた。

神殿はもう薄紫の暮色がたちこめて、奥殿に何か幽かに光るものが神々しく拝まれた。ほの青い装束のけはいもした。

「上つて見ましよう。」と一人がいった。

私たちの靴の紐は湿つて解きにくかつた。やつと解いてから、木の階段を上つた。

烏帽子姿えぼしの神官が、神前の供え物を、その白木の三宝を一つ一つに片づけていた。

奥殿へ通ずる扉を、それから閑かに閉して、薄ものの緑の、昆虫の翅はねのような装束をまた幽かに光らして下つて来る神官に、また一人が呼びかけた。

「あの扉は何と申しますか。」

「中門です。」

まだうら若い、眼鏡をかけた人であつた。

その人は黒い烏帽子を前かがみに、私たちの前に、やや斜めにひざまず跪いて、審いぶかしげに、また親しそうにこぢら此方を見た。

「大国魂命と大おおくにぬしのみこと国主命とはちがいますか。」とまた一人が訊ねた。

「はあ。」

「としても、やはり出雲系の神様でしょうな。植民地の祭神はよくそうのようで。」

「そうだよ、君、植民政策としては最も当を得ているかも知れん。」とまた一人がいった。

「だが、出雲系と天孫民族とはどうしても僕も同種属ではないと思う。素盞すさのおのみこと男命から

して併合政策として、日本神話の大立物おたてものに祭り上げてしまったものらしいな。」

「そういう見方もありますね。」

「だから、どうしても天照大御神あまてらすおおみかみを中心に、お祭りするのがほんとうでないかと思う。植民地にしても、日本である限りはだよ。」

「台湾は。」

「北白川の宮様を合祀してあります。」

「なるほど。」

ひっそりとした四辺あたりであった。蕭やかな、光の外しめの光と、影の中の影とが相纏あいもつれて、それらが物の隅々にまで柔かにうち燻くすんでゆきつつあった。

このほのかさは、この和御魂にぎみたまのかおりは、また荒御魂あらみたまの融和は。この神々しさは。この幽かすけさは。

いい時に参つてよかつたと、私は思った。みんなもそう思ったにちがいがなかった。

凡すべてが、安らかな、また物がなしい自分たちの息づかいを聴いた。

だが、これが樺太であろうか。この親しさは、はるばるとした旅情ともちがう。

きょうきょう。

「あ、あれは何です。」

「ほととぎすです。」と烏帽子が空を仰いだ。

空はまだ幻燈のように青かった。

「あ、あの木は。」

「ななかまどと申しています。」

そのななかまどは紅葉しかけていた。

流石に秋の早いのに驚かれた。

豊原よりの消息

Y君。

この豊原、旧ウラジミロフカの夏はいかにも高原地の初秋らしい風の涼しさを見せている。ここらの丘陵は今が季節の新緑を輝かしている。それなのに早や紅葉しかけた木々もある。

観望の壮大なことは驚く。それに市区の井然たることは、未だかつて内地の都市に見ぬ鮮かさだ。札幌はこれ以上に美しいという話だが、これは帰りの楽しみにして置こう。

旭ヶ岡の樺太神社から瞰下みおろした豊原の夜景はまるで緑野の中の正しい灯ひの碁盤ごばんめ目であった。

私は南国人だ。北方の陰暗、深刻、そうした私の芸術に欠けているものをこそ求めて、私はこの北方に来ることを楽しみにしていた。が、来て見ると、案に相違した。あまりに新鮮で爽快過ぎる。樺太はやはり冬くに来べきところだと思ふ。私はここで童謡はできるかも知れないと思えるが、北国風ほっこくの民謡は到底作れそうにもない。夏は南国だ、熾烈しれつで、

あの深刻な惱気と棄^{すて}ばちの気分は。

この八月の豊原風景はまさしく貴公子の緑の雨外套^{レインコート}だろう。

だが、この日旅館の女中はどうしたというのだろう。この豊原一の宏壮な旅館だからかとも思ったが、まるで芸妓^{げいしや}のような美服を著、粉黛^{ふんたい}している。内地の何処の旅館に泊ったってこんな事はない。一々嬌笑する。この家の旦那というのは内地の代議士だそうだ。

それから庄亮君が名刺屋を呼びつけたよ。法学士、鉄道会々員、新聞同盟外報部長という肩書付きで、本宅は青山の親爺さんのところで電話番号までチャンと刷らせるというのだ。明朝までにととのえろだ。脅かすなというと、「なに、これでいいんだよ、見ていたまえ、あつはつはつ。」と豪傑笑いをしてのけた。僕も忘れて来たので、ついでに名前だけのを頼んだ。

それから洋品店に電話を掛けさせた。繻子^{しゆす}張りの蝙蝠傘三円五十銭のを、これに限る、これを買えというのだ。それで僕は買った。絹張りのステッキ蝙蝠傘などは駄目だというのだ。まったく僕にも似合わないからね。国境の安別で、ひどい吹きぶりにとうとうへし折ってしまった。

この二人が、今朝、公会堂の観光団歓迎会のすぐ後から、幌馬車に乗って、豊原の西郊

の追分おいわけという部落へ散策したと思いたまえ。僕たちは一昨日真岡おとといまわかから豊原へ二十里の原生林の横断を果したが、六度もパンクして、とうとうこの追分口から滑走してはいってしまつた。そこには紅い葵が咲き、向日葵が盛り、西瓜や鶉うずらまめ豆の花、唐黍とうきびの毛などがそよいで、それに露西亞人の丸太組の家もところどころに残っているし、異国風の実にまた新鮮な風景だつた。それに大きな長い柄の鎌ですういすういと燕麦を刈りそいでいた百姓の手つきが何ともいえなかつたのだ。で、あれをもう一度見に行こうとなつた。庄亮、あわよくば自分でも刈つて見たい意気込みだつたのだ。

幌馬車でちりんちりんだ。程よい道の曲り角で、下りると、私たちは子供のようにならぬ花畑や露助の家や農家の背戸せどなどを覗いてまわつた。それからずんずん一本道を河楊の並木に添つて、この前見た燕麦の畑まで出て見たが、そこはもうおおかた刈られてしまつて、例の長柄の草刈鎌も百姓の姿も見られなかつた。亜麻畑にはまだちらほらと可憐な紫の花が残つて見えたが、日は暑くて、耕作馬車の軋きしり一つきこえなかつた。そこで私たちは燕麦の刈り跡に新聞紙を藉しいて、寝ころんだが、雲は白いし、いい機嫌で気焔のあげつこだ。

と、庄亮が、「君。」とめくばせをした。

つい近くの道路を誰だか二人声高に話してゆくのだ。

「あれはアイヌでしょう、一人の方はよほど文化的教養を受けたアイヌらしいです。」

「あつはつはつ。こりや驚いた。」と庄亮が頭をかかえてしまった。

「おれはアイヌだとう。」

「ふふつ、おれは文化的教養を受けたハイカラアイヌかい。」

庄亮は例の鼠の縮ちぢみの棒縞ちぢみに、股引の、尻端折の腰手拭と来ているだろう。僕は黒のアルパカで、頭にはハンケチをかぶっていた。二人とも三円五十銭の蝙蝠傘だからな。それに庄亮の肩書付きの名刺だつてまだ出来て来ないのだからな。

帰りはてくりてくり歩いた。途中で日の出温泉というのが目だったので、一汗流して行こうとなつた。這入つて見ると鉄かなしぶ渋色の鉱泉で、それも沸わかし湯だった。上つて浴衣を借りると、実に薄汚なくてくしゃくしゃしている。一室に通してもらうと、生新らしい廉やすもの物の畳のにおいと木材のにおいだ。敷島をと呼んでもないという。麦酒となると、顔いっぱいに赤い湿疹のふき出た二十五、六の内儀かみさんが、おなじく赤いぶつぶつの乳房をはだけて、怪しげな赤ん坊の頭を片手で吊り気味に強く押しつけて、それでお盆に沢庵と一緒に載つけて出て来た。その麦酒も気が抜けて腐れていた。

どうにも気持ちが悪いので、そこそこに飛び出したが、いったいどういう家なのだろうな。何でも極めて閑散なものだったよ。

それから、遊廓の大通りへかかると、向うの木橋から、白い服の、そして胸高な青の袴の朝鮮の女が楚々^{そそ}として光つて来た。華魁^{わいかい}なのだ。

広っぱがあつて、それから、それから、プカプカドンドンだ。曲馬の天幕^{テント}の前には三角耳の眼の細い象の子が、赤と金との鞍掛けに飾られて、まだ初々しい灰色の曲り鼻をあげあげ客呼びしている、それと対^{むか}つて、白狐とも化け猫ともつかぬ絵看板の、「これはこのたび奥州^{けせんぬま}気仙沼は何とか何兵衛の女房お何が生み落しましたる血塊童子でござい。代^{だい}は見てのお戻り、しやい、いらつしやい。カチカチイ。」

日本という国は何処へ行つても靖国神社式の見世物で持っている。祭りや縁日といえはすぐこれだ。初めて上京した時、東京も田舎だなと驚いた事もあつたが、この樺太ではやっぱしここも都だなアと感嘆された。

それかといつてまた、先月は本居^{もとおりな}長世君が令嬢たちを連れて見えたそうだ。童謡音楽会は大入だったという。

豊原は東京の延長としか思えない。だが、ここの場末の盆踊は安来節でやるようだ。

(後略)

木のお扇子

坊や、

パパは豊原という樺太でのいちばん賑やかな町へ来ました。真岡という町からです。マウカというのは美しい波の上ということだそうです。その美しい波の上から、坊やの好きな自動車に乗って、二十里の山道をブウブウブウと飛ばして来ました。五度も六度もパンクしました。それでも転覆はしませんでした。馬の背たけよりも高い落の林もありました。アンデルセンのお話にある白いお家の蝸牛や黒いお家の蝸牛もいました。みんなアンテナを架けて、「J O A K、こちらは東京放送局であります。」あれがよく聞こえるそうです。坊やは虎杖を知っているでしょう。小田原の山に生えている虎杖の花は薄紅くてちらちらしていたでしょう。樺太のは葉が大きいのです。それに茎が高いのです。藪のように繁っていました。

それから、坊やはよく坊やのお国はお菓子の木や蜜柑の木がどっさりあるんだといっていましたね。その坊やのお国は何処にあるか知っていますか。パパも樺太まで来たけれど、

まだ見つかりません。やっぱりママさんのところにあるのでしょね。見つかったら無線電信で知らして下さい。パパさんはこれからまたお船に乗って遠い遠い北の方へ行くのです。海豹島かいひょうとうといつて、おつとせいが黒山のようにいたり、ロツペン鳥ちようが雪のように翔けていたり、それはお伽噺にあるようなおもしろい島があるそうです。それからフレツプという紅い実やトリツプという紫の実のいっばいに生なった広い広い野っ原もあるそうです。もしかすると、坊やと同じような子供が、パパといつてその中から飛び出して来るかわかりません。篋子ことうこちゃんも来ているか知れません。

坊や、

パパは今日、この町の博物館に行つて見ました。その博物館に大きな木のお扇子がありました。棕櫚しゆくろの葉のように大きなお扇子です。そのお話をしてあげましょう。

その大きなお扇子はいろいろの木の板を紐で綴つて、お扇子にこさえたのです。その木の板はみんな薄紅い肉色でみんないいにおいがしています。黒とど、赤とど、えぞまつ、おにぐるみ、たも、あかだも、やちだも、おんこ、からふとやなぎ、いたやかえで、しらかんば、からまつ、にれ。みんないい木です。みんな樺太の山や野に生えてる木です。そ

れで、その木のお扇子を嗅いでいると、ほんとに樺太の山や野つ原がいいにおいをして動いているような気がします。

それからまだ、樺太にはいろんな木が繁っています。

どろやなぎ、ばっこやなぎ、きぬやなぎ、さんちん、にわとこ、からふとななかまど、たかねななかまど、しうり、やまはんのき、りんご、まるめろ。

まだまだ、いくつも木のお扇子がつくれます。

坊や、

博物館にはまたいろんな鳥や小鳥の剥製が、硝子^{ガラス}戸棚の中に飾ってありました。

えぞせんじゆう、えぞおおあかげら、くまげら、しめ、赤ばら、えぞやまどり、しまえなが、のびたき、かけす、きびたき、るりびたき、しぎ、うみがらす、つつどり、きんくろはじろ、かるがも、こおりがも、おおせぐろかもめ、おいらんかもめ、うみしぎ、ちどり、うのとおり。

見ていると、ほんとにみんなが生きているようです。こうしたいろいろの鳥や小鳥が樺太の山や海に飛んだり啼^ないたりしています。みんな愉快にみんなが子供のよう遊んでい

る樺太の山や海のことを考えてごらんさい。きつと、坊やも踊りたくなるでしょう。まだまだいろんな小鳥がいます。

坊や、

それからまた、博物館にはいろんなけだものの剥製もあります。

大熊、ひぐま 山猫、とらはんみよう、むささび、じやこうじか 麝香鹿、トナカイ 馴鹿。

海で泳いでいる獣には、おつとせい、あざらし、おおあしか。

おおあしか、などは熊よりも牛よりも大きい海の獣です。うわううわうとほ吼えます。

坊や、

それから、お魚では、いわな、かわかじか、かわひらめ、すなひらめ、さめ、ます、さけ、にしん、などが泳いでいます。

見ていると、まみず 真水やしおみず 潮水の中で、ほんとにみんなが生きて泳いでいるような気がします。

ほら、坊や、よくきこえるでしょう。谷川の音や、海の潮鳴りの音が。

みんなが、坊やの方へ跳ねたり、駈けたり、泳いだりして行ったら、どんなに愉快でしょう。

まだまだ樺太にはいろんな獣やお魚がおります。

坊や、

さあ、おやすみ、坊やのお国で坊やのいいお夢を御覧なさい。

とんとろ、とんとろ、とんとろとん。

笛

樺太は中知床岬の東、渺々たるオホーツク海のただ中、見渡すかぎりは円い水

平線と氷雲、

燻された反射光、

ああ、日の小さい小さい空。

笛だ。

あ、笛が鳴る。

啾唳と、起つて響くその音いろ。

何かしら薄ら寒いが、いい風である。明るいようでもりやすい日射し、照つてもまた
光り耀かぬ黒い波濤の連続、見れば見るほど大きな深いうねりである。

その中に笛の音いろが澄みつつある。

吹いているのである。誰が吹くのか、その笛の音は、ただ一色に響いている。空と海との、この焦点。

ひようひようふりよう、りようふりよう。

まさしくお能の囃子である。

私は私の船室ケビンの前に、その白い壁に凭れ気味に、籐の腕椅子によりかかっていた。

私の右にも左にも同じような籐の椅子が並んでいた。人々が腰かけていた。

帆綱の影、潮しおじみた欄干てすりの明り、甲板の板の目、錨かんのきしり、白い飛沫しぶき、浅葱いろの潮し漣おなわ。

うねるとも見えぬ果しもないうねりの丘陵。

はろばろとした波濤の畳みである。

宏大な海、小さいなのは私たちだ。

笛の音は中甲板ちゆうかんばんの巨大な檣マストの下、三本立った白茶に藍の開き耳の、これも大きな通風筒の向う蔭から響いて来る。

「あれは誰ですか。」

「Iさんです。あの頬髭のある。」

「何を吹いているのです。」

「羽衣でしょうか。」

「そうだ、天人の五衰を吹いているのだ。現実の切なさだ。いや、夢見る人の寂しさである。」

「うまいのですかね。よくやっていますね。」

「うまい方でしょうよ。もう十年から稽古しているとっていました。舞台にも出るようですよ。」

「金春ですか。」

「いや、宝生でしょう。たしか。」

「玄人ですか、あれで。」

「素人稽古の時はよく褒められたが、本気に遣り出してから以来、さっぱり褒めてもらえぬと悄気ていましたよ。そんなものでしょうかね。」

「そんなものでしょう。修業ですからね。お能の笛だけにはかぎりませんよ。」と私は初

めて口を開いた。

「この頃臆していけないといっていました。」

「気合いひとつですからね。」と、また誰かがいった。

「それで何だそうですよ、稽古の時には碌ろくに附けもしないで、いざとなるとヒタリと抑えてゆく豪胆な吹き手もあるそうで、これにはかなわぬといっていました。」

「それが腹なのでしょう。天性ですね。そうしてそれが心法にもかなったものでしょう。」
「型ばかりに囚われてはあがきがつかないということになるのですか。」

「先ず、そうですね。」

Iさんは吹いている。

白い支那服の白髯の和製タゴール老人が大きな眼鏡の片紐を垂らし垂らし、ゆうらりと歩いて来た。

「やあ、来た来た、ロツペン団長。」と二、三人が手を拍たたいた。

「あつはつはつ、つまらねえでさあ。」とタゴールさんは、無雑作に欄干てすり近くの反形そりがたのベンチに腰を下ろした。それから身体からだを斜ななめに、両脚を上げると組み合わせた。

「つまらねえもないでしょう。昨晚ゆうべはどうです。大泊で。あつはつ。」とF君、なかなか

逃のががさない。

「御同様でさあ。ばらしますぜ。」

「御同様でもないな。」Fさんがまた眼鏡越し。

「そりやあ、えらいの何のつて、とてもだからな。這入るなりヤツというと矢庭に飛びかかって握手した、あの凄さと来たら、あつはつ、とにかく脅おびやかされましたよ。」

「何処でだい、いつたい。」とこちら。

「はつはつ、つまらねえでさあ。」

「や、ちよつとおもしろい処です。なにしろ、お相手が十六、七の、はつはつ。」

「叱しッ。」

「あつはつはつ。」「あつはつ。」「はつはつはつ。」となる。

「といえ、なんでも豊原では馬車でお乗り込みだということで、もつぱらの評判ですぜ。」と、誰やらが左の隅から延び上った。

「いや、あれはみんなで行ったのさ。物は見て置けというのでね。」とロツペン団の一人。「そうそう、何でもないのですよ。ただ素通りで一遍だけぐるりと廻って見ただけのことです。新聞記者や土地の人も附いていましてね。盆踊りがあるというので行つたが駄目で

した。」と私。

「だが、このお爺さんには驚いたよ。あつはつ、矢口の渡しの頓兵衛見たいで、ずかずかと這入って行くのでね。いや、閉口だ。」と庄亮。

「A君もA君だよ。石橋の袂たもとで、それは亀の子のように蹲踞しゃがみ込んで動かないのだからね。」とF君。

「いいお坊っちゃんさな。警部さんならちと下情かじょうには通じて置くものでは、風教視察という奴でね。」とタゴールさん。

「いや、つとめたいとは思いますがね。どうも。」と若いA君は、そこで赤くなつて頭を掻いた。チラと眼鏡の下から大きな眼がはにかむところで、

「そりゃあかん。」と扇子をパチリは右の三番目だ。

ああ、笛だ、笛だ。

「ところで、この夜明けまで、踊りに踊りぬいた人がありますからね。おもしろえおもしろえ。」と庄亮。

「へへえ、」と、みんなが此方こちらを見た。

「これは聞きものだ、何処です、いったい。」

「豊原のあの、あそこの大通りでだよ。あつはつ。面白うございましたでしょうよ。」

「やあ、ありや面白かったよ。盆踊りが盛つていっているというのでね、歌会の後で、歯科医のS君と一寸廻つて見たのさ。すばらしかったからね。つい飛び込んで踊ってしまった。S君がヘルメットにステッキで、硬直しきりの、後ろからどっかの国の侍従武官兼警視總監というところだ。踊つたなんて絶対秘密になさいと、帰りに耳うちした。」

「はつはつはつ、絶対秘密が自分でばらしちゃ何にもならん。」

「そうかな、困つたな。」

りようりようふりようとうと笛が鳴る。

昨晚のA西洋料理店の饗宴はまったく愉快だったなど、私は心から微笑した。

樺太で同好の士を幾人も見出したということ、私の育てた児童自由詩の搖籃学校である山梨は鳳来小学の校長であった高橋君が、大泊に転任して、偶然にも逢いに来てくれたこと、それに『日光』の同人である大熊^{おおくまのふゆき}信行君のお姉さんに初めて会って、自分の童謡を歌ってもらつたこと、青年たちも淑女たちも、私の顔さえ見れば誰もが莞爾^{にこにこ}してい

たこと、それから、私が立つて挨拶したこと、

「ええ、今晚は皆さんに逢えて大いにうれしい。」と来て、「この先何かいおうと思ったが、何だか途断れとぎそうだから、これでやめます。一杯のんで思い出したらまた遣ることにします。」と坐ると、庄亮が「なるほど、これはうめえ。」と頭を叩いたこと。それから、やや酒が廻つてから、盛んにはしや燥いで、昔のパンの会の話やら、その頃の私たちの唄をせがまれるままに歌つて、大恐悦で教授したこと、それから、みんなの顔のスケッチをする、胴上げはされる。おしまいには、みんなを立たして、そのみんなの空椅子からの上を片つ端から飛んで歩いたこと、何でもやんちやの限りを尽してしまつたらしいこと。

だが、もう、昨日のことになつてしまつたのだ。私は今、オホーツク海を北へ北へ、二百六十哩の彼方、ツンドラ地帯は敷香しくかの寒村に向つて直航中の高麗丸の船上にある。あの豊原の若い歌人たちとも、また一生に二度と逢えるか逢えないかすらもわからないのだ。信行君のお姉さんは歌つた。この白秋の童謡を。あの夫人は音楽家だ。

吹雪ふぶきの晩です。夜ふけです。

どこかで野鴨のがもが啼いてます。

燈あかりもちらちら見えています。

わたしは見ています。待つてます。

何だかそはそは待たれます。

内では時計も鳴つてます。

鈴です。鳴ります。きこえます。

あれあれ、櫛そりです、もう来ます。

いえいえ、風です、吹雪です。

それでも見えます、待つてます。

何かが来るよな気がします。

遠くで夜鴨よかもが啼いています。

私たちの、樺太の冬はちようどこの通りですと、外の諸君も附け足した。

何の期待ぞ。

ただ、波、波、波、

笛の音ばかり澄んで来る。

「だが、二、三日でも船を離れて、こうして還つて来ると、まったく、自分の巢にでも辿りついたという気がしますね。」

「そうそう、ほつとしましたい。」

「それにどうも陸に上っているうちは、何だか気ぜわしくていけなかった。」

「まったく、目まぐるしくてね、何を見ただか探したか、わかりやしない。」

「はっはっ、こうしていつも揺られているとね、揺られているのがほんとうで、何でもないのでかえって不安なような気がしたものさ。」

「震災後、余震のない日に限つて妙に寂しく思えたようにね。」

「そうだ、そうだ。」

「どすが、こないにしてまた何処へ連れて行かはあるか怪態やないう感じはしまへんかな。だんだん日は遠くなるし、曇つては来るし。」

「寒ざむともして来るし。」

「何処を見たって波と空だしな。」

「猥談でもやりますか。」

「あつはつ、そこはNさんのお手のものがしよう。」

「ふふ、つまらねえでさあ。」

「なにしろこうなると、この船一つがたよりでな。」

いや、笛の音一つがしみじみと頼りになつたみんなであつた。

「神様という気はしませんかね。」

「驚いたな。いやに突拍子もない声を出すじゃないか。」

と、みんなが笑つた。何というかすれた笑いだろう。

「神は死せりさ。ふん。」

「若え、若え、そういつたもんでねえ。」と、またどの爺さんだか胴間どうま声をかつ飛ばした。

いわゆる微笑が私の頬にのぼつた。

「どうしたんだい。」と庄亮。

「いや、ちよつと思ひ出したんだ。羅風がね、非常に怒っていたんだ。どうしたと訊いたら、「K雑誌」は怪けしからん、もう詩は書いてやらんというんだ。何か失礼なことでもし向けたのかと思つたら、こうなんだ。羅風の詩に神様という言葉があまり多過ぎるから少し減らしてくれといつて来たそうさ。減らせというのも非礼だがね。三木君もよく神々というんだ。でね、僕はこういつたものだ。いや、君、こんな話がある。いつか僕に気品のある、誰にでも歌える宴会の歌を作ってくれと頼んで来たのでね、わざと古風にして、日本民族としての「酒ほがい」の歌を作つて渡したものだ。すると酒の字があるから困るというんだ。クリスチャンや禁酒会員が見たら文句が出るにちがいないから、酒という字だけはよしていただきたい。君、酒もつかない宴会があつてたまるものか。亜アメリカ米利加ではあるまいし、怒いかり心しん頭とうに発したものだ。そうお仰うればさそうですが、何でも困ります、あれは酒の讚美ですというんだ。わからないのも程があると思つたね。それはね、「のめや、ともがら」とか「汲めや、うま酒さけ」とかいう繰り返しがあからね。こう繰り返されては影響が大変だというんだ。じゃあよせ、取りあげるとなつたら、それではあれは掲載します。が、しかし、その御相談は、その詩の後にですね、飲酒の害という一大名文章を誰かに書いて貰つて附けることにしますからそれだけは許していただきたいと来たのだ。莫ば迦か

なことをいいたまうな。と、それつきり怒りっぱなしになったが、で、僕は思うねえ。君には神様という字を減らしてくれという、僕には酒の字をよしてくれという。こりや君、K雑誌は公平だよ、怒りたまうな。とね。そういつて僕はなだめた。」

「あつはつはつ、こりやおもしろえ。」と、庄亮大喜びで泳ぎ出した。

「羅風さんは、そう神様神様とお仰いますか。」と、また一人が乗り出した。

「ええ、それはね、羅風君はカトリックの実に熱烈な信者だし、トラピストへも三、四年は籠っていましたし、しぜん神という言葉が詩に現れると思います。神を思うことは羅風君としての唯一不断の道ですからね。」

「じゃあ、酒を思うことは君の道かい。」と傍から。

「そうしてまた、庄亮の道かい。」

「あつはつは。」と、哄笑して、そうして軽く「まいったまいった。」と頭を動かした。

「だがね、羅風もよくいうよ。僕が天神山てんじんやまの眺望絶佳な高台に居を占めたのも、詩が出来るのも童謡を作ること、女の子が生れた時に紫の鳩が来たことも、みんな神の恩寵が君の上にあるのだ、恵まれている。今度の旅行も神の導きだとね。これには僕もどきまぎする。三木君がそう思ってくれることは有り難いのだが、僕はカトリックの信者じゃない

のだからね。とにかく異端者としての僕にとつては一寸戸惑いされるんだ。これとよく似た話があるのだ。もう十年も前のことだ。麻布の玄米煎餅の路次裏で両親と同居していた時のことだよ。そうだ、ちょうど「白金の独楽」や「雲母集」の詩や歌の出来た頃だ。ある晩坐っていると、筆がおもしろいくらい動くのだ。何かこう自分以外のものが後から突き動かしでもするような物凄い無我夢中の感興が私を狂気のようにした一晩があった。作った作った、百篇ばかり作ってしまった。で、実に不思議だから、夜が明けるとすぐ父のところに行つて話した。すると赤い顔をして笑つて「そりや、そうじやろばい。」といわれた。母もそうだ。母も微笑していられた。何故ですと伺つたら「そりやそうくさい、おどんが、汝ぬしいよか詩の出来るごつ、いつでん金こん光様にお願ごんこういしとるけんくさい。」といわれた。「お蔭があつたばい。」とき。それは金光様がお作り下すつた詩だといふのだ。両親は金光教の信者だからね。実際僕は呆然としてしまったのだ。何だ、自分の力で自分がやったのでないか。信じもしない金光様の何のお蔭だと思つたがね。ただ親の情なさけというものに撲うたれてしまったのだ。まったくこの両親の恩愛のお蔭だとね。僕は落涙した。この意味で、天主は信じないが、三木君の友情には感謝している。今度も方々に手紙を出して置いてくれた。」

笛が鳴る。笛が鳴る。

「で、コワルスさんとかに逢いに行つたのだね。」

「うむ、齒科医のS君が羅風の手紙を持って見えたろう。謹厳な硬直した態度で、あの人が下座に畏こまつた時には弱つたよ。羅風の紹介文があまり物々しいから僕もたじろいだね。S君はS君では非コワルスさんに逢つてくれ、三木さんに濟まぬという。で、ほれ、日の出温泉から出た足で、僕はS君の家に廻つて、同道して天主公教会に訪ねて見た。」

「どんな人だつたい、その宣教師さんは。」

「いい人だつた。黒い長服を着て、すつかり宣教師タイプに出来ていた。眼が柔和でね、顔が林檎いろで、頭はつるつると禿げ上つて、髭や頬髯のやや赭あかちやけた、どうしても五十四、五と僕は見たね。後で聞いたが実際に驚いた。まだ三十を少々越したばかりだといふんだ。どうも西洋人の年齢としはわからん。どうも考えるところとおかしくなるね。案外も案外僕よりも十歳ちかく若かつたんだからね。波蘭土人ポーランドだそうだ。」

「何か話があつたのかね、君。」

「いや、前から知らしてあつたので、すぐに出迎えてくれた。スリッパを出してくれたの

で、靴を脱いで上った。握手するのかと思つて手を出しかけたが、向うは純日本風で挨拶したので、こちらも差し控えた。室は簡素なものだったよ。テーブルに日本の古い本箱が二つばかり隅こに置いてあつた。壁には大きな樺太全図の軸を一つ掛けてあつたきりだ。私も気軽にテーブルを隔てて対^{むか}い合つて腰掛けた。私はS君の紹介の後で、実は三木君と詩の雑誌を出す事になつたので、この際、この旅行をいい機会として、トラピストにおける彼の当時の住居や信仰の生活や、周囲の風物などをよく見て置きたい希望だということなどを話した。それから日本の子供の詩の話などを訊かれるままに話した。僕もすつかり快活な気持ちを持ちつづけていられたよ。三木君のことも訊いた。白秋さんの感じはどうです、いいでしょうなどと、S君が傍から言葉を添えるので、コワルスさんもあかくなつて微笑していた。コワルスさんは何でも豊原草分けの宣教師で、独身で、土地の信教の為にはほとんど一人で尽しているのだと、S君はまたあの人を僕に非常に褒めてきかした。僕もいい感じがした。それから僕はさよならをのべて立ち上った。三木さんによろしくとあの方は送つて来た。それからね、僕に、また春になったら避暑において下さいと微笑した。僕も微笑したよ。ね、そうじゃないか。教会を出てからも、いい匂いの人だと思つた。日本人同志にああしたいいい匂いの残る面会というのはなかなかないようだね。」

「樺太長官はどうです。」とF君が声をかけた。

「ああ、あの訪問ですか。」

「はつは、あれには驚きましたね。不得要領きわまるんだ、実際。」

「風采はあがらないが、あれでなかなか如才ない方でしょう。でも官僚は僕の性に合いませんね。」

大きな大きなガランとした階上の一室にその瘦せ形の長官某氏が納まっていた。大きなテーブルには書類が少々散らばっていた。牧畜家のH、麦酒会社のF、印旛沼開墾の庄亮、京都府警部のA、それに私がその前の椅子に腰を下ろしていた。昨日の正午前のことであつた。

植民について、——土地選定、土地区劃、土地処分。農業移民の生活状態について。畜産について、また林業について——造林、保護、調査。水産、或は教育について。交々こもこも詰めかけ詰めかけ質問した私たちに、かの樺太の王様たる長官が何を、また如何なる熱誠を以て応答したろう。

「ええ、実はそのお。」「ええ、実はそのお。」で、やや罅ひびの入った重い濁り声で、咄とつぱ弁べんでもなく雄弁でもなく、ただ冗漫言をだらだらと素麵そうめん式しきに扱こいてゆくだけであるの

で驚いた。質問の要点には少しも触れないで、聞いていると枝葉の話ばかりで続くのである。それでいて、此方こちらには口一つきかせないで、一人で埒うちもなく喋るのである。そこで、その間に属官が三度ばかりきまつてコツコツとノックするのだ。

廊下へ出ると、F君が、ああああとやった。

「不得要領な男だなあ。」

少くとも私たちは何一つ与えられないで、公会堂の歓迎会席場へなだれ込むより外なかつたのだ。

「瓢箪ひょうたん 鯰なますとは政治屋のことですよ。」と今もF君は吐き棄てるように罵った。

「だがそのお、あれでなけりや身が持てないんだよ。要領を得ちやすぐに没落だからね。

だから僕はそのお、お百姓になろうてえんだ。のんきだぜ。」

笛の音いろは一色に、りょうりょうふりょうと鳴っている。

「ゴルフはどうですか、皆さん。おやりになりませんか。」

恵美須えびす面のM重役が、その長い柄の杓子棒をコトンコトンと音きして、立てて、流して、ふらついて来たが、誰もまた立ち上ろうとはしなかった。

Mさんはすっかり悄気しよげてしまった。今さら笑顔も引つ込められず、二等の船室ケビンを廻つて消えた。

「一万円。」と、ほろ酔のいい機嫌の紅ら顔の、胡麻塩頭の、それが眼鏡の底の目くばせで、私へ向いて、またつつつと通り過ぎたは浜の輸出商Cという小柄の老人。

そこで、私は庄亮を見た。どうにも笑いがこみあげる。

それは小樽を出ての海上の夜の食堂のことであつた。いい気持ちに陶醉したC老人は、突如として私に年一万円の補助を申し出た。

「北原さん、洋行なすつちやどうです。及ばずながらわたしが三万円御用立てしましょう。年に一万円ずつ、三年ですぞ。」

私は困つて笑つていた。

「占めた。」と庄亮、

「こりやうまい、白秋君、証文をひとつ書いてもらつとこじやないか。」

「ようし。」とC老人、早速に半紙に書きなぐつた。

「A博士、ひとつ御証明を、そのお願いします。」

A博士は謹厳であつた。容易に筆を執ろうとはしなかつた。そこで、

「Mさん、どうです。」

「あてか、さよか、よろしい。」と、自称美術家のパトロン、M老人、つるりと唾つばきに筆の尖さき、薄墨で蚯きゅういん 蚓流。

「占め占め。」と、庄亮、墓がまぐち口くちにねじ込んで、懐中に固くしまうと、「さあ、飲むぞ、飲むぞ。」

「飲むぞ。大いに飲むぞ。」とC老、ふらふらと立ち上ったが、また私を見ると、

「三万円、一年に一万円。」

小鼻に一本、直指の型だ。

だが、その翌朝になると、何か会っても鼻じろんだ、それがまた、酒気に乗って来ると、そら、また、「一万円。」である。

ところで、此方だが、うっかり忘れていたのを、ふっと気がついて墓口をあけて見たその後のことだ。

「あつはつはつ、こりやおもしろえ。あつはつ。」

「何だい、どうしたんだい。」

「おもしろえおもしろえ。」

と、証文の一札である。

金壺万円也　北原白秋

とある。

「これはそのお、白秋にい一万円贈る、あつはつはつ、じゃあないんだね。君の値段が
一万円。」

「おやおや。」

「やあ、ははあ、まだおもしろえぞ、ききたまえ、わて、しりまへん。あつはつ、これが
そのお、M爺いさんのお。」

「証明かね。」

「あつはつはつはつ。」

そこで、二人が腹をかかえて転げまわったものだったが、知るや知らずや、またまた一
万円である。

「あの人も寂しいんだね。」と私も見送った。

と、

でれでれと二等の二組。男は中脊の目尻下り、女は髪を等分の、これはこつてりの、お

ちよぼ口。その恋々相愛の、手に肩、肩に頬を寄せて、私たちの見る眼も憚らぬ御遊歩である。

「なんだい、ありや。」

「叱ッ。」

「あれが君、評判の鴛鴦夫婦でさあ。」

「袋叩きにしようという、あれですかい。」

「あつは、何でも白粉刷毛まで御亭が叩いてやるんだそうだよ。」

「へへえ。」

「そして湯殿の御立番でさ。」

「いよいよよう。」

笛の音いろが消えかかった。

「やあ、はあ、これは先生、かけちがつてお目通りもし申さんで。ええ、いかがで、一杯。」

車輛会社のS爺さんだ。ずいぶんきこしめしている。

「やあ、先生、飲んまつしゆう。ひさしぶりですたい。この二、三日、何処どこどん居おんなはったじやい、いっちよんわからんじやったたい。吉植さん、飲んまつしゆう。ほんに、つまんのうしてなりたい。おいでまつせ。三等ん方がよか。飲んまつしゆう。飲んまつしゆう。」

九州男のYだ。これは豪傑、胸をはだけて、ずしりずしりとやって来た。これも少々酔っていた。

「後で行くよ、君、今晚。」

「来なはれ。かまわん。あん爺さんも寂しかと、いよらつしやる。吉植さん。」

「酒はごめんだよ。まだ咽喉のどがわるくてね。」

「なつちよらん。そんならよか。」

あ、また、行つてしまった。

「みんな、変なんだね。」

「なまじ陸おかで浮かれたせいで、妙に落ちつけないんだらう。何だかみんなの影が薄いじゃないか。」

「それに北へ北へと渡るんではね。」

ぽつり、

ぽつり、

ぽつり、

ぽつり、

ぽつり、

ぽつり、

ぽつり、

ぽつり、

人は一列、元の籐椅子、右も左も同じ高さの頭である。

霧がさあつとかかつて来た。

なんと黄色い日の燻^{いぶ}しだ。

と、

はったりと笛の音いろが止んだのである。

急にはずむエンジン、

スクリユー、

舷側の波の裂けて碎ける音までが、白い嵐を吹きあげる。

オホーツク海だ。

やっぱりオホーツク海だ。

笛は袋にしまつたらしい。

曇り日のオホーツク海

光なし、燻^{いぶ}し空には

日の在^{ありど}処、ただ明るのみ。

かがやかず、秀^ほに明るのみ、

オホーツクの黒きさざなみ。

影は無し、通風筒の

帆の綱^へが辺に揺るるのみ。

眺めやり、うち見やるのみ、
海豹^{あざらし}のうかぶ潮漚^{しほなわ}。

寒しとし、暑しとし、ただ、
霧と風、過すがひ舞ふのみ。

われは誰たぞ、あるかなきのみ、
酔はむとも、醒めむとも、まだ。

燻し空、かがやかぬ波、
見はるかすまろ円はてき涯のみ。

敷香

や、黒い牛がいる。

私が揺り上げ揺り傾くかたむはしけ舂の中から初めて見た敷香しくかの第一印象は、一頭のその黒い牝牛めうしであつた。すぐとつつかの砂浜の一角にぼつりと彼女は突つ立っていた。その下半身を埋めた雑草の緑は見るも鮮かであつた。国境の安別で見た女郎おみなえし花風の鬱金色うこんの花も簇むらがつていた。だが、凄まじい飛沫しぶきのなだれであつた。幌ほろ内川ないの濁流とオホーツク海の波濤なみとがその河口で激しくかち合つて騒ぐのである。それにまだ昨夜ゆうべの烈風の名残が容易に収まろうとは見えなかつた。

上陸して見ると、敷香はかなりの寒村であつた。そうして到る処が灰色の砂地であつた。それで海岸道路には蝦夷松えぞまつの葉で飾られた歓迎門が濃青い簡素なアーチを作つて、私たち観光団一行をウエルカムした。くぐつて少し行くと露西亞ロシア風の丸太小舎の郵便局も目についた。それに運送兼業の雑貨店や、やや小綺麗な店屋が飛び飛びに二、三軒はあつた。どの店にも絵葉書は売っていたが、後れて私がいっただ頃にはもうほとんど気早の人たちに

選み散らされていた。それでようやく、丸太小屋の廂ひさしに奉迎と書いた提燈ちようちんを吊して、脛すねの長い女の子と立って笑っている肥った露西亞人の女の写ったのを一枚手に入れて、早速うちの子に通信したたを認めると、急いで郵便局の小窓の前に行って見たが、此処で放りこむよりも北海道の稚内わっかないへ帰航してからの方が余程速いということだった。それでもとにかく出すことにした、いい記念のために。

河口を少しくのぼった空地くうちには木羽草こつぼうぎの休憩所が一つ見えていた。まだ接待の準備もつかないらしく、若い酌婦風の女が一人二人、風に吹かれて、対岸の遠いポプラしらかんや白樺ばのかがやきを見入っていた。真夏とはいっても何かしら寂しい秋口の朝の光であった。

まだ一行の誰もが来て休んではいなかった。

「姐ねえさん、お茶はまだですか。」

私は他のようひとに白樺の皮を剥ぎに行ったり、ざんざめいて歩き廻ったりするのが臆劫おそくであつた。

「おほほ、もうじきですよ。」
と、女のひとりは襷たすきをかけた。

河の水は一面にちらちらしていた。利根川のように洋々たる大河であつた。オロチヨン

ギリヤーク土人の独木舟オツクダアの競漕がおつつけ花火が揚ると初まる手筈であった。それから一行の誰彼がどやどやとはいって来た。オロチヨン人の手製に成った馴鹿トナカイの鞵なめしがわの靴や、財布——それは太い色糸で不細工に稚拙に裝飾してあった——白樺の皮鍋、アイヌの厚司あつし模様すげのついた菅の手提げ、それに玩具おもちゃの櫛そりや独木舟オツクダアなどを彼らはてんでに買い込んで来た。それを見ると急に私も欲しくなつたのでまた引返して、売れ残りの靴の一つをどうにか探し出した。馴鹿トナカイの臭みがして小汚くて、赤と黄との図案があまりにけばけばして、子供でもない自分が肩から引掛けるのは些いささか気がさしたが、そこはそれ旅の気安さであつた。その靴は紐が短いので、掛けると左の小腕こわきに吊り上がった。幼稚園の生徒のようだつた。みんなが笑つた。

内地の小さな村役場くらいの物産陳列館にもはいって見たが、豊原のを見た目には別に取立てて変つた種類もなかつたので、おそろしく深々とした熊の毛皮の外套や、防寒帽子ゆきくつ、雪沓ゆきくつなどを取り騒いで買い込んでいる人たちを後にひとりでもまた外に出てしまった。

部落はたいした町家並にもなっていないなかつた。どの家も平家で、半ばはお粗末なバラック風であつた。露領時代の名残も見えた。草もぼうぼう繁つていた。いちばん広い通りかと思われる砂地の十字路に出たところで、私は上かみの方から麦酒の空瓶らしいのを両手にか

かえて小走りに駈けて来る八つか九つぐらいの卵色の軽い服を着けた亜麻色の髪の子に遭遇であつた。と、その女の子が私のオロチヨンの靴を見るとたちまち立ち停つて笑い出した、身体じゆうで。露草色のくるくるとした瞳であつた。何か見たような顔だと思つた。「いいだろう、これ。」ぽんぽんと、こちらも叩いて見せた。それからふつと気がついて私は訊ねて見た。

「あ、君だつたね、絵葉書に写っているのは。」

「やだア。知らないよ。」

「それは何なの。」

「石油。」

「君の名は。」

「セーニヤ。」

そういつて、その瓶を目よりも高く差し上げると、また飛び跳ねる馴トナカイ鹿の仔のように活潑に走り出した。素足の裏が白く白くかえ翻つた。

河畔へ出て見ると、休憩所の周りは既に群集で埋つていた。何と珍らしい樺太の晴天であつたろう。光り輝く数百の麦稈帽の反射は近い水面を、空気を、砂地をことに眩あやく新

にした。そうして岸には長い櫂オールを蜈蚣むかで見たいにそろえた細長の独木舟オックダアが幾隻か波に揺られて、早くも飛び込むと持場持場を固めるオロチョンギリヤークの青年たちも勇ましかつた。彼らは鼠色の軽装にばんばらの蓬髪さげなみを長く靡なびかせていた。

川の上手から静謐な、光り輝く漣さざなみの上を影絵のように急速力で漕いで来る丸木舟まるきぶねも見えた。一人、二人、三人、四人、五人、あ、六、七人。

「来た、来た、金太郎金太郎。」歓声がひとしきり揚った。

オロチョン族の金太郎は少からず人気男と見えた。競漕でもとうとう彼の一組が美事に優勝した。

あの土人どもの無智な一凶いちぢずの活動はむしろ峻烈極まったものだった。映画で見る樺太犬オックダアの櫂そり引きとたいして違いはなかった。四隻の細長い独木舟オックダアに分乗して、飛沫ひまつを散らして先後を争った凄まじさは、私としては見ていて壮快を感じるよりも、かえって憐愍れんびんの情に撲うたれたのであった。それともう一つは格別勝負事には興味を持ち得ぬ私にとっては、暑くとも日の照る砂地に踞座あくらでもかいている方がよかった。私は手をあげてセーニヤを呼んだ。セーニヤも見に来ていた。

「来たね。」

「うむ。」

「君の家何処なの。」

「シヨウヒン……ふふつ、あの横。」

「パパは。」パパでもわかるかと思つて訊いて見た。私は露語を知らなかった。

「死んだよ。いないよ。」

「ママは。」

「いるよ。ミルク、初めたよ。牛ね、一匹いるよ。」

ああ、あの砂浜に出ていたのがそうだったかと私は微笑した。

「君たちは何処から来たの。」

「アレキサンドロフスキー。」

「何時。」

「去年、去年の前、あ、忘れた。」

「パパは何していた、彼方あっちで死んだ。」

「うむ、お百姓、牛ね、羊ね、いたよ、沢山、パパ殺された。」

「ほう、どうして。」

「バルチザン、悪い人。みんな逃げた。お金もって。」

其処へ、また、赤や黄や濃い藍染めの更紗布ぎれを頭からひつかぶったオロチヨンの子供たちがぞろぞろと集つて来た。服は廉物やすものの白に花模様のキヤラコの更紗で、何れも韃鞢風のものかと思われた。顔も手足も垢じみて、まるで乞食の子のようだ。

私はポケットからドロップの紙袋を取り出すと、少しずつみんなの掌てに配つた。

「君、何というの。」

「マツチヨ。」と十歳ばかりの女の子が答えた。

「君は。」とまた私は次の女の子に訊ねた。

マツチヨが「ウンノック」と代つて答えた。

「この小さい子は。」

「ムンムック。」

そこへもつと小さい赤子を抱いて来た鳶色とびの老婆があつた。いかにもツングース系の、顔が平たい琵琶型びわの、そして眼の細い、鼻のひしゃげた薄汚ない、まさかシャーマン教の巫女みこでもあるまいがと可笑しくなった。御亭主はエフロックで、自分がクルグックで、赤ん坊がドイツチだといった。とにかくこれでも揃つて盛装して来たのであつた。摂政宮殿

下の御行啓を奉迎に、上流のツンドラ地帯から出て来て、そのまま部落に帰らずにいるという、水産課の人の話であった。

「オロチヨンギリヤークの不潔さといったら、顔ひとつ洗わず、何もかも着物で拭くんですからね。それに米も麦も食べません。魚の干物ばかりで生きています。奴らは夏になると河のそばへ出て来て、冬は山地に籠るのです。」と、傍から私に話した。みんなが無表情な愚^{おろか}な目付きをしていた。そうしてまるで凍えかかった魚のように赤や黄や青のドロツプをしきりに嘗めた。

「君の家へ行こうか。」と私はセーニヤを振り返った。

「うむ、ミルクがあるよ。」とセーニヤは駆け出した。

*

セーニヤの家は広い砂地の通りに面した丸太組の小舎であった。窓の下には背の低くて小さい向日葵^{ひまわり}と、赤がちの黄の金盞花^{きんせんか}が咲いていた。セーニヤははいり口から飛び込むと、もう窓に顔を見せて、ぴつと下唇を尖らした。それから飛びつくように上半身を撓^{たわ}め

て乗り出すと、片手を窓枠にしつかと、片手を思いきり下向したむきに伸ばし伸ばし、うるさく垂れさがる亜麻色の髪毛をまた、幾度か振り立てて笑った。桃いろの首根っこだ。

「取っておくれよ。」

「そつちから取れない。」

「やだなア、うん、よし、——ほら。」と葉と蔓つると花とをいっしょよくたに引きもぎった。

はいり口の横には貼紙に「ミルクあります。」と拙ますい日本字で書いてあった。

内へはいって見ると、二間まきりしかなかった。侘わびしい家具の配置であった。取つつきの室しつには粗末な木地のテーブルに、ミルクの空からびん罎びんだのつまつたのだの、ゴチャ交ぜに並べた、その横に素すの片かたひじ肱ひじをついて、同じ亜麻色の髪かみのセーニヤによく似た若い娘が此方を微笑して見ていた。少し顔を紅くして、私を見るときまたセーニヤの方を見た。彼女はさして美人ではなかった。ただいかにも快活で熱情的で、やや投げやりにも見えた。

と、ママが奥から出て来て、眼で会釈をすると、すぐに善良よたかな笑顔になった。そうして窓際の小さなテーブルに、その大きな図体をぶつつけるようにして腰掛けると、無造作に壁に背を凭もたした。黒に近い葡萄色の軽装で両手を高くまくり上げ、薄紅い厚ぼつたい耳みみたぶ朶ぶには金の耳環みみわを繊細に、ちらちらと顫ふるえさしていた。二重頤の頬の肥えた、そうし

て七面鳥のように胸の高く張った堂々とした内儀かみさんであった。賢さかしい智識からこれと深められた目色は見えぬが、ただの農民の妻だったに過ぎぬが、いかにもお人よしの隔てのない愛敬がその顔にも表れていた。

私は先ずミルクを所望した。

セーニヤが今度は後ろから、姉さんの首ったまにかじりつくと、矢庭やにわにその左の頬を持つて行つた。姉さんは、身体を反り曲げて、おっほほと笑うと、何か歌の一曲さりでも歌うように咽喉を転がした。

「セーニヤ、姉さんは何という名。」私はそれで程よく寛くつろぐことができた。

「イフェミヤ。」

イフェミヤはその乱れた前額の毛をわざと巫山戯ふざけてその手で掻き散らした。

「はる、る、る、る。」

それから、

「イフェミヤ・ベリヴェヤワ。」

私は黄色い小型のノートを取り出した。

「どう書くの。書いてお見せ。」

イフエミヤは直ぐに立つて来て、私から鉛筆を受取ると、一字一字力を籠めて書き記した。^{おわ}了るとまたスツと坐つて、両脇を前にぱたりと投げ出した。そうして両手の指を深い前髪の中に、突き入れて笑つた。それから、右の人差指を一寸鼻の上に当てた。

「ベペエデエバ。」と私が読むと、

「ベリヴェヤワ。」

「ベリヴェヤワ。」

ほっほつとママまで腹をかかえた。そうして、「ううむ、駄目。」と含み声でつつと身をねじらした。

b || B

B || v

と、ノートに書いて、「ね。」

眼を近々と寄せた彼女たちの字を書く時こそ一生懸命であつた。

「神戸……いい。」

「え、いい。どうして。」

「十月行く。此処だめ。」

「なぜ駄目なの、いいじゃないか。此処。」

「駄目、赤来ます。」

「橇そりね、乗って来るよ。わるい人。」

「だって、ここは日本だろう。」

「日本いい。赤わるい、おそろし。」

これは私も今度聞いたが、バルチザン滅落後も北樺太の赤派せきは極端に不良で、白系の良民に対して脅迫掠奪残虐至らざるなしということであった。従って良民は南下して日本領内に亡命した。で、農作は絶え、畜産は滅び、食糧には窮乏して来た。従って、結氷期にもなると、幌内川こぞを挙こぞって南下しかねないという。橇そりを駆こぞってだ。それで敷香しくかでは無論防禦の武器はいくらかは準備してある。だが、かの世界の兇暴を兇暴とする強盜群の襲来を果して撃退し得るかは疑問である。そのみでなく、彼女たちは日本内地の大都會の文明的色彩と繁華とをまるで夢の様に憧憬こぼれしているらしかった。神戸へ行きさえすれば、日常の生活などはどうにでも幸福に過こし得る事と、単にただ無邪氣せがに考えているらしかつ

た。

「お金あるよ、千五百円。」

ママは開けすけだ。

「牛売ります。ね。」

何と、ロスキーの大まかで、善良で、無邪気で、一本気で、また開放的でやりっぱなしであろう。こうしたのがいわゆる露西亞氣質きしつというものかと私は感嘆した。全く何と好きな国民だろうと。彼女の中にもイワンの莫迦ぼかは光っていた。

それ位で知人もない神戸へ行くのは危険だ、それは止よしたがいいと、私はしきりに手を振ったが、七面鳥さんなかなか強情つ張りで、容易に私の戒告を聴こうとはしなかった。

「神戸行きます。商売する、ね。」

ところへ、どやどやと一行の四、五人がはいつて来た。室内が急に賑やかになった。

そこでこの肥って善良な七面鳥が奥の室から廉物やすものの蓄音機を、耳環をちらちらで擁かか出して来て、窓際の小さな卓子テーブルに据えると、煤色の大きな喇叭ラッパの口を私たちの方へ差向けたものだ。

安来千軒えええん……う……う

それから「江差追分」「八木節」「博多節」などに変つて行つたが、青羅紗ラシヤの凸凹でこぼこの台の上にレコードはへたばりへたばりキイキイ声で旋廻した。

わるいので、そこで誰かの帽子を裏向けにすると、みんなが銀貨のなにかしかを投げ入れた。ママさんなかなかお世辞がよかつた。そうして非常に喜んだ。なるほど、これもやつぱりいい手だなとやつと私は気がついた。別にミルクホールでもないのに私たちのような気まぐれの訪問者も断りも兼ねて愛想をふりまくことも、亡命者の弱気と遠慮とどばかりし推察して、いささか此方こちらは済まない心で見えていたが、少し勝手が違つたようだ。なんの金には締つてないこともないらしい。

「さあ、写真を撮ろう。」と誰かが先きへ立つて出ようとすると、セーニヤがいちばんに外へ飛び出した。と、門口かどぐちに一人の青年がまじまじと突つ立っていた。例の鼠ねずみの裸児はだかごがそのまま生長して大きくなつたような顔の皮膚の薄紅うすあかであつた。黄の軍服に紺の軍帽をかぶっていた。おおかたアレキサンドロフスキーから持越しのものであろうか。眼がしよぼしよぼして内気らしい、彼も素直で善良そうであつた。セーニヤに聴いたら従兄いとこだといつたが、イフエミヤが一寸紅くなつてセーニヤを睨んだので察すると許いいなすけ嫁よめの間らしい。そこでその青年も加えて、パチパチといくつかやつて怪しい素人写真の何枚かが済ん

だ。

昼飯過ぎてから、一行が舟でツンドラのフレップ摘みに行くが、行かないかと誘ったらセーニヤを初めその従兄の青年までが大喜びで約束した。全くこの僻遠の地で、三百人という文明人——彼女らから見れば——の集団をかつて見た事もなかったろうし、その常に憧憬している日本内地の都会生活者と伍して半日の遊樂をほしきままにするということは彼女らにとって望外の幸福を感じずにはいられなかったろう。セーニヤは今度は表から金盞花の二つ三つを摘んで私にくれた。

「じゃあ、待っているよ。」

「行くよ、すぐ。」

*

ツンドラ地帯清遊のことはまた筆を改めて精細を尽したい。ここではベエリヴエヤワ一家の事を主題とするからである。ただ二隻のランチに一隻ずつ曳かれた私たちの大団平船が、沿岸に蘆荻が繁つて、遥かの川上に中部樺太の山脈が仰がれ、白樺、ポプラ、

椴松、蝦夷松の林を左右に眺めて、一時間も幌内の大河を溯航した壮快さを伝えて置きたい。全く内地にもすくない水郷だという感じが私を喜ばせた。海驢のように黒くて大きな流木も浮んで見えた。ベエリヴェヤワのお母さん七面鳥は私の乗込んだ団平船の高い艫の方に大きく膨れてかがんでいたが、いかにも楽天家の本相をあらわしていた。そうして事毎に「神戸神戸。」で話は持ちきっていた。何でも明日にでも牝牛を売るような口ぶりにはみんなも驚いて笑い出した。だがとにかくすっかり中心人物になり了せた。

ツンドラ地帯とは蘇苔類の層積から成る幌内川の沿岸は広袤数十里に亘る地帯の謂である。その地帯には俗に樺太葡萄と称する紅い果のフレップと紫の果のトリップとが一円に野生していて、自由に人の来て摘むに任してある。極楽園である。フレップもトリップも躑躅によく似た葉の細い小さい灌木である。舟が着いて上ると私たちは皆二時間ほどをその灌木林で悠遊した。いい日和であった。私たちはフレップを摘み、トリップを探してまた心ゆくままに味い、かつ夢みた。そうしてまた耀やかで涼しい風と光と色と音とをもまた十分に新鮮に食らい過ぎるくらいに食らった。セーニヤは盛んに跳ねまわっていた。何と黄色いカナリヤであったろう。イフェミヤはその許嫁の従兄と時おり出会ったり、離れたりして摘み耽っていた。彼女は円みのあるいい声の持主であった。暑い暑いといいな

がら、両手で胸の乳房の上を抱き締め抱き締め、彼女はよく歌った。静かな、しかも強い日光の下で、恋々綿々として彼女は歌った。何という情感的な牧歌であつたらう。

帰航の時、私たち一行の舟は右岸の白樺林しらかばやしの前に散在するオロチョン人の部落の前に差しかかった。土人たちは幾つかの煤色の天幕テントの前に簇むらつていたが、私たちの舟が通ると盛んに色々の光る布きれを頭の上でうち振った。私たちもこれに応えた。万歳あい、万歳あい。万歳あい。見ると赭あかつちやけた魚の干物が幾並びも棚に掛けられてあつた。その魚の干物にも日射しに移りつつあつた。

「金太郎、金太郎。」

と、セーニヤが伸び上つて手を拍いた。

「おおそうか、金太郎がいるのか。」

「金太郎万歳あい。」

と、またひとしきり舟の中ではぎんぎめいた。そうして休憩所の前に著いた頃には、もうそろそろ日の光も黄色くかけり初めていた。風も出て来た。こうして敷香の夏の一日も、雲がまた薄く低迷して、うそ寒く、寒く暮れてしまうのである。私たちはまた一旦上つて、ちゆうじきしよ中食所であつた旅館の一、二へとりどりに鞆や土産物をそろえに急いだ。

それからこはんとぎののち後、私たちはまたランチに曳かれて本船へ帰ることになった。敷香の有志やオロチヨンギリヤークの土人たちも一同うち交って、その河口の石垣に立って見送った。クルグツクの婆さんも女の子マツチョ、ウンノック、ムンムックたちも赤や黄や藍の更紗の冠かぶりで並んでいた。

例の肥ったベエリヴェヤワのママは左右を眺め眺め、さも名残惜しそうに、それでも眼では笑っていたが、舟の出しなに、いきなり大きなスカートを舞わして飛び込んで来た。送ってゆきたい、高麗丸の船室ケビンを是非見せてほしいというのであった。イフエミヤも続いて飛び下りた。許嫁の青年も、これは軍隊式に身軽くすぽっと飛んだ。続いてまたセーニヤが人々を掻きわけると、両手を後ろに拡げて、いざと身構えした、ちようどその時、「駄目駄目あぶないあぶない。」という声が岸と舟とに起った。

「セーニヤ、セーニヤ。」とママが呼んだ。

だがランチは旋廻し初めた。濛々として黒煙くろけむりが靡なびき、とどろくエンジンの音が人々を息ぜわしく焦立たせた。セーニヤは幾度か飛び込もうとして、支えられた。石垣と舟との距離が一間けんになり二間になり三間になった。セーニヤはしきりに母を呼び姉を呼んだ。だが、最早やどうにもならなかった。「乗せてやれ、乗せてやれ。」と私たちも叫んだが、

今はそれも危険で近寄れなかった。と突然、火のようなセーニヤの泣き声が上がった。セーニヤは両腕を犇ひしとその顔にあてた。

ママは何か大声で呼び続けた。たぶん牡牛を家へ連れて帰るようにとでもいいつけたことと思われた。

高麗丸はこの沖合ではいかにも壮麗に、またいかにも文明の高貴な象徴であるかのごとく眺められた。そうして船室ケレンの灯が一斉に点いた明るい美しさといったらなかつた。星、星、星、星、星。ママやイフェミヤは眼を輝やかして手を拍った。彼女たちには高麗丸が大貿易港神戸の一部であり、神戸はまた高麗丸の延長であるかのごとく思えたに相違なかつた。

日が赤く円く、それでも鈍く寒く、今はオホーツク海の遙かに沈みつつあつた。はてしもない北方の夕焼けが次第に空には濃くなって来た。

セーニヤは泣き泣き牛のいる傍まで駆けて来た。

「セーニヤ、さようなら。」

「セーニヤ、さようなら。」

セーニヤと黒い牝牛とが、ぼつりぼつりと、砂浜の叢くさむらに残されてしまった。いつまでも

いつまでも黒く突^つ立^たつていた。

海豹島 その一

さあ、いよいよ海豹島だ。

読者諸君。

私はもうじりじりしていたのだ。旅程が長くて、いつまでも私の筆はこの目ざす一大驚異境に達しなかつたからだ。

来た、来た。今度こそは縦横無尽だ。

飛躍、飛躍。

海豹島こそ見物みものだろうと人はいった。私にしろこの樺太旅行の眼目は全くこの海豹島だと期待していた。恐らく三百の観光団員総てがそうであつたにちがいない。

この海豹島は眼前にあるのだ。

ブラボウ、ぼうぼうぼうぼうおうと汽笛が吼ほえる。

八月は二十日の黎明、オホーツク海の暁色。

黒だ——島だ。

一溼。

万歳。

青だ。ああ、透明だ。——赤だ、かば樺だ、雲だ。

あ、小さい太陽、朱だ。北だ。

波、波。紫紺の波、波、うねり波、

光、光、光、光、金の閃光、運動、

かつきりした水平線、

鳥だ、あ、ロツペン鳥だ。ちよう

飛ぶ、飛ぶ、飛ぶ。

飛ぶ、

飛ぶ、

黒、白。黒、白。黒、白、白、白、

白、白、白、白、白、

黒、

黒、黒、

ひりいりい、ひりいりい、ひよう、
ひようと来た、

何と、世界より大きく見える翼、
一羽が来た。

鳥鳥鳥鳥鳥

鳥鳥鳥鳥鳥

鳥鳥鳥鳥鳥

鳥鳥鳥

鳥鳥鳥

鳥鳥鳥鳥

鳥鳥鳥鳥

鳥鳥鳥鳥

鳥

驚く。驚く。

円の、^{えん}双眼鏡の端から端まで、

黒上衣の、白胴^{チヨツキ}衣の、^{ちよりつ}佇立した、密集した、幾段々になった、

鳥鳥鳥鳥鳥鳥鳥なのだ。

ロツペン鳥の懸崖、岩壁——断層面。

いや、島自体がロツペン鳥の断層なのだ。

正面きつた。

と、展開、第一光景となるのだ。

第一光景

島は小さく低かった、頂上は平坦で。

ちようど、四六版の本を横に見た形だ。

まだほの暗い、藍鼠の背皮せがわ、その背皮は懸崖だ。

赤い、豆の太陽の南、影になつた懸崖の残雪、

と観たが、違つた。

生きている、生きている。

動いている、動いている、動いている。

生長し、生殖し、受胎し、産卵し、展望し、喧騒し、群立し、思考し、歓喜し、驚異し、

飛揚し、ほんやく翻躍し、——島そのものから、ああ、島そのものからすばらしい創世紀にある

のだ。

こちらは高麗丸の右舷、中甲板の欄干てすりに総出そっいで、かなしいかな、人間人間人間なんだ。

「いったい、何羽いるんだ。」

「三十万。」

「ほう、三十万。」

「わかりやしないさ、計算できるかい。」

「坪で計るんできあ、坪で。」と水産課だ。

「ペンギン鳥とはちがいますか。」

「ちがいます。似てはいますがね、海うみ鴉がらすという奴です。」

「直立しているんだね。ありや、おもしろいな。」

「あれで卵を一つずつ両股の間に挟んでいるんですよ、みんな。」

「へえ、どんな卵です。」

「それは綺麗ですよ。青磁いろで、黒い斑ふ入りで、円錐形に近い楕円で、大きいんです。」

風だ。

光だ。

飛ぶ。

飛ぶ。

飛ぶ。

飛ぶ。

飛ぶ。

「やあ、飛んでる、飛んでる。」

岩壁の縁が、縁から、はがれて、飛ぶ、飛ぶ、

白光、

赤光、

紫金光。

閃々光だ。

「あ、啼いてるようだな。」

飛沫、飛沫、

「こりやひどい、とても上陸^あれませんよ。この波では。」

「決死隊だな。一番やつつけるかな。」

飛ぶ、

飛ぶ。

飛ぶ。

飛ぶ。

飛ぶ。

飛ぶ。

第二光景

「坊や。」と私は心で叫んだ。

どうしたんだ、いったい、私は。

竹林ちくりんだ。紅い芙蓉ふようの蕾だ。

藁壁みみずくの木、兎うさぎの家の窓から顔が出る。——円い眼だ。あ。

「君、君、白秋くうん、そのお、膾炙おつとせい獣は何処どこにいるんだね。」

「膾炙おつとせい獣かい。」

そうだ、此処は海豹島なのだ。

オホーツク海は樺太の東海岸北知床岬の南方十海湮かいらだというのが、この海豹島の確かな位置とされている。その海豹島は長さが二百五十間けん、幅が三十間のほんの小さな岩島に過ぎないのだ。それを白い白い砂浜が四周に繞めぐっている。私たちはその西側に直面して、今は僅かに五、六町の沖合まで近ちかぢか々と寄せて機関の運転を止めた高麗丸の船上にあるのだ。

晴天だ、すばらしい。

何とこの微塵光びじんこうの新鮮さ。ああ、朝はすでに爽かに笑っているのだ。

岩壁に密集したロツペン鳥の風景は、空の明あけるに従っていよいよ細かに黒白分明し、その飛行はまた耀く風の幅となり、川となり、旗となり、帆となり、吹雪となり、波濤となり、無数に白く、また、黒く紫に、また白く白く擾じょうらん乱して底止ていしするところを知らないのだ。

汽笛が吼える。巨大なあらゆる通風筒の耳、

噴き出す湯気、大煙突。

海上の一大宝塔——高麗丸。

その汽笛のぼうふうは島と空とに緩ゆるく深く響いて、遠心的に白く広く拡がってゆく。空腹だ。ぼうふうう。

パパ、おまんまアアアア。

私は涙が流れかけた、双眼鏡の下からだ。

「や、日の丸だ、おい。」

島の最高部、柱が天を摩まして一本、日章旗だ。日本だ、日本だ。

「膾膾えいえいは見えないかね。君。みんな騒いでるがね。」

「待ちたまえ、や、赤い家が見える。」

「見えてるよ、さつきから。監視人の小舎こやなんだろうが、膾炙かいわ獣がいねえ。」

「膾炙かいわ獣は向うつ側かたにいるそうです。」と誰やらが前から振り返った。

「なるほど、変だと思った。」

「いる、いる、ほら、あれがそうらしい。」

黒い点々々、

右の砂浜の尖端とつばな、

あ、ざんざら波、

一面の反射光。

銀、銀、銀、銀、

天気晴朗なれども浪高し。

ところで、白い帽子の白詰め襟の老ボーイ、食堂の入口に現れるなり、燦爛さんらんと、さて悲しげに笑ったが、左に銅鑼どら、右に撥ばち、じゃん、じゃらん、らんらんらん。

「一杯やるか、麦酒ビールでも。」

「祝杯、よかろう。」

——麦酒、正宗まさむね、サンドウイッチ、サイダア、牛乳、餡パン、マツチ、新聞、——

あ、坊やの声だ。隆太郎りゅうたろう、隆太郎。

第三光景

赤塗りの羽目板の家はたしかに監視人の小舎であった。

ほんの掌^{てのひら}ほどの畠、刺身のつまほどの菜っ葉。

塩漬肉の貯蔵庫、

撲殺人の粗末な宿所、その外の砂地に散乱した白い獣骨、鬱^{うこん}金色の岩菊。

此処まで上陸するにはそれこそ一通りの騒ぎでは無かったのだ。

迎えのモオタアボートが伝馬^{てんま}を引つ張つて来て辛うじてロツプを投げる。ブリツジが激しく上下する。凄まじいブリユブラックの波の凹^{くぼ}み、その凹みの底にひたと吸いついた欄^て干^{すり}の眼、眼、眼。

米領「プリビロフ」露領「コンマンドルスキー」そうしてこの日本領の海豹島（露名、チュレニ島、ロツペン島）。世界に三つしかない膾^{おとせ}膾^{せい}の蕃殖場だ。絶海の孤島であるこの海豹島には人間のための伝馬などは二隻と用意されてあるはずもなかった。だから一組二十人として十五回に分乗することとなった。一同が上陸しおわるまでに半日はかかる。

と、それぞれの見物の時間は極めて短縮されてあらねばならなかった。にもかかわらず、私たち二人は特別に最初から渡つて最終まで居残らして貰おうというのだ。危険な瀬踏せぶみも承知の前である、真つ先に私がブリッジを駆け降りると、続いて庄亮、その他のロッペン団員がおなじく斜めの飛沫しぶきで濡鼠になりながら、パツパツパツと伝馬へ躍り込む。

「万歳。」と上から歓呼した。

たちまち、波濤が溪谷になり、丘陵になった。

「やつ、海豹あざらしじゃないか。」

頭のぬめつこくて円い、黄色い頬つぺたの、眼の柔らかな、髭の目だつ、人魚のようなのが上半身を出すと、またすぽと潜もぐつてしまった。

「行けつ、スピード。」

私は、そうだ、全く胴ぶるいを禁じ得なかったのだ。

海豹島、幾万の膾蓘獸と、海豹と、海驢あじか。

想像だも及ばぬ未知の世界がもうすぐに私たちの眼前に展開されるのだ。

と、横合から、なだれが、波飛沫が滝のように落ちかかって来た。私たちは外套をひつかぶった。

それからどうにか伝馬を着けると、ひらひらと板子いたごの上を駈けて渡った。それからのことである。

前にいった赤い木造の監守小舎の横から、島の上へとつけた道がある。登りかけたころで、

ぎやお、わお、がお、うわアああ、わお、

ぎやおお、うわうう、ぎやお、わあ、わお。

囂々ごうごうとして、騒々として、漠々として、瞑々として、恢々かいがいとして、何ともつかぬ無数の肉音にくおん声しやうが、蒼い蒼い向うの麗光の空から吼えとどろいて来た。いや、東の空いっばいに響き返して、まだ見えぬ岩壁の下から下から湧きあがって来た。耳も聾ろうするばかりのその怒号、吼哮ほうこう。

愕然として佇ち留たつたは私ばかりではなかった。

と、蒼蠅あおばえだ、緑金の点々りよくこん々が真向から目を撲うち、頬を撲ち、鼻を撲ち、口を撲ち、たちどころにまた紫の螺旋らっせんの柱となつて襲いかかった。

私たちは夢中に駈け上つた。有頂天で。

岩角へのしかけて、三方に板を囲つた見張り櫓やぐら。二人ぐらしか並べない樋とのような監

視所、その板囲いの隙間から、直下の砂浜を差し覗いた——この驚駭、この動顛、この大畏怖、この寂光。

何とこの無人の、原始の、海獣の渾沌世界の、狂獣の、争鬪の、蕃殖の、赤裸々の、瞬間の、また永遠の真実相であろう。

無慮三万の膾膈獣、

と聞いた。

「あつ被服廠だ。」

肉眼で観た、全く。

累々とした被服廠の死屍、まるであの惨憺たる写真のとおりだが、これはまさしく現実
に活動し、匍匐ほふくし、生殖し、吼哮する海獣の、修羅場しゆらじょうの、歓楽境の、本能次第の、無智
の、また自然じねんほうに法爾の大群集である。

ぎやお、わお、がお、うわアああ、わお、お、お、

ぎやお、うわうう、ぎやお、わお、わお、おう。

この不可思議な、この世のものとも思われぬ光景は、このグロテスクな黒褐色の群棲の

集団は、言語にも想像にも絶したこの北海の臘轔獣の生活は。

私は観た。右を、左を、前方を、下を。

左の岩壁には、頂上には、密集した黒と白とのロツペン鳥が幾層積を成して、規律正しき燕尾服の紳士行列を作っている。また進行しつつある。

岩菊、浜菜、もるちの花はなむら叢、あかざ藜に茅萱ちがや、

黄だ、黄だ、黄だ、緑だ、金だ。

その下の砂浜一帯の海獣の裸臥像である。

また遠浅の遊泳群の擾乱である。飛沫しぶきである。

頭、

頭、

頭

頭

頭、頭、

頭

である。

何とまた空は蒼く、海は無際限に黒く、日は燦爛と明るいことだ。

見ろ、この膾葜獸の集団を。

ぴたぴたと潮に濡れた膾葜獸は頭が円く、毛がなめらかに、いかにもその後ろ姿までがしなやかに見える。黒い魚のような皮膚の光沢をしている。

だが、陸に上つて既に日に乾いたものは熊のように黄褐の毛が逆立ち、頬の髭が強く張つて、いかにも獐^{ねい}猛^{もう}な巨獸の相を現す。

牛のごとく吼ゆるもの、

凶体の憎々しく大きく、群獸をぬいて高く怒号するもの、

うそぶき、笑い、闊歩するもの、

孱弱^{かよわ}く疲れていざり寄るもの、

ごろりと仰向きに臥ている牡^{おす}、右の前鰭^{ひれ}で、はたりはたりと煽いでいるもの、

(暑いんだな、あいつ鰭^{うしろ}を団扇^{うちわ}にしているんだ。)

へとへとに熟睡しているもの、

乗しかかつて噛み合い、吼え合い、

血を流し、また荒れ狂うもの、

逃げるもの、追いかけるもの、

悠々と独歩し、離れてまた幽かに遊んでいるもの、

爛々と睨み、

驚いて救いを求め、

阿諛し、哀願し、心身を他の蹂躪に委せて反抗の気力も失せはて、氣息また奄々

たるもの、重なり重なり乗り越え、飛び越ゆるもの、

乳児を抱き、哺乳するもの、

匍い寄り啼き寄る幼獣、

また、強者に虐殺された死屍、腐れて啄まれる胴体、

砂をかけ合う無邪、

旺盛な精力、実にすばらしい生殖慾、

母愛の権化、

煩惱、嫉妬、反噬、

頭と頸とを重ね、

口を寄せ、

また無関心に蹲り、眼を瞑り、

急に驚いて鰭を振るもの、

海に飛び入り、

連れて飛び入り、

跳躍し、潜水し、駛走するもの、

泳ぎ返るもの、

子を泳がせ、また突き落とし、

魚群をしきりに追いつめるもの、

鳥の毛の飛ぶふわふわを捉えんとしては身をすくめるもの、

鳥の毛といえ、こうした真夏の岩壁寄りを幽かに風に吹かれて飛ぶものもある。

白いのは千鳥、

群獣の中にあるのは雪のようだ。

華魁鴨は嘴が黄色く、頬が白く、羽は褐色である。その鴨もいる。

海鳴もいる。

黒い鵜の鳥も岩の角には巢喰っている。

ロツペン鳥も下りている。鷗はまた膾葜獣の棄てた胎盤をもらうのだ。
そして、また、

飛ぶ、

飛ぶ、

飛ぶ、

飛ぶ。

ぎやお、わお、がお、うわアああ、わお、おお、
ぎやお、うわうう、ぎやお、わお、わお、おう。

吼える、

吼える、

吼える、

吼える、

吼える、

ぎやお、わお、がお、うわアああ、わああ、おおおお。

遅ましく牝牛のような巨獣の王が、また
首を高くもたげて仰いだ。

太陽は空にあるのだ。

海豹島 その二

読者諸君。

私は監守の小舎を訪ねた。

先客にはすでに白髪はくはつはくせん、白髯はくぜんの和製タゴール老人がいた。監守は相当の年輩に見えた。

黒の制服をつけ、謹直な、素朴な態度で彼に応対していた。

粗末なガランとした室内、大きなテーブル、椅子四、五脚、多少の器具、雑書、壁に引かけた帽子、外套、極めて簡素で単純な色彩であった。

私は一揖いちゆうして、タゴール老人の傍に坐った。話題は無論この島における膾葜おつとせい獣の生活以外のものであるはずはなかった。

私が今現像しようとしている幾多の映画は眼前しよくもく 目の大驚異に、加うるに監守の某氏の談話と樺太庁内務部の発行にかかる印刷物「海豹島と膾葜獣」とより得たる知識に基づいたものであることをいつて置く。

そこで映画「ハーレムの王」となる。

ハーレムの王

序画

うわおう。

天を仰いで咆哮する巨大な海獣一頭、

髭荒く、牙鋭く、頭毛逆立ち、眼光爛々らんらんとして、高く上半身を起した。

臙肭おつとせい獣の成牡せいぼ（ブル）、年齢八、九歳、体重八十貫、牡牛おうしのごとき黒褐色の巨軀きよく、

ハーレムの王である。

うわおう。

再び彼は咆哮した。

堂々たるその勇姿、絶倫の性慾、全身の膨脹、悪戦苦闘の恐るべき忿怒相ぶんぬと残虐性せうふ亢奮こうふんとは今や去って、傲然たる王者の勝利感と大威力とに哄笑し快笑し、三度また頭を高こうく、激しくうち振った。開いた前肢ぜんし、嘲りあざけ嘲り、巨軀を搔き、また搏はたきうつ後肢こうしの鰭ひれ。

砂上だ。

背景は燦々たる白光、

飛沫黒き波濤の連続、オホーツク海の水平線。

うわおう。

ぎゃお、わお、がお、うわアああ、わああ、

おおおおお。

一

来く。

来る。

来る。

来る。

来る。

来る。

来る。

来る。

来る。

来る。

来る。

来る。

来る。

来る。

来る。

来る。

来る。

来る。

来る。

来る。

先駆し、雁行し、競走し、

簇々ぞくぞくと、

騒々ぞくぞくと、

団々ぞくぞくと、

点々ぞくぞくと、

来る。

来る。

来る。

来る。

来る。

来る。

来る。

来る。

来る。

来る。

来る。

密集し、乱擾し、軋轢し、潜航し、

跳躍し、

跳躍し、

跳躍し、跳躍し、跳躍し、

ああ、燦爛、冥々、燦爛、陰々たるオホーツク海一面の反射と影、影、影。

飛沫、
ひまつ

飛沫をあげ、

飛沫をあげ、

飛沫をあげあげ、

すばらしい海獣の群、おつとせい 膺牒獣の成牡（ブル）の水雷、黒褐の無数の肉弾。

千頭、二千頭、三千頭、五千頭、

と、

飛んだ、

宙に大きく近く、

ロツペン鳥だ。
ちよう

耿^{こう}として白く、また黒く、燕尾服の、

両翼を張って、ひらりと、

画面を横断して、

消える。

と、

飛ぶ、飛ぶ、

飛ぶ、飛ぶ、飛ぶ、

飛ぶ、飛ぶ、

飛ぶ、飛ぶ、飛ぶ、飛ぶ、

飛ぶ、

飛ぶ、

「キイキイキイ、待ってた。」

「キイキイキイ、来た来た。」

「キイキイキイ、万歳。」

「キイキイキイ、万歳。」

「キイキイキイ、ハーレムの諸王万歳。」

時は五月の中旬、珍らしい晴天、

ロツペン鳥渡来後一ヶ月、

樺太は東海岸、北知床岬しれとこの南方十海渚かいり、岩島は海豹島の前面、東方。

「ロツペン鳥万歳。」

「万歳。」

「異変ないか。」

「無し。」

よしと、先駆の海獣、

挺身した、高く高く、

一飛躍。

二

岸壁の断層——数万羽のロツペン鳥、

画面を斜めに仕切った砂浜、

波打ち際の

噴水のごとき飛沫、ひまつ飛沫、飛沫。

来た、来た。

黒褐の肉体の波、波、波、重く、濃く、滑らかに、張り満ち膨れて、弾力性の、眼の光る、髭の立った、重なり重なり打ち寄せ押し寄せ、後から後からと部厚に部厚にうねりうねり、盛りあがり躍り立つ、——おつとせい膺胸獣の波、咆哮、ほんとう奔騰、

がばと上陸した、

一頭、

二頭、三頭、四頭、数十頭、

われが我勝ちにと、ずぶ濡れの頭をうち振ると早くも背後をふり向き、牙を鳴らし、前脚をはたいた。だが、

来る。来る。来る。

後から後からと続いて来る。

飛ぶ、飛ぶ、ロツペン鳥がひるがえ翻る。

「ハーレムを、ハーレムを。」

彼ら成牡（ブル）の大群集はかくして海豹島の東面の砂浜に上陸する。自己のハーレムを形成すべく第一に地位の先取権獲得、次では生存の上の決定的優勝が各自に期せられてあらねばならぬ。生か死かである。

排他、脅迫、防禦、突進、乱闘、流血、

ぎゃお、わお、がお、うわアああ、わお、お、お、

ハーレムとは一の成牡（ブル）を中心として成^{せい}牝^{ひん}（カウ）の多くは百頭三百頭の集団である。

見よ、見よ、如何なるブルが最勝の最大のハーレムの王たり得るかを。

英雄児よ、来^{きた}れ、

肉弾中の肉弾。

飛ぶ、

飛ぶ、

ロツペン鳥は飛ぶ。

三

濃霧だ、

月光だ、

陰惨たる岩島、

画面を黒く、真直ますぐに截断した岩壁の一角かく、
鳥。

冥々、闇々、

咆哮、

悲鳴、——血、血、血、

あ、蒼白い月光、たちまち、

薄らぐ霧、

海獣、海獣、海獣、

肉迫、乱闘、乱噬らんぜい、

ぐわう、ぐわう、がおかお、
わわわわ、わおわおわお。

濃霧だ、また、

岸壁の一角、
鳥。

四

曇天、
びようびよう
渺々たる黒い水平線、
時として閃々たる白光。

進む、進む、
画面は左へ左へ。

点、

点、

点。

海獣の頭だ。

あ、^{もぐ}潜った。

いる、いる、いる、

無数の廃残者、

海中の遁走者、^{おつとせい}膾葜獣、

弱者、負傷者、

老大獣、

力尽き溺るるもの、波とともに盛りあがる、死屍、腐爛した頭。

再び跳躍し、潜行し、

飛沫^{ひまつ}をあげ、

飛沫をあげ、

海浜ちかく泳ぎよるもの、

あらた新に突き落され、噛み落され、抵抗し、諦めず、血みどろに狂い、のたうち、もがき、

必死に狙い窺い、匍はいあがり、

また噛み合い、飛び越え、

どうてん動顛し、

仰臥し、

乗のしかかり、

と、

灰黒色の大きな鱗ひれ。

殺やった、

あ、ブラボウ、

巨大な、若い英雄、ブル。

くわつとあけた口、

上顎、舌、
両頬の髭、
眼光。

五

砂上、黒雲の影、いよいよ盛んなる乱闘、
幾千の成牝（ブル）入り乱れてまさに修羅場しゅらじょうの壮観となる。
黒褐こっかつ、黒褐、黒裾、黒褐、黒褐である。

占領、奪掠、突撃、死守、
悶絶、再襲、

ああ、しかもまだ彼等が争鬪の主因たる成牝（カウ）たちは遙かな遙かな水平線の向う
にいるのだ。

ブルすなわち即情慾である。彼らは本能そのものなのだ。衝動は自然だ。

全身をあげて彼らは搏つ、生きるがためには、
惨害——自己と地位の確守だ。

勝て。

弱者は畢ひつきよう 竟するに弱者に過ぎないのだ。

勝て。

その外ほかは死だ。

眼、

眼、

おそろしく獐ねいもう 猛な二頭が向き合つた。

六

岩壁の一角。

鳥。

成牝^{カウ}が来た。

キイキイキイキー。

無数の

飛ぶ飛ぶ飛ぶ飛ぶ、ロツペン鳥。

晴天、

六月の上旬、成牝^{ブル}の来島に遅ること、二、三週後。

ああ、とうとう成牝^{カウ}の大群が来た。

聴け、海豹島の地響きを、動悸を。

九千九百の、

いや、一万、二万の花嫁が来たのだ。

七

新らしき曙あけぼのの波濤に乗り、オホーツクうなぎかの海阪を越え、渾沌として黒く漂う浮き脂の大
いなるうねりに幾万となく群集して膾蓘おつとせい獣の花嫁成牝カウらは来る。

しかもまた雲霞のごとく後から後から押し寄せるのだ。

北海の黎明である。

雲は微茫のうちにあつて暗く、霧は涯しなく吹き満ち、水平線のかなた遙かに澄みとお
る紫の空が透く。

その遙かな、太陽の生るるところより、生まんがために成牝カウらは来る。

彼女らは総てが懐胎しているのだ。

身は重く、しかも心は強く、世界の母性として、彼女らは万里の波濤を越え、風雨に堪
え、陣痛の苦と新生の輝かしい希望とを懐いだいて、永く忍び、永く忍びつつ、しかも衝つき進
むべくして衝き進みつつ、ああ、彼女ら成牝カウの大群が来る。

渺びようたる岩島海豹島こそは彼女らの光榮ある産褥さんじよくであり、新らしき、また盛んなる蕃

殖場である。

飛沫^{ひまつ}だ、

飛沫だ、

飛沫だ。

おお見よ、また、

朝^{ちやうとん}暎

すでに朱なりだ。

八

黒く、青い、ささ縁^{べり}のみ光った、全面の光らぬ波濤、

しかも重厚なうねりの盛りあがり、また雪崩^{なだ}れて、見るまに丘となり谿^{たに}となる。北海の
荒海である。その海豹島の波うちぎわ。

「花嫁が来た。」

一斉の咆哮、

驚天動地の大喜、世界の情慾。

それと見た幾千の膾炙（おつとせ）の成牡（ブル）はその波うちぎわに殺到する。鈍重な巨軀の逸（はや）りに逸った匍匐（ほふく）の醜態が今、一時にまた光り輝くばかりの黒褐の毛のなだれとなり、地響きとなり、奮いたつ香炎の放電体となる。

気早（きはや）なのは海中に飛び入り飛び入る。

驚くべき俊敏。すばらしい身軽（みかろ）さ。

飛沫が立つ、立つ、立つ。

砂上の乱闘。咆哮、咆哮、咆哮、

ぎやお、わお、がお、うわあああ、わお、おおお。

既に見よ、海浜に近づいて却って怯々として悲しく泳ぎ、恐れて潜（もぐ）り、驚いて退（しりぞ）きつつ、ひたすらに上陸する隙（すき）を窺（うかが）うて容易に果せぬ成牝（カウ）、

何と、あの顔のさびしさ、素直さ、

あつ、また波から

出した、出した。

あの眼、あの眼、

人間の母性に見る最も貴い、崇高なあの眼、あの眼。

やつ、飛びつく、飛びつく、

血みどろな、敗れてもなお弾き立つ情念、老いてもまだ衰えぬ生存慾、力尽きて海中に
噛み落された弱者、老犬の必死の争奪戦。

あつ、四方から挑みかかる、躍りかかる、

無慙——女獣は引つ裂かれたのだ。

一頭、また一頭、

英雄よ救え、ハーレムの最大の王たるべきブル。

ぎやお、わお、がお、うわあああ、わお、おお、

飛び入る、飛び入る、飛び入る。

しかもその時、牡牛のごとく猩々熊のごとき巨大なブル、

たちまちにして天を仰いで咆哮すると見るや、※然とばかり飛び入った、たたた。
万歳。

だが、だが前から前からと襲走する。後から後からと挾撃する。
容易に上陸できそうにないのだ。

飛沫、飛沫、

なんと悲しい女性。

だが、だが、激しい陣痛の兆候は来る。生まれんとする者は胎内に張りつめる。何としても、死んでも生まなければならぬのだ。

必死のカウの上陸となる。

たちまちまた、波うち際の、前にも増した肉弾戦、咆哮、乱噬。

むしろ凄惨な男性の性慾、暴力、所有慾、茲にしてまた引つ裂かれる女性の犠牲死体が、じりじりと日光と砂熱とに焼け爛れるのだ。

飛ぶ、飛ぶ、

飛ぶ、

ロツペン鳥。

や、や、処女獣の大群が来た。あの中にこそ未だ汚されぬ、しかも愈々いよいよ花のごとく成熟した女性が、真の花嫁がある。

九

同じく砂浜、

岩角、監視所の下、

ハーレムの諸王万歳、

ハーレムの小なるも大なるも、既にその位置に拠つて形勢された。

小なるは二、三頭のカウを、大なるは幾十のカウを、更に最も大なるは、百頭のカウを、それぞれに収容し、また神聖なる処女獣の幾頭をその保護の下に置いたもとハーレムの諸王たち万歳。

大洋は、びようびよう 渺々たり、日光は燦爛たりである。

咆哮せよ、

汝らは勝つたのだ。

警戒せよ、

弱きはまた、追われ、殺され、盗まれるのだ。

不眠不休だ、ああ、これから愈々。

岩角、監視所、

木の囲いの上から大きな人間の顔が出る。

十

巨大に引き伸ばされた おうごんしよく 黄金色の岩菊の花、
その岩壁の下の はなむら 花叢、
太陽光は輝々としてその花叢にある。

微風びふうが花卉を動かしました耀やかす。

七月の静謐せいひつ、

黒と白との寛洪な燕尾服の紳士、ペンギン鳥の従弟いとこ、ロッペン鳥が、その上の岩壁の突と処つしよに立つている。

横向いて、なんと長閑のどかなそのまろい眼だ。おりおり岩菊の蕊しべを覗き込む、
蟻の黒い大きな触角が動く。

と、すばらしく拡大された幼獣のなめらかな黒い頭と前肢まえあしの両つふたの鰭ひらとが幕面の右下から匍はいあがって来る。

なんとその面かおの眼の可憐なことだ。

微風が花卉を動かし、また耀やかす、

膾炙はいしの児はすでに生れているのだ。おそらくは生後一ヶ月は経つていよう。彼らの母は上陸すると間もなく輝きらやかなしい産褥さんじょに就いた。ハーレムの王たる英雄ブルの絶大の愛と保護とによつて。

生れたものに幸さいわいあれ。

微風が岩菊の花卉を動かし、また輝きらやかす。

何か深く聴いている
 巨大な蟻の触角である。

十一

ここで、諸君、かつて記した海豹島第三光景となる。この「十一」の映画は惜しいかな、前に切り取って映したのでここには復写せぬ。が、とにかく、三万頭の膾炙獣により成る数千百のハーレムにおける割^{かつきよ}抛、争奪、保護、飛血、生殖、哺乳の大歓楽境大^{だいしゅらじよ}修羅場を現出する。悪戦苦闘のブルどもは不眠不休、飲まず食わずしかも絶倫なる精力はその残虐と流血と肉弾戦の間にも驚くべき性殖力を発揮する。

殊にハーレムの王中の王、その最勝王ブルは三百頭の成牝^{カウ}と交接し、その懐胎するに到るまで続けて抱擁し、その三百頭ごとごとくを懐胎せしむる。そうして、ようやくにしてハーレムを解放するのである。

成牝^{カウ}の体臭。

想像だも及ばぬ生きた「被服廠の死屍」さながらの、累々たる黒褐の、頭の、図体の、

鰭脚の、本能次第の、無智の、性慾そのものの、阿修羅の、また自然法爾の大群集、その大群集を見よ。

ぎやお、わお、がお、うわアああ、わお、おお、

ぎやお、うわうう、ぎやお、わお、おう。

ぎやお、わお、がお、うわアああ、わお、おお、

ぎやお、うわうう、ぎやお、わお、おう、

ぎやお、わお、がお、うわアああ、わお、おお、

ぎやお、うわうう、ぎやお、わおおう。

だが、これらの強大なハーレムも遂には分裂する。何れは三、四ヶ月の間だ。十月十一月、寒風の吹き荒むとともに、懐胎したカウの大群集は成長した幼獣、処女獣と南方に向つて去り、半成牡はんせいぼも去り、そうして、かの絶倫なる諸王、ブル中の英雄たちも、不眠と絶食と間断なき性交とに、疲労困憊の極きよくは、へとへとによるようになってようやくに後から蹶ついて去るのだ。ああ、だが、今は今は歓楽の酣たけなわである。

十二

同じく海豹島は砂浜の南端、群棲場の光景。

哀れなるかな、激烈なる生存競争に敗れて氣息奄々たる、一頭の成牝若くは処女獣をさえ収め得ず、小なる小なるハーレム一つ創り得ずに止む永遠の孤独者、または昨の英雄、かつてのハーレム中の獯猛者、しかもまた老奮わぬ今日の悶々者、かつはまた既に煩惱の兆して、未だ力弱き半成牡。

恥さらしの、孤独地獄の、しかもまた累々たる半死の膾膈獣の群棲場。

北の、砂浜つづきのすぐ近くには盛んな蕃殖場、咆哮、生殖、大歓楽。

眺めては眺めては悲しそうな、悔しそうな、諦められぬ、どうにもなれぬ、死にも死なれぬその眼、眼、眼、眼。

彼らをこそまた、監視所の人間どもは撲殺してまわるのだ。暁天に、月夜に。

しかもまた、彼らの群棲場には一羽のロツペン鳥すら、ああ、頬の白く嘴の黄色い華魁鴨の姿すら、小さな海鴨さえ、飛んでも来なければ、羽ばたいても遊ばないのだ。

今さら蕃殖の能力なき彼ら、彼等は早晩撲殺されるのだ。撲殺されて毛皮は売られ、肉は塩漬けにされ、また野師の手に買われてしまう。

「ええと、皆さん、ここもと御覧に入れまするは、樺太海豹島は膾肹獸の塩漬け肉でござい。何々ピン以上の滋養強壯剤、陰萎、腎虚の大妙薬、物はためし、効能靈驗、万病の持薬、このごろ流行の若返り法などとは論外、ええ、膾肹獸の腎蔵——。」

波も嘲る。^{あざけ}波も嘲る。

沖には処女獸、

ひらひらとロツペン鳥。

雲は白い白い。

十三

群棲場の前の波、波、黒い波、

小さな岩、

岩の上には小さな黒い頭の膾肹獸^{おつとせい}の幼獸がいる。

一頭、

また匍いあがる一頭、

二、三頭、

波が来る。つるりと滑り落つる幼獣、あつはつはつは、これはおもしろい。

三方四方からまた匍いあがる。

また波が揺り越す。

また滑り落つる。

なんと可憐な小供であろう。彼らは嬉々として遊ぶ、遊びを遊ぶ、日光と風と波とに。

何たる無邪、何たる永遠相。

ああ、また飛沫ひまつをあげ、飛沫をあげて、澆刺はつらつと泳ぎ、潜り、また跳りはぬる三、四歳

の小供ども。

海は彼らに笑っている、永遠にもかなの愛しく。

説明者、

『童謡「北の海」を御紹介いたします。』

黒くて光らぬ

オホーツク海の波は
ざんざんざぶりこと
岩うつばかり。

岩へとあがるは

おつとせいのごども、
ざんざんざぶりこと
波が来ておとす。

またまた、顔出す

おつとせいのごども、
ざんざんざぶりこと
波が来ておとす。

いつまで遊ぶぞ

おつとせいよ、波よ、

ざんざんざぶりこと

お月さまあがつた。

幕面の光景、次第に月明^{げつめい}になる。

蒼茫とした岩のうえの幼獣の群れ、

霧が幽かに飛ぶ。

十四

第「一」の一頭の巨大獣再写。

天にうそぶけ、

ハーレムの王中の王、その最勝最大の王たる英雄第一のブル。

十五

波濤、波濤、波濤、

渺たる海豹島の遠景、

暁天、

たちまち、

幕面を斜めに切つて映つたロツプ、

大汽船の鉄欄てすり、

半側だけ見える巨大な通風筒、

と、ゆらりと、葉巻を啣くわえて出て来た支那服の北原白秋、

その顔が大きく微笑すると、微笑しつつ、いよいよ大きく、更にいよいよ大きく幕面いっばいになる。

「ハーレムの王」

畢^{おわり}

卷末に

大正十四年八月、私は鉄道省の主催に成る樺太觀光団に加わつて、二週間に亘る汽船高麗丸ままるの航海を楽しんだ。横浜から小樽、国境安別あんべつ、真岡まおか、本斗ほんど、豊原とよはら、大泊おおどまり、敷香くかと巡遊して、最後にその旅行の主要目的地であつた海豹島かいひょうとうの壯觀に驚き、更にオホーツク海を南下して北海道の稚内わっかないで一同と別れた。そうしてまた旭川でアイヌの熊祭を觀、札幌に淹留えんりゆうし、函館より海を越えて当別とうべつのトラピスト修道院を訪ねた。ただこのフレップ・トリップは主として樺太における收穫である。觀光団解散後の北海所見は、いづれ機を得て稿を改めるつもりである。この行は初めより歌友吉植よしうえし、庄亮君しょうりやうと伴であつた。

フレップ・トリップ。樺太葡萄からふとぶどうの紅い実と黒い実。

八月の日光、南風、波濤、

丈余の蒔ふきと虎杖いたどり、

パルプと断截機、

燦爛たる楡にれの微笑、 火焰菜かえんさいと燕麦、 緬羊めんようと白樺、 驟雨、 驟雨、 驟雨、
黒とどの原生林、

露人の家々、

ツンドラ地帯の極楽園。

ああ、海豹島、三万の膾膾おつとせい獣と三十万のロツペン鳥ちよう。

今思うても実に愉快な旅行であつた。

若かれと私は叫ぶ。

若かれ、若かれ、若かれと。

青空文庫情報

底本：「フレップ・トリップ」岩波文庫、岩波書店

2007（平成19）年11月16日初版第1刷発行

底本の親本：「白秋全集 19」岩波書店

1985（昭和60）年6月5日初版発行

初出：「女性」プラトン社

1925（大正14）年12月号～1927（昭和2）年3月号

※「蹂躪」と「蹂躪」の混在は、底本通りです。

入力：kompass

校正：岡村和彦

2012年10月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

フレップ・トリップ

北原白秋

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>